

靈界物語 第五二卷 眞善美愛 卯の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五二卷』愛善世界社

2005(平成17)年08月16日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。

編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

目次

序文 じよぶん

總説代用 そうせつだいよう

第一篇

鶴首專念 かくしゆせんねん

第一章 眞と偽 しんぎ（一三三七）

第二章 哀別の歌 あいべつうた（一三三八）

第三章 樂屋内 がくやうち（一三三九）

第四章 俄狂言 にはかきやうげん（一三四〇）

第五章 森の怪もり〔一三四一〕

第六章 梟の笑ふくろ〔一三四二〕

第二篇 文明盲者ぶんめい まうじや

第七章 玉返志たまかへし〔一三四三〕

第八章 巡拜じゆんぱい〔一三四四〕

第九章 黄泉歸よみがへり〔一三四五〕

第一〇章 靈界土産れいかいみやげ〔一三四六〕

第十一章 千代の菊ちよ〔一三四七〕

第三篇 衡平無死かうへいむし

第一二章 盲縞めくじま〔一三四八〕

第一三章	黒長姫 <small>くろながひめ</small>	〔一三四九〕
第一四章	天賊 <small>てんぞく</small>	〔一三五〇〕
第一五章	千引岩 <small>ちびきいは</small>	〔一三五一〕
第一六章	水車 <small>みづぐるま</small>	〔一三五二〕
第一七章	飴屋 <small>あめや</small>	〔一三五三〕

第四篇 怪妖蟠離くわいえうばんり

第一八章	臭風 <small>しうふう</small>	〔一三五四〕
第一九章	屁口垂 <small>へこたれ</small>	〔一三五五〕
第二〇章	險學 <small>けんがく</small>	〔一三五六〕
第二一章	狸妻 <small>りさい</small>	〔一三五七〕
第二二章	空走 <small>くうそつ</small>	〔一三五八〕

第五篇 洗判無料せんぱんむれう

第二三章 盲動まうどう（一三五九）

第二四章 應對盜おうたいぬすみ（一三六〇）

第二五章 戀愛觀れんあいくわん（一三六一）

第二六章 姑根性しうとめこんじやう（一三六二）

第二七章 胎藏たいざう（一三六三）

序文 じよぶん

靈界物語口述開始以來、種々雑多の學者やパリサイ人の妨害を突破し、漸くにして累計五十二卷の完結を告げました。瑞月に來れる精靈は、一種特別の記憶力に富んで居ると見えまして、肉體が一度見聞し讀み上げた書物の文意は其儘に記憶し居り、肉體の既に已に記憶を全然離れて居る文章でも、時々知らず知らずに口述し筆記することがあります。故に肉體人の瑞月が著はした文章の中にも、古今の學者が著はした文章を其儘平氣に書くことがあります。又精靈自身も自己の作物と信じて居るのは、靈界の消息に達したる哲人の能く知悉する所であります。不用意の中に物した瑞月の文章には、今日迄三十年の間に於て二三回も右様の事があり、それが爲に他人の文章を盗んだ様に非難された事があつて大に迷惑を感じました。又自分の口述や文章を他人の名義を以て新聞雜誌單行本等に掲載し、後に至つて自分の名に復して發表した事があるため、其間の消息を知らない人は異様に感じられた事もありました。其後は成るべく他人の著書を讀まない事にし

て注意を加へて居りますが、併しながら此長い物語の中には、或は種々の人の文
作が混入して居るかも知れりませぬから、一寸お断り申しておきます。併し今日の
學者の物した書物は、何れも古今聖哲の涎を集めたものたるは、賢明なる讀者の
熟知さるる所と考へます。凡ての明文は意志や想念の中に吸収され、それが時々
自發的に現はれ來るものなる事を考へて貰ひたいものです。

大正十二年二月十日

王仁識

桃園天皇の御宇、伏見竹田の郷北の入口に、薬師院と銘打つた修験者が現はれた。この者の奇怪なる行ひは端なくも人心を驚かし、遠近聞き傳へ、老若男女の日々門前に群集するもの踵を接して常に市をなし、恰も角力場のやうに雑沓することとなつた。その行術といふは七佛薬師の法と稱へ、祈祷者の身の上を語ることと一々符節を合する如くに適中するので、醫薬の整はない當時のこととて、人々は奇異の思ひをなして、只々有難し有難しと譯もなく信じ、その噂がそれからそれへと擴まり行き、京都からも三里の間を遠しとせず、徒歩々々と竹田に向ふもの引きも切らず繁昌した。その頃、近江國志賀郡石田村の百姓直兵衛と云ふ男が、年來の眼病で左眼が飛び出で、光明の世界から見放されたかの様に、唯一人暗室に閉じ籠り、療養に手を盡して居たが、人の勧めで美濃國間島で名高い眼科醫の治療を受けたけれど更に効驗なく、家内の愁嘆のみか、親戚の者も氣の毒に思ひ、各地の神社佛閣に祈祷などしたが一向に効が見えない。この時或者から伏見薬師

院の事を語り聞かされた。直兵衛は心に喜びつつ、わが多年眼病に悩まされ、日に月に痛み加はり、闇から闇へと長の年月を暮して来たので、所詮助かるまいとは思へど、先づ其薬師院とやらへ参り、若し治らぬとあらば愈それ迄と諦め、死して罪障の消滅を圖らむと、涙を流し哀れげに語らひながら妻子と共に旅の用意を整へた。庭はまだ薄暗い暁の光を浴びて村を立出で、途中輿を傭ひ、露深き草路を踏み別け、叢にすだく蟲の音を聞きながら、急ぎに急いで伏見の薬師院に着き、一刻も早く院主に面會せむとしたが、引き切れない程の群集に妨げられて、暫く臺所へ差控へてゐた。其日も早夕映して山の彼方を彩り初めた頃、遠は忙しかつた参詣人も次第に散じたので、直兵衛は左眼を押へて怖る怖る院主の前に進み、

「私は近江國石田在の百姓直兵衛といふもので、當年三十七歳になるのですが、今から六年前、不圖したことでより左眼を病み、朝夕に痛みは激しくなり増し、此頃は此様に眼球が飛び出し、風に當る事もなりません。何卒奇しき御祈祷が御願ひ申したい。併しこの眼が元のものになるやうとは願ひませぬ。せめて痛みだけ

なりと止まる様にお願ひ致したく、罷り出でました」

と潜々と涙を流して頼み込んだ。院主は始終を聞きながら、

「如何さまそれは難儀なことである。今宵は此處に籠らつしやい。吾に不思議の行術がある。汝が星を見て、その病が治るか治らぬかを答へて上げよう」

と言はれて、直兵衛夫婦はその儘院内に一泊することとなつた。その夜の八つ時と思しき時、院主は白衣姿で井戸側に立つて幾度か水を浴びて後、佛前に燈明を

点しつつ、夫婦の者を縁側に跪坐させ置き、呪文高らかに念珠を爪繰り、天の一方を仰いで頻りに祈り出した。やがて今迄雲脚急はしく曇り勝ちの空が拭ふが如

く晴れ渡り、煌々たる星の光り眩しく、一陣の風が襟元を襲うたかと思ふ折しも、北の方から一團の火光飛來して地上に墜落し、その音恰も雷霆のそのの如くであ

つた。夫婦は膽を潰し這はそも如何に、さても不可思議なる現象よと戦慄きつつ縁板の上に平伏して居る。院主はその時彼の火團に向ひ、何事が暫く呪文を唱へ、

念珠を揚げて發矢と撲ると、其火團は音もなく散亂して消え失せ、中から一羽の白鳩が鼓翼きして飛び去つた。院主はやがて威儀を正し直兵衛に向ひ、

「汝は最前より一箇の火光團を見たであらう、あれこそ汝の屬星ぢや。今わが法力に依つて、汝の屬星を降して病の根元を調べしに、如何にも其星には怪しき光があつたから、その光を被ひ除つてやつたのだ。日ならずして汝の眼病も全快するであらう。是ぞ即ち七佛薬師の加持の奇瑞ぢや。但しここに薬師夢想の靈薬がある。之を一二服與へるから、この薬を一日に二回づつ左眼に塗れば、七日の間には大方不思議のことがあるだらう」

と右の薬を取つて與へた。直兵衛の悦びは一方ならず、幾度か押戴いて納め、翌朝慇懃に禮を述べて歸國した。然しその眼病は依然として治らなかつたけれども、院主の不可思議なる法術が呼びものとなつて薬師院は非常に繁昌した。何れもバラモン教を守護せる魔神の所爲なることは言ふまでもないことである。この院主は幼名佐吉といふ小賢しい腕白小僧であつたが、バラモンの魔神に憑依され、巧に妖術を弄びて一角の祈祷師となり了せた後、伏見竹田の郷に本陣を構へて、薬師院快實と名乗り、表面には慈悲忍辱の衣を装ひ、その内心は豺狼の如き野心を藏し、世の善男善女を欺きしのみか、畏くも禁裡にまで侵入して天下の大事を惹

き起おこさむとし、辛からうじて九條關白直實公くでうくわんぱくなほざねこうのために看破かんぱせられ、終つひにその身みを滅ほろぼし
たるは隠かくれたる史實しじつである。邪神じゃしんは常住不じやうちゆうふだん斷だんに妖術えうじゆつ又は種々いろいろの方法手段はうはふしゆだんを講かうじて、
天下てんかを亂みだし世よを暗黒界あんこくかいに墮おとさむと企たくみつつかあるものである。讀者どくしやは此靈界物語このれいかいものがたりを
充分じゅうぶんに心こころを潛ひそめて熟讀じゆくどくせらるれば、今日迄こんにちまで口述こうじゆつせし五十二卷ごじふにくわんの物語中ものがたりちゆうに於おいて、邪じゃ
神しんの惡計奸策あくけいかんさくの如何いかなるものかを了知れうちさる事ことでありませう。五十二卷ごじふにくわんの口述終こうじゆつしゆう
了れうに際さいし、一例いちれいを擧あげて讀者どくしやの參考さんかうに資しする事ことと致いたしました。

大正十二年二月十日 舊十一年十二月廿五日

於教主殿

王仁識

第一篇 鶴首專念

第一章 眞と偽（一三三七）

人間の内底に潜在せる靈魂を、本守護神又は正副守護神と云ふ。そして本守護神とは、神の神格の内流を直接に受けたる精靈の謂であり、正守護神とは一方は内底神の善に向ひ、眞に對し、外部は自愛及び世間愛に對し、之をよく按配調和して廣く人類愛に及ぶ所の精靈である。又副守護神とは其内底神に反き、只物質的軀殼即ち肉體に關する欲望のみに向つて蠢動する精靈である。優勝劣敗、弱肉強食を以て最大の眞理となし、人生の避く可からざる徑路とし、生存競争を以て唯一の眞理と看做す精靈である。而して人間の靈魂には、我神典の示す所に依れば荒魂、和魂、奇魂、幸魂の四性に區分されてゐる。四魂の解説は已に既に述べたれば茲には省略する。荒魂は勇、奇魂は智、幸魂は愛、和魂は親であり、而し

て此勇智愛親を完全に活躍せしむるものは神の眞愛と眞智とである。今述べた幸魂の愛なるものは人類愛にして、自愛及び世間愛等に住する普通愛である。神の愛は萬物發生の根源力であつて、又人生に於ける最大深刻の活氣力となるものである。此神愛は大神と天人とを和合せしめ、又天人各自の間をも親和せしむる神力である。斯の如き最高なる神愛は、如何なる人間も其眞の生命をなせる所の實在である。此神愛あるが故に、天人も人間も皆能く其生命を保持する事を得るのである。又大神より出で来る所の御神格そのものを神眞と云ふ。此神眞は大神の神愛に依つて、高天原へ流れ入る所の神機である。神の愛と之より来る神眞とは、現實世界に於ける太陽の熱と其熱より出づる所の光とに譬ふべきものである。而して神愛なるものは太陽の熱に相似し、神眞は太陽の光に相似してゐる。又火は神愛そのものを表し、光は神愛より来る神眞を表はしてゐる。大神の神愛より出で来る神眞とは、其實性に於て神善の神眞と相和合したものである。斯の如き和合あるが故に、高天原に於ける一切の萬物を通じて生命あらしむるのである。愛には二種の區別があつて、其一は神に對する愛であり、一は隣人に對する愛

である。又最高第一の天國には大神に對する愛あり、第二即ち中間天國には隣人に對する愛がある。隣人に對する愛とは仁そのものである。此愛と仁とは、何れも大神の神格より出で來つて天國の全體を成就するものである。高天原に在つて大神を愛し奉るといふ事は、人格の上から見て大神を愛するの謂ではない、大神より來る所の善そのものを愛するの意義である。又善を愛するといふ事は、其善に志し、其善を行ふや、皆愛に依つてなすの意味である。故に愛を離れたる善は、決して如何なる美事と雖も、善行と雖も、皆地獄の善にして所謂惡である。地獄界に於て善となす所のものは、高天原に於ては大抵惡となる。高天原に於て惡となす所のものは、すべて地獄界には之を善とさるのである。それ故に神の直接内流によつて、天國の福音を現界の人類に傳達すると、地獄界に籍をおける人間の心には、最も惡しく映じ且感ずるものである。故に何れの世にも、至善至愛の教を傳へ、至眞至智の道を唱ふる者は、必ず之を異端邪説となし、或は敵視され、所在迫害を蒙るものである。併し斯の如き神人にして、地獄界の如何なる迫害を受け、或は身肉を亡ぼさるる事ありとも、其人格は依然として死後の生涯に

入りし時、最も聖きもの、尊きものとして、天國に尊敬され且愛さるるものである。次に隣人を愛する仁そのものは、人格より見て其朋友知己等を愛するの謂ではない。要するに大神の聖言即ち神諭より來る所の神眞を愛するの意義である。又神眞を愛するといふ事は、其眞に志し、眞を行ふの意義である。以上兩種の愛は善と眞との如くに分立し、善と眞との如くに和合する。

此物語の主人公なる初稚姫は、即ち二種の愛、善と眞との完全に具足したる天人にして、言はば大神の化身でもあり又分身でもあり、或時は代表者として其人格を肉體を通して發揮し給ふが故に、能く善に處し、眞に居り、如何なる妖魅に出會するとともに、少しも汚されず犯されずして、己が天職を自由自在に發揮し得るるのである。之に反して高姫は總て愛善と信眞とを口にすれども、其内底は神に向つて閉塞され、地獄に向つて開放されてゐるが故に、其稱ふる所の善は残らず偽善である。偽善とは表面より見て、即ち神を知らざる人の目に至善至徳のものと見ゆる事がある。又至眞至誠の言語と見ゆるも、それは總て地獄界に向つてある精靈の迷ひより來るものなるが故に、一切虚偽であり狂妄である。例へば雪

隱の蟲は糞尿の中を至上の天國となし、樂園となし、吾肉體の安住所とし、且此上なき清きもの美はしきものとなすが如く、地獄界に向つて内底の開けたる者は、至醜至穢なる泥濘塵芥及び屍の累々たる所、臭氣紛々たる所を以て、此上なき結構な所と看做すものである。併しながら高姫の肉體としては、矢張肉の目を以て善惡美醜を判別する能力は缺いでゐない。それ故に或時は殆ど善に近き行ひをなし、又眞に相似せる言語を用ふることがある。けれども肝心の内底が地獄界に向つてゐるのと、外部より來る自愛心と肉體的兇靈界の襲來とによつて、常に其良心を誑惑さるるを以て一定の善と眞とに居る事は出來ない。又純然たる惡に居る事も出來得ないのである。併し高姫の善と信ずる所、眞と思ふ所は、以上述べた如く、皆偽善なる事は言ふまでもない。

初稚姫は、愛より來る所の大神の神格より歸來する天人の薰陶を、其至粹至純なる靈性に攝受してゐたのである。總て高天原を成就する者は、何れも愛と仁とによらぬ者はない。故に初稚姫の人格そのものは所謂高天原の移寫であり、大神の縮圖である。故に其美はしき事は到底言語に絶し、形容す可からざる底のもの

である。其面貌言語乃至一舉手一投足の中にも、悉く愛善の徳を表はし、信眞の光を現じ給ふのである。故に初稚姫の如き地上の天人より溢れ出づる圓滿具足の相は、愛そのものによつて充されてあるが故に、何人と雖も、姫の前に來り、姫の教を受け、其善言美詞に接し、席を交へ交際する時は、衷心よりして自然に動かさるるに至るのである。されども悲しいかな、高姫は普通の人間と異なり、天國、地獄の兩界の中に介在する所の中有界に身をおきながら、尚も肉體的精靈即ち兇黨界、妖魅界に和合せるが爲に、初稚姫の前に出づる時は、忽ち癡狂となり癡呆となり、其美貌を見る時は、何處ともなく直に恐怖心を起し、且嫉妬し、善言美詞に接すれば、忽ち頭痛み、胸つかへ、嫌忌の情を起すに至るを以て、如何に初稚姫が神力を盡し、愛と善と眞を以て是に對し、あく迄も和合せむとすれども、之を畏れて受入れないのみならず、陰に陽に排斥し、且滅盡せしめむことを望むのである。而して或時は初稚姫を非常に尊敬する時もあるのである。實に名状す可からざる不可思議なる状態に身を置いてあるものといふべきである。

斯くの如く時々刻々に其思想感情の、姫に對してのみならず、一般の人に對し

て變轉するは、彼れが自ら稱ふるヘグレのヘグレのヘグレ武者たる珍思怪想を遺憾なく暴露してゐるのである。而して高姫はヘグレのヘグレのヘグレ武者を以て唯一の善となし、徳となし、愛の極致となし、信の眞と確信してゐるのである。高姫の思想は神出鬼没、動搖常なく、機に臨み變に應じて神業に参加する事を以て、最第一の良法と確信してゐるのだから、如何なる愛を以てするも、信を以て説くも、之を感化する事が出来ない、精神的の不治の難病者である。

總て人間各自の生命に屬する所の靈的圓相なるものがあつて、此圓相は一切の天人や一切の精靈より發し來り、人間各自の身體を圍繞してゐるものである。各人の情動的生涯、從つて思索的生涯の中より溢れ出づるものである。情動的生涯とは愛的生涯の事であり、思索的生涯とは信仰的生涯の事である。總て天人なるものは愛によつて其生命を保つが故に、愛そのものは天人の全體であり、且天人は善徳の全部であるといつても可いのである。愛の善と信の眞との權化たるべき初稚姫は、其靈的圓相は益々圓満具足して、智慧證覺の目より見る時は、其全身の周圍より五色の靈光が常住不斷に放射しつつあるのである。之に反して、高姫

はすべて虚偽と世間的惡に居るを以て、靈的圓相即ち靈衣は殆ど絶滅し、灰色の雲の如き三角形の靈衣が僅かに其肉身を圍繞してゐるに過ぎない。之を神界にては靈的死者と名付けてゐる。靈的圓相の具足せる神人には、如何なる兇靈も罪惡も近寄ることは出来ない。若し強ひて接近せむとすれば、其光に打たれ眼眩み、四肢五體戰慄し、殆ど瀕死の状態に陥るものである。之に反して圓相の缺除せる高姫の身邊には、一切の兇靈が臭きものに蠅が群がる如く、容易に且喜んで集合するものである。現界の愚昧なる人間は、斯の如き惡靈の旅宿否駐屯所たる人間を見て、信仰強き眞人と看做し、或は其妖言に誑惑されて、虚偽を眞となし、惡を善と認め、隨喜渴仰しておかざるものである。實にかかる人間は、神の目より見ては精神上の不具者であり、且地獄の門戸を競うて開かむとする妖怪變化と見得るものである。

人間は其愛の善惡の如何によつて、其面を向ける所を各異にしてゐる。初稚姫の如き天人は、大神及隣人に對して、眞の愛を持つてゐるが故に常に其面は大神に向つてゐる。故に何となく威嚴備はり、且形容し難き美貌を保つ事を得たので

ある。又高姫は自愛の心即ち愛の惡強きが故に、其面を常に神に背け、暗黒の中に呻吟しながら思ふやう……かくの如き暗黒無明の世界を、吾々は看過するに忍びない。故に自分は此暗黒時代に處し、天下萬民救済の爲に、いろいろ雑多に身を變じ、ヘグレ武者となつて、天の岩戸を開き、眞の光明に世界を照らし、萬民を助けねばならない。天國も淨土もなく、すべて三界は暗黒界と化し去れり。故に吾は神の命を受けて、常暗の世を日の出の御代に捻ぢ戻さねばおかないと、兇靈の言に誤られて蠢動してゐるのである。それ故常に心中に安心する事なく、如何にして自己の向上をなさむか、三界の萬靈を救はむかと、狂熱的に蠢動するのである。何ぞ知らむ、開闢の始めより天界の光明は赫灼として輝き給ひ、數多の天人は各團體に住して、其光輝ある生涯を送りつつある事を。併し茲に一言注意すべき事は、大本開祖の神諭に……此世は暗雲になつてゐるから、日の出の守護に致すが爲に因縁の身魂が表はれて、五六七成就の御用に盡す……とあるのは、これは決して高姫の言ふ如く三界皆暗しといふ意義ではない。大神より地獄道に陥れる此現界をして、天國淨土の樂土となし、一人も地獄界に墮さざらしめむが

爲である。要するに靈界現界を問はず、地獄なるものを一切亡ぼし、その痕跡を
も留めざらしめむと計らせ給ふ仁慈の大御心より出でさせ給うたのである。然ら
ば人或は云はむ、三千世界一度に開く梅の花、艮の金神の世になりたぞよ……と
あるではないか、三千世界とは天界、現界、地獄界のことである。天界は已に光
明赫々として無限に開け居るにも拘らず、何をもつて三千世界と言はるるか、果
してこの言を信ずるならば、天界もまた暗黒界と墮落せるものなりと断定せざる
を得ないではないかといはねばならぬ……と。かくの如きは其一を知つて其二を
知らざる迂愚者の論旨である。三千世界一度に開くといふは、現界も地獄界も天
界も一度に……即ち同様に光明赫々たる至喜至樂の樂園となし、中有界だの、地
獄界だの、天界だの、或は兇靈界だのいふ、いまはしき區別を取除き、打つて一
丸となし、一個の人體に於けるが如く、單元として統治し給はむが爲の御神策を
示されたるものたることを悟るべきである。一度に開く梅の花とか、須彌仙山に
腰をかけとか云ふ聖言は、要するに神に向はしむるといふ意義である。如何なる
無風流な人間でも、梅の花の咲きみち、馥郁たる香氣を放つを見れば、喜んで之

に接吻せむとするは、人間に特有の情である。また須彌仙山とは宇宙唯一の至聖
至美にして崇高雄大なる山の意味である。何人と雖も、雲表に屹立せる富士の姿
を見る時は、其雄姿にうたれ、莊嚴に憧がれ、之を仰がないものはない。又俯
ては決して富士を見る事は出来ない。故に神は所在人間及精靈をして其雄大崇高
なる姿を仰がしめ、以て神格に向上せしめ、神の善に向はしめむが爲である。併
し神に向ひ、或は須彌仙山を仰ぐといふは、現界に於ける富士山そのものを望む
時の如く、身體の動作によつて向背をなすものでない。何となれば空間の位地は
其人間の内分の情態如何によつて定まるが故に、方位の如きも現界とは相違して
あるのは勿論である。人間の内底の現はれなる面貌の如何によつて其方位が定ま
るのである。故に靈界にては吾面の向ふ所即ち太陽の現はる所である。現界に
ては太陽は東に昇りつつある時と雖も、西を向けば其太陽は背に負うてゐるが、
靈界にては總て想念の世界なるが故に、身體の動作如何に關せず、神に向つて内
底の開けた者は、いつも太陽に向つてゐるのである。併しながら斯くの如き天人
の境遇にある人格者は靈界に在つて、自分より大神即ち太陽と現じ給ふ光熱に向

ふにあらず、大神より来る所の一切の事物を喜んで實踐躬行するが故に、神より自ら向はしめ給ふ事となるのである。平和と智慧と證覺と幸福とを容るものは高天原の器である。之を稱して新宮壺の内といふ。此壺は愛であつて、大小なく神と相和する所のものを容るる器である。現界に於て、智慧證覺の劣りし者、又は愛善の徳薄く、信眞の光暗かりし者が、天界の天人又は地上の天人やエンゼルと相伍して遂に聖き信仰に入り、愛善の徳を養ひ、信眞の光を現はし、遂に智慧證覺を得、高天原の景福を得るに至らしむべく、ここに神は精靈に其神格を充して預言者に來らしめ、地上の高天原即ちエルサレムの宮屋敷に於て、天國の福音を宣べ傳へさせ給うたのは、實に至仁至愛の大御心に出でさせ給うたからである。善の爲に善を愛し、眞の爲に眞を愛し、之を一生涯深く心に植ゑ付け、實踐躬行したるにより、終に罪惡に充ちたる人間も天國に救はれて、其不可説なる微妙の想を悉く攝受し得べき聖場を開かせ給うた。之を神界にては地の高天原と稱へられたのである。

かくも尊き神界の御經綸をも辨へず、且つ信ずること能はずして、自己と世間

とのみを愛する者は、假令膝元に居つても之を攝受することは到底出来ない。自己を愛し、世間のみを愛する者は、却て此等の御經綸地を否定し、或は之を避け、之を拒み、甚しきは神界の經綸場を破壊せむとするに至るものである。されども神は飽く迄も天人の養成器たる人間を愛し給ふが故に、可成く彼等に接近し、彼等の心の中に流入せむとし給へども、彼等は却て之を恐れ、雲霞と逃去つて、忽ち地獄界に飛び入り、又彼等と相似たる自愛を有する者と相交はらむとするものである。……燈臺下暗し、足許から鳥が立つても分らぬ盲聾ばかりであるぞよ。神は一人なりとも助けたさに、いろいろと諭せども、こはがりて皆逃げて歸ぬ者ばかりで、助けやうはないぞよ。神は可哀相なれども、餘り人民が欲に呆けて、靈を惡神に曇らされてゐるから、眞の事が耳へ入らぬぞよ。神も助けやうがないぞよ……と歎聲をもらされてあるは、かかる人間に對して愛憐の涙を注ぎ給うた聖言である。

初稚姫の御再誕なる大本開祖は、神命を奉じて地の高天原に降り、萬民を救はむと焦慮し給ふに引替へ、其肉身より生れ出でたる肉體に正反對のものあるは、

實に不可説の深遠微妙なる御神策のおはします事であつて、大本神諭に……吾兒に約まらぬ御用がさして善惡の鏡が見せてあるぞよ云々と。信者たる者は此善惡兩方面の實地を觀察して、其信仰を誤らない様にせなくてはならぬのである。あ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・二九 舊一一・一二・一三 松村眞澄録)

第二章 哀別の歌(一三三八)

人間は天の高天原と地の高天原とを問はず、その靈域に昇るに際し、愈内に入るに從ひ、(即ち愈高きに昇るに從ひ)證覺と智慧とは愈増し來りて、其靈魂に光明を放ち、眞理に住し、嘗て難解の問題と思惟した事も、追々と感得するに至り得るものである。何れも皆斯の如き情態に進むは、大神より來る愛の力に依るものである。此愛なるものは高天原の一切のものを容るべき器なるが故である。

大神の御神格を其内分に受くること多き所の人間を稱して天的天人といふ。又内的天人、高處天人とも別稱するのである。高天原にも亦内的、外的の區別があり、内的の天界を高處天界といひ、外的の天界を低處天界と稱へられてゐる。而して天國に在る天人が居る所の愛を天愛といひ、在靈國の天人が居る所の愛を靈愛といふ。而して天國には大神は太陽と現はれ給ひ、靈國に在つては月と現はれ給ふ。初稚姫の如きは、どちらかと云へば天國天人の部類に屬し、嚴の御靈にして太陽の熱即ち愛の全部とも云つても可いのである。又言依別命は靈國に在る天人にして、信の眞に居り、月の光を以て其全部となし給ふものである。故に初稚姫は能く神を祭り、祝詞を奏上し、而して宣傳使や信者の模範となり給ひ、言依別命は智的方面に主として住し給ふが故に、宇宙の眞理を説き諭し、現幽神三界の眞相を明かにし、すべての原動力とならせ給ふ靈的天人である。木花姫命の如きは靈的天人の部に屬し給ひ、日の出神は天的天人の部類に屬し給ふ神人である。されども何れの神も、靈的天人にして天的天人たり、天的天人にして靈的天人たることは、其平素の御活動の状態に依つて悟り得るのである。

天國はすべて大神の祭司的國土にして大神の御住所である。靈國は大神の王土にして之を王座又は瑞の寶座とも云ふ。而して天國と靈國との交通の機關は、何れも媒介的天人團體の手によつて行はれてゐる。これも皆大神の思召に依つておかせ給うた所の交通機關である。初稚姫は又此媒介的天人の手によつて、或時は天國と交通し、或時は靈國と交通し、又は天國靈國一度に交通し給ふ事があつた。初稚姫の如き地上の天人は、媒介的團體の手に依らなくても、直に交通し得べきものと考へらるるなれども、一旦地上に降りて肉體人の境遇に居らるる間は、何うしても媒介者を通ずる必要があるのである。如何とならば、内的外的の兩方面の中に介在し給ふ天人なるが故である。

初稚姫は祠の森を立出でて、愈遠征の途に就かむとした。此時珍彦夫婦を始め楓及び幹部役員を始め、正しき信徒は、親の如く神の如く慕うてゐた此神人に別るる事を非常に歎き悲しみ、せめてモウ一日なりとも足を留められむことをと赤心より懇願して止まなかつた。されど初稚姫は、如何に愛らしき信仰に充てる人々が熱涙を流しての哀願も、之を受入るる餘地がなかつた。何故ならば、自分は

神かみより任まかされたる大神だいしんむ務むを果はたさねばならぬ身みの上うへである。そして一日いちにちも早はやく神業しんげふを完成くわんせいし天下てんかの害がいを除のぞき大神おほかみの前まへに復命ふくめいせなくてはならぬからであつた。初稚はつわかひめ姫ひめも哀別あいべつ離苦りくの情じやうに絆ほだされて、其内そのない心しんは、此處ここを立去たちさる事ことを非常ひじやうに惜をしんだのである。萬一まんいち吾われ此處ここを去さらば、未だ徳全とくまつたからず智慧ちゑし證しょう覺かくの薄うすき珍彦ちゆうひこを始め其他そのたの役員やくゐん信者しんじやは、又またもや強烈きやうれつなる曲神まがかみの爲ために誑惑きやうわくされ、折角せつかくの信仰しんかうを失墜しつづめせざらむやとの案あんじが残のこつてゐたからである。併しかし乍ながら齋苑いその館やかたに餘あまり遠とほからざる地ち點てんなれば、正勝まさかの時ときには綺羅星きらぼしの如ごとく立たち竝ならぶ宣傳使せんでんしが、何なんとか事務じむを繰合くりあして應援おうえんに來きて呉くれるであらう。さうすれば、自分じぶんはここを去さつても、さまで憂うれふべき失態しつたいは來きたさないであらうと一縷いちるの望ぞみを殘のこして、いよいよ心こころを勵はげまし、人情にんじやうの外そとに立たつて、神かみの爲ために活動くわつどうせむことを決意けついした。初稚はつわかひめ姫ひめは神しん殿でんに向むかつて訣別けつべつの辭じを述のべられた。其詞そのことば、

高天原たかあまはらの靈國れいこくを
祠ほらの森もりの聖場せいじやうを

地上ちじやうに移うつしまつりたる
珍ちゆうの宮居みやゐと定めまし

下つ巖根に宮柱した いはね みやばしら 太しく立てて永久にふと た とこしへ

しづまりいます三五のあななひ 皇大神を始めとしすめおほかみ はじ

左右の脇にあれまするさいう わき 百の神等御靈等もも かみたち みたまたち

珍の御前に謹みてうづ みまへ つつし 初稚姫が眞心をはつわかひめ まごころ

披陳し仕へ奉るひちん つか たてまつ 三千世界の梅の花さんぜんせかい うめ はな

一度に開く御神業いちど ひら ごしんげふ 精靈界や地獄界せいれいかい ぢごくかい

其外怪しき邪神界そのほか け じやしんかい 暗に彷徨ふ靈等やみ さまよ みたまたち

残る隈なく大神ののこ くま おほかみ 至善至愛の高徳にしぜんしあい かうとく

なびかせまつり愚かなるおろ おのもおのもの靈をばみたま

研き清めて心身のみが きよ しんしん 光を與へ天界のひかり あた てんかい

神の光に向はしめかみ ひかり むか 宇宙一切萬有をうちう いっさいばんいう

高天原の樂園にたかあまはら らくゑん 救はむ爲めの鹿島立ちすく た かしまだ

妾は若き身を以てわらは わか み もつ 魔神のたけぶ荒野原まがみ あらのはら

分けゆき進む身にしあればわ すすみ 醜の曲津は隙間なくしこ まがつ すきま

妾を亡ぼしなやめむと
隙を窺ひ待つならむ

ああ大神よ大神よ
如何なる曲の襲ふとも

醜の魔風のすさぶとも
聖き尊き御光と

愛の熱とに吾身魂
守らせ給へ皇神の

依さし給ひし神業を
いと平けく安らけく

事終へしめて大前に
一日も早く復命

申させ給へ惟神
御前に慎み願ぎまつる

旭は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

天變地妖は襲ふとも
神に任せし此身體

生死の外に超越し
愛の善徳經となし

信の眞徳緯として
撓まず屈せず何處までも

吾天職を守るべく
誓ひまつりし上からは

假令吾身は亡ぶとも
神に受けたる靈身は

千代に八千代に永久に
朽ちず亡びず活動し

幾萬年の後までも
此目的を達せずば
吾身の内に天國を
忽ち地獄は天國と
吾靈魂の天分を
守らせ給へ惟神
畏み畏み願ぎまつる

顯幽二界に出沒し
いかでか止まむ大和魂
開きて進む勇ましさ
神のまにまに立直し
完全に委曲に盡すべし
皇大神の大前に

と念じ終り、且珍彦以下の神の下僕が悪魔に誑惑さるることなく、惟神の大道を
遵奉し、其使命を全うせむことを懇願して大前を退き、珍彦の館に入りて送別の
宴に臨み、いよいよ此處を離るることとなつた。
珍彦は別れに臨んで歌をよむ。

久方の天津空より降りましし

君きみに別わかるる今日けふの悲かなしさ。

願ねがはくばせめて一日ひとひを此この森もりに

過すこさせ給たまへ嚴いづの生いき宮みや」

初はつ稚わか姫ひめ「珍うづ彦ひこの神かみの御言みことを如何いかにして

背そむくべきかは、ああされどされど。

惟かむ神ながらの言こと葉ばは背そむかれず

惜をしき別わかれを告つぐる苦くるしさ。

身みは遠とほくハルナの都みやこに進すすむとも

吾わが魂たましひは汝なれに添そひなむ」

珍うづ彦ひこ「有あり難がたし其その御言みこと葉ばを力ちからとし

柱はしらとなして神かみに仕つかへむ。

野のも山やまも荒あれに荒あれたる醜しこくさ草くさを

別わけて進すすます君きみぞ尊たふとき。

何なに事ことも幸さちあれかしと大おほまへ前に

朝あさな夕ゆふなに願ねがひまつらむ』

静しづこ子こ『貴うづつの君きみこれの館やかたへ出いでまして

聖きよき寶たからを與あたへ給たまひぬ。

目めに見みえぬ百ももの寶たからを與あたへられぬ

研みがきすまして神かみに捧ささげむ』

初はつ稚わか姫ひめ『目めに見みえぬ寶たからは朽くちず蟲むし喰くはず

いや永久とこしへに汝なが物ものとなるも。
信仰しんかうの徳とく充みちぬれば曲津見まがつみも
如何いかなる仇あだも襲おそふべしやは
『

静子しづこ 『妖幻坊高姫えうげんぼうたかひめの如ごとき曲津見まがつみが

來きたりし時ときは如何いかになさむか。

これのみが心こころにかかり日ひも夜よるも

眠ねむられぬ身みを救すくはれにけり。

さりながら又また思おもふかな曲津見まがつみの

襲おそひ來きたらむ例ためしなきやと
』

初稚姫はつわかひめ 『珍彦うづひこよ静子しづこの君きみよ楓姫かへでひめよ

心安かれ珍の聖地ぞ。

汝が身に高天原の開けなば

大蛇も鬼も襲ひ來べきや。

恐るべき吾身の仇は心より

神に背きし罪とこそ知れ

珍彦 有難し聖き教を蒙りて

甦りたる心地しにけり

楓姫 初稚姫神の命の歸りまさば

誰をたよりに日をや過さむ。

この君を命の親と崇めつつ

仕へ來りしわれぞ悲しき。

別れても又會ふ事のあるものと

神の教をたよりに待つも

初稚姫 楓姫名残は盡きず吾涙

神の光に干して行くべし

楓姫 今流す涙の雨もやがて又

晴れて嬉しき神國の園

イル いかにして此出でましを止めむと

祈りし甲斐なく別れむとぞする』

イク 『 どうしても御供に仕へまつらむと

朝な夕なに願ひてしかも』

サール 『 何處までも君の御後に従ひて

吾は行くなり神のまにまに』

初稚姫 『 ますらをの心は嬉しさりながら

神の仰せに背くよしなし』

サール「さりとても是これが此儘このまま何なんとして

別わかれらりようか胸むねの苦くるしさ」

ハル「はるばると荒野あらのを越こえて月の國つきくにに

出いでます君きみぞ雄々ををしかりけり。

われも亦また御供みともに仕つかへまつらむと

願ねがひしことも夢ゆめとなりぬる」

テル「如何いかにして君きみが首途かどをとどめむと

思おもひし甲斐かひも泣なく泣なくわかるる」

初稚姫はつわかひめ 『いざさらば珍彦うづひこ其他そのたの司等つかさたち』
神かみの守まもりに安やすくましませ』

珍彦うづひこ 『君行きみゆかば祠ほこらの森もりは凧こがらしに
木この葉はの散ちりし如ごとくなるらむ』

初稚姫はつわかひめ 『木この葉は散ちるも春はるの陽氣やうきの生うまれ來きて
惠めぐみの花はなの匂におふ聖場せいぢやう。』

いつまでも此處こゝにあるとも如何いかにせむ

神かみの心こころに叶かなはざりせば。

皇神すめかみの大御心おほみこころに逸いち早く

ハルナに行ゆけと宣のらせ給たまへば』

斯く互に訣別の歌を交換し、哀別の涙を流しながら、愛犬スマートを従へ、宣傳歌を唄ひつつ、初稚姫は崎嶇たる山路を、宣傳使服に身をかため、杖を力に降り行く。スマートも祠の森の人々に別れを惜しむものの如く、二聲三聲悲しげな聲を残し、初稚姫の後になり先になり、又もや嬉しげに頭をふり、尾を掉り従ひ行く。

(大正一二・一・二九 舊一一・一二・一三 松村眞澄録)

第三章 樂屋内(一三三九)

イク、サールの兩人は、裏口より森の中に道をととり、二三町ばかり水浅き谷底を潜つて本街道に出で、それより山口の森に駆けつけ、初稚姫に、如何なる手段を以てしても隨行を許されむ事と一生懸命に歌を歌ひながら急坂を下り行く。

イクコバラモン軍ぐんに従したがひて

清きよ春はる山やまの岩がん窟くつに

留る守す居みを勤つとめみたる折をり

松まつ彦ひこ、龍たつ公こう現あらはれて

伊いた太こう公つかさを迎むかへとり

三あな五な教ひけうに歸き順じゆんした

其その赤せき誠せいにほだされて

吾われ等らも全まく大おほ神かみの

教をしへに歸き順じゆんし奉たてまつ

祠ほこらの森もりに奉ほう仕しして

今いま迄まで勤つとめきた來きたりしが

天あめの八や重へく雲もかき分わけて

降くだり給たまひし宣せん傳でん使し

初はつ稚わか姫ひめの神しん德とくに

心こころも魂たまも奪うばはれて

今いまは全まく三あな五な教ひけうの

正ただしき信しん者じやとなりにけり

さははさりながら齋い苑そ館かた

神かみの司つかさは綺き羅ら星ぼしの

如ごとくに數あ多またまませど

愛あいと善ぜんとの權ごん化げとも

云いふべき司は稀まれならむ

初はつ稚わか姫ひめの神しん人じんを

おいて吾等われを救すくふべき

誠まことの神かみはあらざらめ

吾われ等らは之これより御み後あとをば

何ど處どこ々どこ々どこままでも慕したひゆき

其その神しん德とくに照てらされて

誠まことの道みちの御使みつかひと 選えらまれ生きては地ちの世界せかい
 死ししては靈國れいこく、天國てんこくの 教司をしへつかさと任まけられて
 人生じんせい最後さいごの目的もくてきを 完全うまらに委曲つばらに遂行すゐかうし
 天地てんちに代かはる功績いさをしを 立たてねばおかぬ二人ふたり連れ
 進すすめよ進すすめ、いざ進すすめ 山口やまぐちさして逸早いちはやく
 岩石がんせき起伏きふくの谷道たにみちも 何なんのものかは高姫たかひめや
 妖幻坊えうげんぼうが途中とちうにて あらゆる魔法まほうを使つかひつつ
 吾等われらを艱なやめ攻せむるとも 何なにかは恐おそれむ敷島しきしまの
 大和男やまとをの子この益良夫ますらをが 神かみの光ひかりに照てらされて
 惡魔あくまの猛たける山道やまみちを 最急行さいきふかうで突とつ破ぱする
 此首途このかどいぞ勇いさましき 「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」
 そろそろ坂さかがきつなつた サールさールの司つかさ、氣きをつけよ
 即すなはち此處ここが妖幻坊えうげんぼうや 醜しこの司つかさの高姫たかひめが
 出現しゆつげんしたる場所ばしよぞかし 「ウントコドツコイ」やつて來こい

今度こんどは俺おれは大丈夫だいぢやうぶ 百万人ひやくまんじんの力ちからをば

一つひとつにかためた宣傳使せんでんし 初稚姫はつわかひめを始めはじめとし

スマートさまでが出てでゝる 妖幻坊えうげんぼうの百匹ひゃつびきや

高姫たかひめ萬匹まんびき來きたるとも もう斯かうなれば磐石ばんじやくよ

ああ面白おもしろし面白おもしろし 神かみに任せまかし此身體このからだ

神かみの御爲おんため世よの爲ために 一心いっしん不亂ふらんに走りはし行く

「ウントコドツコイ、ヤットコシヨ」 サールつかさなの司何つかさなしてる

何程なにほどお前まへのコンパスが 俺おれに比くらべて短みじいと

云いつても之これ又またあんまりだ 滅相めつさう足の遅おそい奴やつ

愚圖ぐづぐづ々々ぐづぐづしてると姫様ひめさまが 後姿うしろすがたを御覽ごらうじて

こらこら待まてよ兩人りやうにんと 呼止よびとめられたら何なんとする

折角せつかく智慧ちゑを搾しぼり出だし ここまで企たくんだ狂言きやうげんが

水泡すゐほうに歸きしてしま了しまふぞや ああ惟かむながらかむながら神々かむながら

御靈みたま幸さちはへましまして 初稚姫はつわかひめの神司かむつかさが

吾等二人を快く

長途の旅の御供を

許させ給ふ計らひを

廻らせ吾等が一念を

遂げさせ給へ大御神

珍の御前に願ぎ奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

大地は泥に浸るとも

思ひ立つたる此首途

ひきて歸らぬ桑の弓

何處々々までも従ひて

初稚姫の神格に

照らされ吾等が本分を

盡さにやおかぬ大和魂

ああ勇ましし勇ましし

之につけてもハル、テルヤ

イルの奴等は馬鹿者だ

氣轉を利かして何故早く

お先へ失敬せなんだか

ヤツパリ智慧のない奴の

する事ア何處かに間がぬけて

まさかの時には空氣ぬけ

思へば思へば面白い

守らせ給へ惟神

神の御前に願ぎまつる

サールは又歌ふ。

「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」 何時來て見ても此坂は

行歩に苦しむ難所だな これ待て暫しイクの奴

それ程慌てて何にする 初稚姫の御司は

後からムるに違ひない まアボツボツと行くがよい

もし過つて轉けたなら 弱味を見すまし高姫や

妖幻坊が現はれて 先度の様にえらい目に

遇はしよつたら何とする さきにはスマートに助けられ

又も今度はスマートに 九死一生の所をば

助けて貰ふ目算か それはあんまり蟲がよい

柳の下に二度三度 鱈は居らぬと云ふ事を

お前は合點してゐるか 前車の顛覆するを見て

後車の必ず戒めと なせとの教を忘れたか

猪武者にも程がある

三五教の御教に

退却なしと云つたとて

猪突猛進することは

チツとは考へ物ぢやぞよ

あああ足の早い奴

姿が見えなくなりよつた

此坂道を矢の様に

走つて行つたが目がくらみ

又もや石に躓いて

スツテンドウと顛覆し

向脛打つてウンウンと

苦しみながら笑ひ泣き

屹度してるに違ひない

急げば廻れと云ふ事だ

一足々々氣をつけて

俺はボツボツ進ませう

「オツト、ドツコイ」きつい坂

足を踏み込む所はない

もし過つて迂つたら

それこそ命の捨て所

何程下賤の身なりとも

ヤツパリ神の生身魂

かからせ給ふ生宮だ

人は持身の責任を

忘れて此世にたてよまい

何程身魂が偉くとも

現實界に働くは

如何しても體が必要だ

靈肉ともに完全に

保全しまつり大神の

大神業に仕ふるは

人の人たる務めなり

ああ惟神々々

神の恵の幸はひて

吾等二人は恙なく

此急坂を驅け下り

初稚姫のおでましを

行手の森で待ち迎へ

千言萬語を費して

御供に供へまつるべく

あらゆるベストを盡すべし

それでも聞き入れ給はずば

皇大神の御守護で

初稚姫の體をかり

其言靈を使用して

御供を許させ給ふべし

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

此目的を達せねば

吾等二人は死すとても

祠の森へは歸らない

吾誠心を憐れみて

許させ給へ大御神

珍の御前に願ぎまつる

「ウントコドツコイ ドツコイシヨ」

そろそろ道が緩うなつた

大方此處等でイク公が

息を休めて居るだらう

大難關も恙なく

突破したるに違ひない

之も全く神様の

清き尊き御守護

嬉しく感謝し奉る

と歌ひながら、細い谷道をとんとんとイクと二三町の間隔を保つて、木の間に見えつ隠れつ、漸くにして山口の檜の大木の麓に着いた。

「おいサー、何うだ。随分足が遅いぢやないか。鐵の草鞋を穿いても、もちと早く來れさうなものだ。俺が此處に着いて冷たうなつてるのに、まだ貴様の姿が見えぬので、又も途中で妖幻坊に出會し、やられてゐるのぢやなからうか、もしさうだつたら貴様の骨なつと拾つてやらうと、聊か御心配をしてムつた所だ。まあまあ無事に此處迄やつて來たのは聊か褒めてやる。併しながら貴様の顔は何だ。眞黒氣ぢやないか」

「俺は館の裏から抜け出す時に、見つかつては大變だと思ひ、貴様の後から炭俵

を被つて跟いて来たものだから、ヒヨツとしたら炭の粉が着いたのかも知れぬわ。
何だか其處邊中が鬱陶しくなつて来た様な氣がするわい」

「八八八八、炭俵を被つて汗をかいたものだから、うまく炭汁の調和が出来て、
貴様の顔は草紙のやうだ。然し其炭俵は何うしたのだ」

「何處で落したか、捨てたか、そんな事を考へてる餘裕があるかい。貴様が俺を
捨てて一生懸命驅けだすものだから、先も見にやならず、足許も氣をつけにやな
らず、本當に辛い目をして、神様を念じつつ漸く此處に着いたのだ。幸ひ此處に
谷川が流れてゐるから、顔や手を洗つて来るから貴様待つて居て呉れ。まだ姫様
がおいでになるのは餘程間があるだらうからな」

「待て待て、其黒いのが大變都合のよい事がある。貴様の顔はどつち向いてゐる
か分らぬ位黒いぞ。之で一つ狂言をやつて姫様の心を動かさし、うまく御供をさし
て頂くのだな。俺も一つ何か顔に塗りたいものだが、何ぞ都合の好いものはある
まいかな」

「實は楓さまが使つてゐる白粉を、何氣なしに懐へ捻込んでやつて来た。之を貴

様にやるから、貴様は顔一面に塗つて、色の白き尉殿となり、俺は幸ひ此黒い顔で黒い尉殿となり、元の屋敷へお直り候……とかますのだ。さうすると初稚姫様が、もとの祠の森へ歸つて下さるかも知れぬ。もし歸つて下さらなかつたら、直様帯を解いて此櫳の木にフイと引懸つて、腮を吊つてプリンプリンとやるのだな」
「やあ、それは面白い」

とサールの懐にあつた白粉をとり、顔にベタベタと塗りつけると、顔の頬一面に生えてゐる髯に白い粉がひつついて、まるで白狐の様になつて了つた。二人は恰好な木の枝を折り、片手に扇を持ち、片手に其梢を鈴と看做して、櫳の元に初稚姫の進み来るを待ち構へ、姿が見えたら一齊に三番叟の舞を初めむものと、いろいと工夫を凝らして待つてゐる。

(大正一二・一・二九 舊一一・一二・一三 北村隆光録)

イク、サールの兩人は、三番叟の準備を整へて、初稚姫の来るを今やおそしと待ち構へて居た。半時許り経つて、初稚姫はスマートを伴ひ、聲爽かに宣傳歌を歌ひながら降り来る姿が、木の間をもれてちらりちらりと見え出した。二人は「サアこれからが性念場だ、ぬかつてはならぬ」と互に注意しながら、身振足振などして三番叟の下稽古をやつて居る。

初稚姫は聲淑かに歌ふ。

産土山の聖場を 後に眺めて大神の

任けのまにまに進み往く 吾は初稚姫の司

祠の森に立寄りて 醜の魔神につかれたる

高姫司を初めとし 妖幻坊の曲津神は

父の命と偽りて あらゆる曲を遂行し

珍の聖場を蹂躪し 曲津の棲家を作らむと

企み居たりし忌々しさよ 神の恵に守られて

妾は祠の森に入り 神の依さしの神業に

心を盡し身を盡し 曲の身靈を言向けて

天國淨土に救はむと 思ひし事も水の泡

今はあへなくなりけり 皇大神の御前に

前途の幸を祈りつつ 珍彦夫婦や楓姫

百の司や信徒に 惜しき袂をわかちつつ

神のたまひしスマートを 長途の旅の力とし

神の恵を杖として 漸く此處に進み來ぬ

谷の流れは涼々と 自然の音楽奏しつつ

木々の若芽は春風に そよぎて自然の舞踏なし

人跡稀なる谷間も さも賑しき鳥の聲

緑紅青黄色 其外百の花の香は

妾が眼を慰めつ 實にも長閑な春の空

ホーホケキヨの鶯の 其鳴き聲に何となく

神かみの救すくひの御聲みこゑあり
妾わらはは素もとより一人旅ひとりたび

教をしへの司つかさを伴ともなひて
長途ちやうとの旅たびは許ゆるされず

又また吾われとても神かみの道みち
進すすみ行ゆく身みに供人ともびとを

携たづさへ行ゆかむすべもなし
如何いかなる曲まがの來きたるとも

絶對無限ぜつたいむげんの大神おほかみの
御稜威みいづに守まもられ行ゆく上うへは

怖おそるものは世よにあらじ
ああ惟かむながらかむながら神々々

神かみの惠めぐみの有難ありがたさ
朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも
醜しこの曲津まがつは猛たけぶとも

思おもひ定さだめし一人旅ひとりたび
如何いかでか供ともを許ゆるさむや

さはさりながら山口やまぐちの
榎かしの根元ねもとにイク、サール

目めも白黒しろくろと顔かほを塗ぬり
吾われに從したがひ進すすまむと

手具脛てぐすねひいて待まち居ゐたる
其そのまごころ赤心まごころは嘉よみすれど

神かみの許ゆるさぬ道連みちづれを
如何いかでか妾わらはが許ゆるし得えむ

ああ、イク、サール兩人りやうにんよ
妾わらはが心こころを推おし量はかり

斯かる望みを打ち捨てて
一時も早く聖場に

歸りて神に仕へませ
神は汝と俱にあり

たとへ吾等に從ひて
いづくの果に来るとも

神の許しのなき上は
如何でか望みの達すべき

諦めたまへ二柱
初稚姫が愼みて

心の丈を隈もなく
汝が身の前に打ち明し

その赤心の厚きをば
謹み感謝し奉る

ああ惟神々々
御靈幸倍まませよ

と歌ひながら急坂を下り、一歩々々近づき来る。二人は此歌を聞いて失望落膽の

色を現はしながら、

イク「オイ、色の黒き尉殿、あの歌を聞いたか、遠は初稚姫様だ、ちやんと俺達

が顔に白いものや黒いものまで附けて、此處に待つて居る事まで御存じと見えて、

「目を白黒、顔を塗り立てて」と仰有つたぢやないか。こいつは駄目かも知れぬ

ぞ
□

サール □ イヤ、色の白き尉殿、必ず必ず御心配召さるな □

と云ひながら片手に扇を持ち、片手に梢を携へ、妙な腰付をして足拍子を揃へ、
サールは、

□ トー トー タラリ、 トー タラリ、 タラリーリ、 トー タラリヤー、 タラリ、 トー タ
ラリ、 朝日は照るとも曇るとも、 オンハ、 カツタカタ、 エンヤハ、 オイ、 カツタ
カタ □

と口拍子を取りながら歌ひだした。イクも亦引き出されて眞白の顔をさらしながら、

イク □ 月は盈つとも虧くるとも、假令大地は沈むとも □

サール □ 初稚姫の御供に

エンヤ、 カツタカタ

オンハ、 カツタカタ

仕へまつらで置くべきか

抑々三五の神の教は

敵でも餓鬼でも蟲族でも

助くる一道なり一助くる一道なり

イク「かるが故に

如何に初稚姫の神なりとて

此色の白き尉殿や

まつた この色の黒き尉殿が

赤心こめて願ぎまつる

ハルナの都の御供を

許させたまはぬ

事やあるべき。

如何に色の黒き尉殿、ここは吾々兩人、天津乙女の舞を奏でて初稚姫の御心を和

らげ、許され難き御供に、たつて仕へまつらうではムらぬか

サール「されば候、天津乙女の舞、速に御舞ひ候へ、かく舞ふ時は天女に等しき

初稚姫、祠の森の元の屋敷に御直り候ふべし。オンハ、カッタカタ、エンハ、カッタカタ、カッタリコ、カッタリコ、カッタカタ、カッタカタ、エンヤ、オンハ、此世を造り給ひし神直日の神、御心も廣き大直日の神、唯何事も人の世は、直日に見直し聞き直し、如何なる事も宣り直し給ふ、尊き神の御使と、現はれ給ふ初稚姫、世人を救ふ宣傳使と、現はれ給ふ御身なれば、如何でか吾等が熱心なる願を許し給はざる事のあるべき。朝日は照るとも曇るとも、四邊に響く瀧の水、抑これ瀧水は、産土山の山麓より落ち来る惠の露の暫し木の葉の下潜りつつ、河鹿の河に流れ来て、此處に瀧とぞなりにける。抑これの流れは、産土山に湧き出でし時は、僅かの露にてありしもの、流れ流れて谷々の、小川の水を一つになし、斯くも目出度く麗しき瑞の御靈の瀧とぞなりにける」

イク「初稚姫もその如く、産土山を出で給ひし時こそ、木の葉の露に等しき御出立ち、纖弱き乙女の旅衣、語らふ友もなかりしに、神の惠のあら尊、畜生の身をもつて、其御供に仕へまつりたる、スマートを添へ茲に征途に上らせ給ふ、其有様を譬ふれば、この瀧水の次第々に、行くに随ひ水量増り、小川を合せて太り

行く如く、御供の神を數多従へ、出でますべきは天地の道理ならめ、あら有難や
尊しやな、今や吾目の前に御姿を現はし給ひし初稚姫、御供に仕へさしてたび給
へ、色の白き尉殿と黒き尉殿が、黑白も分ぬ闇の世の救ひのために、天地の神に
誓ひまつりて、姫が御前に願ぎまつる。オンハ、カッタカタ、エンハ、カッタカ
タ、カッタ カッタ カッタリコ、カッタリ カッタリ カッタリコ、エンヤ、
オンハ

と兩人は谷道を塞ぎ、一生懸命に踊り狂ふ。遠の初稚姫も二人の理詰に答ふる言
葉もなく、少時茫然として二人の舞を眺め居たりき。スマートは二人の顔の變つ
たのに不審を抱き、首を傾げて考へて居たが、やつとの事でイク、サールの兩人
の戯れなる事を知り、二人の中に分け行つて、尾を掉りながら、ワンワンワンと
二聲三聲吠え猛るや、イク、サールの兩人は、やつとの事で三番叟を舞ひ納めた。
一生懸命に茲を先途と踊り狂うたのだから、ビツシヨリ汗に濡れ、何とも形容の
出来ぬ化物面になつて仕舞つた。

「ホホホホホ、貴方はイク、サールの司ぢやありませんか。何時の間に斯様な所

にお出になつたのです。珍彦さまが嘸心配をしてゐらつしやるでせう。サア早く
歸つて神様の御用をして下さい。さうして又其顔はどうなさつたのですか。本當
にみつともない、お化のやうですわ。三番叟が濟みましたら、早く此谷川でお顔
をお洗ひなさいませ。どこの方が通られるか知れませぬよ。旅のお方が貴方等の
お顔を見たら、キツト吃驚せられますからなア」

イク「イヤモウ大變な目出度い事でムいました。貴女の御旅行について、天の大
神様が吾々にお供をせいと仰有つての事か、思はず知らず此處まで體が宙に飛ん
で参りました、生れてから初めての三番叟を踏まされました。何卒惟神と思召し
て、何處までもお供にお連れ下さいませやう、偏にお願ひ申します」

サール「どうぞ、私もイクの申した通り、是非ともお供をさして頂きたう存じま
す」

「折角の思召を無にするのも苦しうムいますが、最前申した通り、妾は供は許さ
れないのですから、どうぞそれだけは堪へて頂きたう存じます」

イク「そこを、たつてお願ひ申したいと存じ、合す顔がムいませぬので、此通り

白く黒く塗りまして、お願い申したのでムいます。何と仰有つても私はお供を致
します。珍彦様に許しも受けず、勝手に飛び出して来たのでムいますから、此儘
歸る事は出来ませぬ。吾々を助けると思つて何卒お許しを願ひます。何程神様の
お道だと申しても、特別のお取扱ひ破格の思召と云ふ事がムいませう。其處は神
直日、大直日に見直しまして、お許し下さるが人を助ける宣傳使の役ぢやムいま
せぬか」

「本當に困りましたなア。併しながら、貴方は祠の森の神司珍彦様の支配を受け
ねばならぬお方故、私が勝手につれて参る譯には参りませぬ。そんな無理を仰有
らずに、早く歸つて下さい。それが神様に對する第一の務めでムいますからなア
イク「ア、是程頼んでも聞いて下さらねば、最早是非がない。オイ、サール、愈
決死隊だ」
と目配せする。茲に兩人は懷に用意して置いた腰帶を櫛の木の梢にパツと手早く
引っかけ、顎を吊つてプリンプリンと三番叟の舞は、忽ち住吉踊りの人形とへグ
レて仕舞つた。スマートは此體を見て驚き、ワンワンと吠立て、初稚姫の身の廻

りをウロウロしながら袖をくはへて、「早く兩人を助けて下さい」と、口には云は
ねど其形容に現はし、悲しき聲を絞つて啼く。初稚姫は手早くブラ下つた體をグ
ツと抱へ、五寸ばかり持ちあげて二人とも救ひ下した。二人は氣が遠くなつて呆
然として居る。初稚姫は二人の熱烈なる願ひを聞く譯にもゆかず、斷る譯にもゆ
かず、暫し涙に暮れて考へて居たが、やや兩人が正氣になつたのを幸ひ、忽ち神
に祈り、身を變じて大熊となり、スマートは唐獅子となり、目を怒らし足搔をし
ながら、ウーウーと二人に唸つて見せた。二人は吃驚して兩手を合せ一言も發し
得ず、其場に俯向いて慄うて居る。初稚姫は再び元の姿となり、スマートは巨大
なる獅子と化し、初稚姫を背に乗せて荒野ケ原を一目散に進み往く。

(大正一二・一・二九 舊一一・一二・一三 加藤明子録)

第五章 森の怪(一三四一)

二人は初稚姫が變装の術を使つて熊となり、スマートを獅子と變じて、二人を睨みおき、此場を逸早く立去つて了つた後姿を眺めて、頻りに首を傾け兩手を合せ舌を巻いて感じ入つて了つた。

「おい、サール、大したものだらう。初稚姫様は正勝の時になつたら、あれだけの御神力があるのだから、俺が貴様を勧めて追驅けて來たのも無理はあるまい。如何だ、俺の先見は、之から餘り馬鹿にして呉れまいぞ」

「ヘン、偉さうに吐すない。貴様だつて初稚姫様にあれだけの隠し藝がある事は初めてだらう。何處ともなし優しい慕はしい、そして御神徳が備はつてるものだから、何處がどうと云ふ事なしにお慕ひ申してやつて來たのだらう。先見の明も糞もあつたものかい。然し大熊となつて目を怒らし、「ウー」とやられた時にや、あまり氣分のよいものぢやなかつたのう。貴様もビリビリ慄つて居たぢやないか。怖さうに地【べた】に喰ひつきよつて、其周章狼狽さと云つたらお話しにならなかつたワ」

「馬鹿云ふな。俺は屹度初稚姫様は熊にお化け遊ばすに違ひないと豫期してゐた

のだ。それが俺の鋭敏な頭脳に感じた通り現出したのだから、餘り有難くて勿體なくて慄うてゐたのだ。云はば歡喜の慄ひだ。貴様の様な蒟蒻慄ひとは聊か選を異にしてゐるのだからね、エヘン」

「へ、仰有りますわい。そして今後の計畫は何うなさいますか。もう之で祠の森へ御退却でせうね」

「馬鹿を云へ。貴様は臆病者だから退却したがよからう。俺はあの御神力を見届けた上は彌益々熱心にお後を慕ひ、假令噛み殺されても構はないのだ。神様のために命を捨てる命を捨てる口癖のやうに云ふ奴は、こんな時にビツクリして、ビクビクもので逃げ失せるものだ。此イクは之から大熊さまや唐獅子さまに喰はれにイクの司だ。さアここで貴様と別れて、英雄と卑怯者とが顔を洗ひ水杯でもしようぢやないか。もう之が貴様と長の別れとならうかも知れぬ。御縁があらば又地獄の八丁目でお目にかかりませうよ」

「何、馬鹿のこと云ひくサールのだ。俺だつて本當の獅子や熊になら、チツとは驚くか知らぬが、何と云つても化獅子や化熊だから生命に別條はない。そんな事

の分らないサールさまとは違ふのだ。何は兔もあれ、斯んな顔してゐては化物と見違へられる。一遍裸となつて體中を清め、そして野馬でも居つたら、取捉まへて、其奴に跨り御後を追ふ事にしよう。愚圖々々してゐると、日が暮れて行衛を見失ふかも知れないぞ。さア早く早く」

と二人は體を清め、顔の白黒をスツカリ落し、宣傳歌を歌ひながら荒野ヶ原を涉つて行く。

イク 『初稚姫の御供に 仕へて神業を全うし

齋苑の館に復命 白さむ爲めと兩人が

祠の森を抜け出して 河鹿峠の急坂を

先に下つて山口の 檜の根元に立ち居れば

初稚姫の神司 谷間をピカピカ照らしつつ

木の間を縫うて下り来る 其神姿の崇高さよ

スマートさまは後前に なつて御身を守りつつ

主しゅじゅつ従じゆつここに現あらはれて

白しろ黒くろ二人ふたりの三さん番ばん叟そう

眺ながめ給たまひし床ゆかしさよ

朝あさ日は照てるとも曇くもるとも

エンヤナ、オンハ、カッタカタ 月つきは盈みつとも虧かくるとも

身み魂たまを洗あらふは瀧たきの水みづ 瑞みづの身み魂たまの流ながれぞと

二人ふたりの口くちから出で放はう題だい 俄には作かりの歌うた唄うたひ

漸やうやく仕し組ぐんだ三さん番ばん叟そう 其その甲か斐ひもなく一言ひとくちに

はね飛とばされて兩りやう人は 豫かねて企たくみし決けつ死し隊たい

用意よういの細ほそ帶おび取とり出だして 堅かた木ぎの枝えだにパツとかけ

プリンプリンとブラ下さがる 其その苦くるしさは言ことの葉はの

盡つくし得えらるる事ことでない 本ほん當とに今こん度どは死しぬのかと

觀くわん念ねんしたる折をり柄からに 初はつ稚わか姫ひめに助たすけられ

ヤツト氣きがつきや、あらず不思議ふしぎ 思おもひがけなき熊くまとなり

獅し子しと變へんじて兩りやう人にんを 眼まなこ瞋こいらし睨にらみたる

其その時ときこそは吾われ々われも 本ほん當との事ことを白はく状じやうすりや

あまり良い氣はせなかつた さはさりながら荒野原

獅子狼の吼え猛る 醜葦原を進む身は

どうであの様な隠し藝が無くて一人で進まりよか

之を思へば吾々は 何程排斥せられても

假令脅喝せられても 之を見捨てて歸れない

何處々々迄も追ひついて 命を的に進み行く

之が誠の大和魂 肝を試すは此時だ

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令曲津に喰はるとも 思ひ立つたる此首途

中途に歸つて堪らうか ああ惟神々々

御靈幸はひましまして 初稚姫の進みます

ハルナの都へ吾々を 尊き恵みの其下に

進ませ給へと願ぎ奉る 四方の山々芽を吹いて

躑躅の花も此處彼處 艷を競へる春の野は

又格別の愉快さぞ

紫雲英の花は遠近に

處まんだら咲き初め

松の緑も榿の葉の

新芽も漸う伸び立ちて

吾等二人の荒武者に

活動せよと勧めてる

烏や鳶や雲雀まで

御後を慕うて走れよと

應援してゐる心地する

こんな處で屁古垂れて

ノメノメ後へ歸りなば

烏の奴にも笑はれる

三五教に退却の

二字は決してない程に

善と思つたら何處迄も

命限りに進むのが

男の中の男だらう

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ行くのはイクであつた。

山口の此榿の木ふもとから山口の森は、近く見えて居ても殆ど五十町ばかりの距

離があつた。

□ 兔も角山口の森まで進まにやなるまい□

とコンパスに撚をかけ、春風を肩で斜に切りながら、蟹の如く横飛びして、特急列車的に脇目をふらず、路傍に咲き匂ふ花にも目もくれず、トントントンと駆けついた。空はドンヨリと曇つて来た。星の影さへ見えなくなつてゐる。最早咫尺暗澹、一步も進めなくなつて了つた。俄に山口の森の或局部が火の如く明くなつた。夏の蟲が燈火をたづねて飛び込む様な勢で、火光を目當に二人は進み行くと、山の神の祠の跡の臺石の上に、暗を照らして輝いてゐる二人の怪物があつた。之は妖幻坊の眷屬幻相坊、幻魔坊と云ふ古狸が鬼の姿と化けて、暗を照らしながら兩人を艱まさむと待ち構へてゐたのである。兩人は十間ばかり近寄つてツと立止まり、

□ おい、サール、妙ぢやないか。あれだから俺が好きといふのだ。初稚姫様は鬼となり、スマート迄が小鬼に化けて俺達を嚇かし逃がしてやらうとして、ああ云ふ藝當をやつてムるのだぞ。何と初稚姫様は偉いものぢやないか、エー□
□ 成程、こいつア感心だ。益々以て其本能を發揮し給ふと云ふものだ。俺も一つ

何かの方法で、何處までも追跡して教へて貰はなくちや、祠の森へも歸れぬからのう。一つ側へ寄つて談判しようぢやないか

「ウン、そいつは面白い。何程恐い顔したつて、素性が分つてるのだから屁でもないわ」

と云ひながら嬉しさうにツカツカと側へ寄つた。何程妖怪が怖い顔して嚇さうと思つても、相手方が驚かねば張合がぬけたものである。そして其妖術は次第々々に消え失せるものである。幻相坊、幻魔坊はいやらしき鬼となり、四邊を輝かしながら眞赤な顔をして、牛の様な角を額に二本づつ一尺ばかり生やし、耳まで裂けた口に青い舌を出し、體は餓鬼の如く瘦せ衰へて壁下地を現はしてゐる。イクはツカツカと側に寄り、

「よう、天晴々々、實に感じ入りました。おい畜生、貴様も中々乙な事をやり居るのう。エへへへ、そんな怖い顔したつて驚くものか。素性の分らぬ化物なら、此方も面喰ふか知らぬが、スツカリ分つてるのだから面白いわ。アツハハハハ、感心々々、のうサール、うまいものだね」

「ウン、之だから旅はやめられぬと云ふのだ。何せよ、ハルナの都まで悪魔退治に行くのだから……こんな事が怖い位では駄目だから……畜生までが一人前に化けて居やがらア、エへへへへ、實に巧妙なものだなア」

折角化けた幻相坊、幻魔坊も相手が平然として、「畜生よく化けよつた」等と云ふものだから、

「此兩人は自分の正體を知つてゐやがるのだな。こんな肝の太い奴に悪戯をして威かさうとしても駄目だ。却てひどい目に遇はされるに違ひない」

と妖怪の方で慄ひ出し、俄に還元する譯にも行かず、涙をポロポロと落とし出した。八八ア、コン畜生、涙を流してゐやがる。おい、サール、こりやチツと可怪しいぞ。初稚姫さまなら泣かつしやる筈がない。何でもこいつア、妖幻坊の眷屬が化けてゐやがるのだ。一つ問答してやらうかい」

「そりや面白い。こりや化州、貴様、こんな所で俺に火をつけて首振り芝居を見せて呉れたつて、何が何だか譯が分らぬぢやないか。物を言はぬかい。人形芝居なら太夫が語つてくれるから意味も分るが、六齋念佛の様に黙つて慄つてゐた所

が、それ位の表情では意味が分らぬぞ。おい一つ貴様と俺と合併して芝居をやらうぢやないか」

「こらこら、サール、こんな鬼と芝居したつて、はずまぬぢやないか。物好きもいい加減にしたら如何だい。ヤ、だんだん小さくなりやがったぞ」
と云つてる間に、青い火柱となつて二人ともスポットと消えて了つたので、四邊は何處ともなしに眞闇がりになつた。

イク「ハハア、到頭夜立店も流行らぬと見えて、カンテラを消して歸んで了ひよつたな。併しそこらに魔誤ついてゐるかも知れぬから、よく氣をつけよ」

サール「さうだな。彼奴はヤツパリ初稚姫さまぢやなかつたわい。馬鹿にしゃがる、之から俺等も十分注意をしなくちや、かう暗くなつちや、何がうせるか分らぬからのう」

「かふいふ晩には化物が自分の前へ出て来て鞆丸を狙ふといふことだよ。そしてよく人に化けるから氣をつけにやいくまいぞ。今消えた鬼は屹度方法を變へて、俺達の鞆丸を狙ひに来るのだから……サール、チツト氣をつけ給へ」

「ウン、十分注意する。なるべく兩人が接近して敵の襲来に備へようぢやないか」
「そら、さうだ。併し貴様の前の方に、暗くてシツカリ分らぬが、何だか化物が頭をつき出して様だぞ」

「ナーニ、今手を伸ばして探つて見たけど、何も居やせないわ」
「それでも俺の目には、貴様の前に何だか黒いものがある様だ。一寸撫でて見よ
うか」

と云ひながら暗がりを幸ひ、イクはサールの前に頭をつき出した。サールはイクがこんな悪戯をしてるとは知らず、一寸手を伸ばすと毛の生えた頭がつかへたので、驚きながら自棄糞になつて左手に髻をグツと握り、滅多矢鱈に處構はず殴りつけた。そして漸くに手を放した。イクは自業自得だと諦めながら、ソツと元の座へ直り、

「おい、サール、貴様は今、何だかバサバサやつてゐたぢやないか」
「ウン、到頭化物の奴、俺の鞞丸を狙ひに来よつたので、髻をグツと握り殴つてやつたのだよ」

「ウン、さうか。油斷ゆだんのならぬ所ところだな」

と云いひながら、サールの聲こゑの出る所ところを目當めあてに、最前さいぜんの仕返しかへしをポカポカとやつた。

「アイタツタ、おい、イク、来て呉くれ。何なんだか俺おれの周圍ぐるりに化州ばけしうの奴やつ、ひつついてあるやうだ。ああかむながらたまちはへま惟神靈かむながらたまちはへま幸倍坐世せ惟神靈かむながらたまちはへま幸倍坐世せ」

「よう、何なんだ何なんだ。何處どこに何處どこに」

と云いひながら、今度は喉のどの下したをコソバかさうとして又またツと手てをつき出した。サールも何氣なにげなく手てをつき出す途端とたんに、妙めうな物ものがあると思おもひグツと握にぎつた。

「アイタタタ、俺おれだ俺おれだ、イクだイクだイクだ」

「こりや、イクの奴やつ、俺おれの頭あたまを毆くちはせよつたのは貴様きさまだな。惡戲ふざけた眞似まねをさらすと了簡れうけんせぬぞ」

「ヘン、貴様きさまだつて俺おれの髻たぶきを一生懸命いっしやうけんめい握にぎりよつて、力ちから一杯いっぱい毆なぐつたぢやないか」

「ハハハハハ、罰ばちは目の前まへだな」

斯かく話はなししてある所ところへ、森もりの木この間まを照てらして現あらはれて來きたのは、直徑ちよくけい二尺位にしやくくらゐある光ひかりの玉たまである。そしてその玉たまの中なかから、目め、鼻はな、口くち、眉まゆげ毛げまで現あらはれ「エへへ

へへ」と可笑しさうに笑つてゐる。そのために足許はパツと明くなつた。よくよく見れば、二人の足許に幻相坊、幻魔坊の二足の古狸が一尺もあらうと云ふ大蜈蚣を山程積んで、二人の體を刺し殺さうと企んでゐたのである。二匹の古狸は此光に照らされて雲を霞と逃げ去り、大蜈蚣は一生懸命に走つて森の中の暗に隠れて了つた。そして此光はおひおひと容積を減じ、小さき玉となつて二人の側に轉げて來た。二人は別に驚きもせず、
「之は自分を助けてくれた神の化身だらう。此暗がりに此光玉がなかつたら、俺等はどんな目に遇つたかも知れぬ。南無光大明神様」
と兩方から手を合せて感謝した。二人は何時の間にかウトウトと眠つて了つた。山口の森の鳥はカアカアと曉を告げた。其聲に驚き、目を醒まし四邊を見れば、自分の傍に直径一寸ばかりの水晶玉が轉がつてゐた。之は日の出神が二人の危難を救ふべく神寶を授け給うたのである。之より兩人は夜の明けたを幸ひ、玉を懷中にしパンを嚙ぢりながら、初稚姫の後を慕うて驅けて行く。

(大正一二・一・二九 舊一一・一二・一三 北村隆光録)

第六章 梟の笑〔一三四二〕

サール 初稚姫に從ひて
ハルナの都に進まむと

イクと二人が云ひ合せ
一足先に失敬して

河鹿峠の上り口
檜の大木の麓にて

神算鬼謀を廻らしつ
否應云はさず御供の

許しを受けむと三番叟
折角企んだ藝當も

忽ち晝餅となりぬれば
最後の手段と首を吊り

初稚姫を驚かし
有無を云はせず御供に

仕へむものと思ひしが
これも矢張當はづれ

忽ち熊と變化して
睨み給ひし怖ろしさ

魂奪はれ魄消えて
絶え入るばかり戦けど

弱味をみせては叶はじと
吾と心を勵まして

御後を慕ひすたと

曲神の集ふ山口の

森の手前にかかる折

夜はずつぱりと暮れ果てて

黑白も分かずなりにけり

忽ち見ゆる大火光

これぞ全く大神の

吾等を守りたまへるか

喜び勇み近づけば

形相實にも凄じき

二つの鬼が立つて居る

これぞ全く姫様が

吾等を嚇して歸さむと

企み給ひし業ならむ

素性の分つた化物に

如何でか怖れ縮まむや

二人は傍にかけよつて

平氣の平左でかけあへば

初稚姫に非ずして

正體の知れぬ妖魅界

意想外なる古狸

蜈蚣の奴がやつて来て

吾等二人を刺し殺し

惱めむとして待ち居たる

危き所をあら尊

天を照らして降りくる

光眩き大火光

吾等が前に現はれて

四邊隈なく伊照らせば

遠の魔神も戦慄し

雲を霞と逃げて行く

火團は忽ち縮小し

一寸ばかりの玉となり

清き光を現はして

吾等を守りたまひけり

ああ有難や尊やと

感謝の言葉捧げつつ

知らず知らずに眠りけり

烏の聲に驚きて

眼をさまし眺むれば

水晶玉が唯一個

二人の間に置いてある

これぞ全く皇神の

闇夜を照らす御寶

吾等二人が赤心に

感じて天より寶玉を

下させ給ひしものなりと

押し戴いて懐に

いと叮嚀に納めつつ

勇氣は頓に加はりて

百草萌ゆる春の野を

心いそいそ進み往く

ああ惟神々々

斯くも尊き御守り

吾等に下らせ給ふ上は

如何でか曲を怖るべき

闇夜を照らす寶玉の 光と共に何處までも

初稚姫の後追うて 御供に仕へ奉らねば

男の顔が立つまいぞ イクの司よ氣をつけて

サールの後について来い 野中の森も近づいた

それから先は小北山 珍の聖場がありと聞く

もしや初稚姫様は 其聖場に道寄りを

なさつてゐるぢやあるまいか 吾々二人は兔も角も

小北の山に參詣で 神に願をかけまくも

畏き所在を探ねだし 初心を貫徹せにやならぬ

ああ惟神々々 三五教の大御神

何卒吾等兩人が 此願望を逸早く

許させたまへと願ぎまつる

と歌ひつつ行く。

イク 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも落つるとも

海はあせなむ世ありとも 大和男子の益良夫が

一旦思ひ立ちし事 通さにやおかぬ弓張の

月に誓ひて突き貫かむ 初稚姫はスマートを

伴ひ一人出でませど 妖幻坊の曲津見や

高姫司がいろいと 姿を變じ待ち構へ

もしも艱ませまつりなば 大神業は如何にして

完成すべき道やある 神の司は綺羅星の

如くに數多ましませど 此姫君に勝りたる

神の司は稀なれば 吾等はたとへ死すとても

初稚姫の御前を 助け守らにや居らうまい

身も魂も打ち捨てて 神に仕ふる吾々は

如何なる敵も怖れむや 野は青々と生ひ茂り

風暖かく薫りつつ 蝶舞ひ遊ぶ野邊の花

すみれ 董、たんぼ英、げんげばな 咲き誇りたる道の上

そのちうしん 其中心を進み往く 吾等は天國淨土をば

りよかう 旅行なしつる心地なり ああ惟神々々

はつわかひめ 初稚姫の御上を 守らせたまへ大御神

うづ 珍の御前に願ぎまつる

と歌ひつつ道を急ぎ行く。

道の片方の榛の木の下に、一人の美人が黒い犬をつれて首をうなだれ、眞青な顔をして何か思案に沈む風情であつた。イク、サールの兩人は十間ばかり道を隔てた田の向ふに女の立つて居るのを眺め、つと立留まり、

「オイ、サール、あの女は初稚姫様によく似て居るぢやないか。そしてスマートによく似た犬まで傍について居る。一つお尋ねして見ようぢやないか」

「ウン、一寸見た所ではよく似てゐるやうだが、些し顔が長いなり、背が高過ぎるぢやないか。そしてあの犬もスマートから見れば、どこともなしに容積がない

やうだ。又昨夜の曲神奴が第二の作戦計畫を立てよつて、吾等を艱めようとして居るのかも知れないぞ。うっかり相手になつては不利益だから、見ぬ顔して行かうぢやないか」

「それもさうだが、何だか心配さうな顔をして居るぞ。彼處は川側だから、身投げでもする積りぢやなからうかな」

「サア、あの様子では何とも判別がつかないよ。まア暫く此處で様子を考へようぢやないか」

「ウン、よからう」

と、二人は暫し女の舉動を看守つて居た。忽ち女は榛の木に細帯を投げかけ、プリンプリんとぶら下つた。傍に居た黒犬は悲鳴をあげ、二人の方に向ひ、前足で空をかきながら救ひを求むるものの如くであつた。

「オイ、サール、俺達の後繼が出来たぢやないか、随分苦しさうにやつてける。何と無細工なものだなア、あれを見い、涙を垂らしよつて、あの態つたら見られたものぢやない。初稚姫様が吾等のブリブリして涙をたらした姿を眺められ

た時にや、何とした馬鹿な奴だ、情ない男だとキット思はれたに違ひないぞ。人の姿見て吾姿直せと云ふ事があるからなア」

「オイ、イク、そんな氣樂な事を云うて居る所ぢやないよ。人の危難を見て批評所ぢやない。グツグツして居ると絶命れて了ふから、サア貴様と二人で助けてやらうぢやないか」

「初稚姫様は、女の身として荒男の首吊り二人まで御助けなさつたのだ、高が女の首吊り一人に男が二人まで行かなくても貴様一人で結構ぢや。俺は此處で水晶玉の御守護をして居るから……汚れたものに觸ると玉が汚れるからのう、貴様往つて助けて來い」

「何だか氣分が悪くて仕方がない、イクよ、せめて傍までついて來て呉れないか。さうしたら俺が一人で助けてやるから」

「エエ意氣地のない男だなア、サア行かう」
とサールを促し榛の木の下に歩を急いだ。女は眞青になつて、最早手足も動かず、ブラリと吊柿のやうに垂つて居る。サールは、手早く女を抱き、

「ア、何と柄にも似合はぬ重い女だなア、此奴ア化州かも知れぬぞ」

と云ひながら助け下した。女は漸くにして氣がついたらしく、キヨロキヨロ其處邊を見廻し、

「ああお前さまは何處のお方か知らぬが、私が折角天國の旅をしかけて居る所を、殺生な、なぜ邪魔をするのだい。よい加減に人を助ける宣傳使が惡戯をして置きなさいよ」

と禮を云ふかと思へば、反對に女は佛頂面をして怒り出した。

「オイ、何處の女か知らぬが、命を助けて貰うて不足を云ふものが何處にあるかい、のうイク、こんな事なら助けてやるぢやなかつたに、チエー馬鹿にしてける。ハハ此奴はキ印だな」

「キ印でも構うて下さるな。朋友でもなければ親類でもなし、お前さまに助けられる理由が無いぢやないか」

「サール」それだつて此犬奴、一生懸命俺の方に向いて救ひを求めたものだから、忙しい道中を繰合せて助けに来てやつたのだ」

「ヘン阿呆らしい、犬が物言ひますか。お前さまも見た割りとは馬鹿だな。人の目的の邪魔をして置きながら、禮を云へなどとは以ての外だ。これ位分らぬ馬鹿野郎が又と世界にあるだらうかなア、私は死ぬのが目的だ。その目的を妨害して置いて何だ、お禮を云ふの云はぬのと……謝罪りなさい、怪しからぬ人足だ」
イク「こりや女、俺達を馬鹿だとは何だ。餘り口が過ぎるぢやないか。貴様は死ぬのが目的だと申したが、死んでどうする積りだ。エーン、何ぞいい目的があるのか」

「ヘン馬鹿だなア、お前達に靈界の事が分つて耐らうかい。馬鹿と云うたのは外でもないが、今の世の中は命がけの事をして人を助け、さうして世界の人間から褒めて貰はうと考へたり、一口の禮でも云つて貰はうと考へる奴ばかりだ。それだから馬鹿と云ふのだよ。命を助けてやつた女に、眉毛を讀まれ、尻の毛をぬかれ、現をぬかし、涎を繰り、終には先祖讓りの財産迄すつかり取られる馬鹿の多い世の中だよ。貴様達も俺が女だと思つて助けに来たのだらう。どうだ、これから骨を抜き取り、章魚のやうにグニヤグニヤに蕩かしてやらうか。俺の目は千兩

目と云うて、一瞥よく城を傾け、山林を吹き飛ばす威力を持つて居るのだぞ。俺のやうな者が娑婆を離れて靈界に行つたならば、娑婆の邪魔者がなくなつて、人民がどれ位喜ぶか知れないのだ。また生かしゃがるものだから、この涼しい目をもつて腰拔野郎を片つ端から骨を抜き、足腰の立たぬやうに殺生をしなくてはならぬワイ。貴様は一人を助けて大きな害を世の中に擴げようとする頓馬だから馬鹿と云つたのだ。これ二人の馬鹿野郎、分つたか。分つたら犬蹲となつてお断りを申せ

「何とまあ、理窟と云ふものは、どんなにでもつくものだなア。まるで高姫や黒姫のやうな事を吐すぢやないか、のうイク」

イクは、

「フン」

と呆れ果て、女の顔を打ち眺め、

「こんな優しい顔をしながら、どこを押へたら、あんな悪垂口が出るのだらうかと頻りにみつめて居ると、女は、

「馬鹿」

と一聲イクの横面を張り倒した。イクはヨロヨロとよるめいて田圃の中に倒れた。犬はイクの懐の水晶玉をくはへるや否や、一生懸命に驅出した。サールは、

「こりや畜生待て」

と叫ぶのを見て、女は手を拍つて笑ひ、

「ホホホホ、馬鹿だな、俺は昨夜山口の森で貴様を嚇さうとした怪物だ。貴様に水晶玉を持たせて置くと俺達の邪魔になるから、計略を以て取つてやつたのだ。

アバヨ、イヒヒヒヒ」

と白い歯を出し、腮をしゃくりながら大狸の正體を現はし、南をさして雲を霞と逃げ出した。サールはイクを抱起し、ブツブツ小言を言ひながら、兔も角も小北山の聖場に参拜せむと、間拔けた面をして力なげにトボトボと進み行く。傍の密樹の枝に梟がとまつて、

「ホー、ホー、ホー助、ホー助、ころりと取られたなア、ホー、ホー、ホー助、アツポー アツポー」

と啼ないて居ゐる。

(大正一二・一・二九 舊一・一・一二・一三 加藤明子録)

第二篇 文明盲者ぶんめいもうじや

第七章 玉返志たまかへし〔一三四三〕

小北山こぎたやまの受付うけつけには、文助爺ぶんすけぢいさまが初はつ、徳とくの兩人りやうにんにしたたか頭あたまをかち割わられ、それから發熱はつねつして床とこにつき、時々ときどき囁言うはごとを云いひ、大勢おほぜいの信者しんじやや役員やくゐんが頭あたまを惱なやましてゐる。そして魔我彦まがひこは不在ふざいなり、初はつ、徳とくの兩人りやうにんは遁走とんそうし、俄にはかに運用うんよう機關きくわんは殆ど停止ほとんていしの厄やくに遭あうた。お菊きくは勝氣かちきな女をんなとて、受付兼うけつけけん神しん殿でん係がかりを兼務けんむし、參詣さんけいして來くる病人びやうにん

の祈願をなし、或は説教を聞かせ、又受付に現はれて、目も廻るばかりの多忙を極めて居つた。お菊はホツと持て餘し、體は繩のやうになつて、チツとばかり愚癡り出した。

「ああ、受付と云ふ役は何でもないものだ、遊び半分は何時でも文助さまが繪を描いてゐる。之も用がなくて暇潰しにやつてゐるのだらうと思つて居つたが、中々自分がやつて見ると忙しいものだ。鎮魂もしてやらねばならず、御祈願もせなならず、ホンにホンに文助さまも御苦勞だつたなア。何卒早く治つてくれれば可いに、これ丈そこら中に美しい花が咲いてるのに、花摘みに行く事も出来やしない。そこへ又初稚姫様が御越しになつたものだから、松姫さまは忙しいのでチツとも手傳うては下さらず、お千代さまもお宮のお給仕やなんかで忙しいさうだし、本當に厭になつちまつた。せめて魔我さまなつと歸つてくれればよいのに、氣の利かぬ奴だな。萬公さまも萬公さまだ、何處を一體彷徨いてるのだらう。歸つて来りや可いに、そしたら又惚れたやうな顔をして、退屈ざましに騷つてやるのだけれどなア。ああ仕方がないワ、何程きばつた所で、先繰り先繰り婆、嬢がやつて

来るのだから、お菊さまもやり切れない。一つこころで晝寝でもやつたらうかなア。此夜の短い日の永いのに、睡ぶつたくて仕様がないう。椿の花でさへも居睡つて、ボトリボトリと首を抜かして溜池の鮒を脅かし、水面を眞赤に染めてゐる。私だつて生物だから、チツとは休養もせなくちや叶ふまい。と獨言を言ひながら、グツと眠つて了つた。そこへ、六十許りの爺が十二三の娘を背中に負ひ、トボトボとやつて來た。

「ハイ、御免なさいませ、私はつひ近在の首陀でムいますが、娘が喉に鯛の骨か何かを立てまして、苦しみ悶え、息が切れさうになつて居ります。何卒神様の御神徳で除つて頂くことは出来すまいかなア」

居眠つてゐたお菊はフツと目をさまし、

「ウニヤ ウニヤ ウニヤ ウニヤ、ようお出でなさいませ、随分日の永いこつてムいますな。モウ何時ですか」

「まだ四つ時でムいます。至急に御願ひ致したい事がムいますので、お世話に預かりたいと思ひ参りました。之は私の孫でムいますが、喉に何だか立ちまして、

困りますので鎮魂とやらをして貰ふ譯には行きませぬだらうかな」

「へー、宜しい、併し住所姓名を伺ひます」

「ハイ、住所姓名は後から申上げます。此通り孫娘が危急存亡の場合でムいますから、早く御祈願をして頂きたいものでムいます」

「それなら特別を以て、先にする手續を後にし、お願い致しませう。併しながら此子の名を聞きませぬと、願ふ譯には参りませぬワ」

「それは御尤もでムいます。娘の名は瀧野と申します」

「ハイ宜しい、サア此方へ連れて來なさい。大神様に願へば直様助けて下さいます。サ、お爺さま、お上りなさい」

「甚だ申し兼ねますが、此通り草鞋をはいて居りますから、足が汚れて居ります。何卒娘だけ上げて下さいませ」

と背中から下した。娘は轉げるやうにして、お菊が願ふ祭壇の前に行つた。お菊は紫の袴を着け、白い着物の上に格衣を羽織つて中啓を持ち、恭しく天津祝詞を奏上し、祈願を凝らした。お菊が熱湯の汗を流しての一生懸命の祈願も容易に効

顯あらはれず、娘むすめは益々ますます苦くるしみ悶もたえるばかりである。お千代ちよは用ようのすきまに階かい段だんを下くだつて受付うけつけへ來きて見みると、怪あやしい爺ぢいが庭にはの隈すみに青あをい顔かほしてしやがんでゐる。神しん殿でんを見れば、お菊きくが一生いつしやうけんめい懸命けんめいに祈きく願わんを凝こらしてゐた。お千代ちよは之これを見みて、

「受付うけつけはサツパリ空屋あきやだ。どれ暫しばらく私わたしが代理だいいりを勤ととめておかうか」

と云いひながら、受付うけつけにチヨコナンと坐すわつてみた。そこへ坂路さかみちを登のぼつて、息いきをスーはづ喘せませながら二人ふたりの男をとこがやつて來きた。これはイク、サールの兩人りやうにんである。

イク「御免ごめんなさい、私わたくしは祠ほこらの森もりのイク、サールといふ者ものでムごいます。もしや初はつ稚わか姫ひめ様さまはスマートといふ犬いぬを連つれてお立寄たちよりになつては居をりませぬか」

「それはようお出いでなさいました。マア御一服ごいつぶくなさいませ。夜前やぜんからお見みえになつて居をりますが、お母かあさまと何なんだか御話おはなしがはづんで居をります。何いづれ手てがあきましたら御知おしらせ致いたしますから、此境内このけいだいのお宮様みやさまを一いっ遍ぺん、御巡拜ごじゆんばいなさいませ」

「イヤ有難ありがたう、兔とも角參拜かくさんばいさして頂いたきませう。オイ、サール、まだ十二三じふにさんらしいが随分ずいぶんしつかりしたものだね。小北山こきたやまはこんな小ちひさい子供こどもで受付うけつけが出來できるのだから、大たいしたものだよ。イルやハルの奴やつ、偉えらさうに受付面うけつけづらを晒さらしよつて酒さけばかり喰くら

ひ、筆先だとかいつて紙ばかり使ひよつて、日の暮れるのばかりを待つてゐるサ
ボ先生とはえらい違だなア

「本當に感心だ。コレ受付さま、お前さまの名は何と云ひますか」

「私の名を尋ねて何となさるのですか。別に用がないぢやありませんか」

「イヤもう恐れ入りました、それならモウお伺ひ致しませぬワ」

「ハハハハ、サール、とうと、やられよつたな。恥を知れよ」

「貴様なんだ、肝腎の水晶玉を犬にとられたぢやないか。犬かと思へばド狸につ

ままれよつて、スコタンを喰はされ、おまけに悪口雑言を浴びせかけられ、よい

恥をさらしたぢやないか、偉さうに言ふまいぞ

「そりやお互さままだ、こんな所へ来て、そんな馬鹿な事を云ふ奴があるかい」

「何とマアお前さま達は、どこともなしに空気のぬけた面をしますね。今聞き

ますれば玉を取られたとか仰有いましたが、本當にラムネの玉落みたいなお方で

すねえ、ホホホ」

イク「ヤ、此奴ア恐れ入ります、お面、お小手、お胴といかれてけつかる。ヤア

こはいこはい、サ、サール行かう」

「オイ一寸待て、此爺さまは、怪しいぢやないか。俺達の顔を見るとビリビリ慄うてゐるぞ」

「ホンにけつ體な爺さまだなア。オイ爺さま、お前一體何處から參つたのだい」

「何卒、そんな事云つて下さるな。孫が大變な病氣にかかつて苦しんで居るので、

今ここへ願つて貰ひに來たのだよ。病氣にさはるから、お前さまは早くお宮さま

へ參つて來なさい」

「オイ、サール、兔も角神様へ御挨拶が肝腎だ、サ參らう」

と云ひながら、受付を立つて澤山の宮を一夕巡拜し始めた。お菊は一生懸命に頼

んでゐる。娘は次第に苦しみ悶えだし、喉につまつた鯛の骨はますます深くおち

込んだものか、息が殆どつまり、無我夢中になつて空を掴み出した。お千代は吃

驚して、側へよつて見れば、大きな狸の尾が娘の尻からみえてゐる。此奴は化物

に相違ないと、早速外へ飛出し、イク、サールの兩人を「早く早く」と手招きし

た。兩人は何事か急用が出來たらしいと、巡拜を半にして打切り、後から拜む事

とし、スタスタと歸つて來た。今まで受付の横に慄うてゐた爺の姿は何時しか消えて、妙齡の美人が坐つてゐる。二人はどつかで見た事のある女だと思ひながら、お千代に跟着いて神殿に進み、祝詞を奏上した。娘は益々苦しみ出した。お千代は娘の背中を、天の數歌を歌うてポンポンと二つ叩いた拍子に、クワツと音がして飛出したのは鯛の骨でもなく、直径一寸許りの水晶玉であつた。一同はアツと驚く間もなく、娘は忽ち古狸となり、受付に居つた女も亦同じく大狸となつて、一生懸命に山越しに姿を隠して了つた。

イク「ヤア畜生、ザマを見い、ウマク俺をチヨ口まかして、水晶玉を盗みよつて、神罰が當つて喉につまり、仕方がないものだから、こんな所へ化けて助けて貰ひに來よつたのだな。ヤア今度は確かり氣を付けなくちやならないぞ。ヤア娘さま、貴女のお蔭で寶が元へ歸りました、有難うムいます。イク重にも御禮申します」
千代「貴方、狸と御親類でムいますか、どうして又あの玉を取られたのです？」
「イヤ、お話し申せば恥かしうムいますが、此玉の手に入つた由來から、取られた因縁を申し上げねばお疑ひが晴れますまい。それでは逐一申上げます」

と狸に騙されて水晶玉を取られた顛末を詳細に物語った。お千代とお菊は轉けて笑った。

「アレマア、馬鹿らしい、狸に御祈禱を頼まれたのだワ。何だか耳が動くと思うて居つたのよ。お千代さまのお蔭で、狸も助かり、私も助かりましたワ。モウ此上お祈りをしようものなら、息が切れる所でしたワ」

「オイ、イク、貴様に持たしておく、どうも劍呑だ、今度は俺が持つて行くから此方へ渡せ」

「メメ滅相な、俺が持つて居つたら可いぢやないか。貴様の様な慌て者に持たしておく、気が氣でならぬワ。マア子供は大人に一任した方が安全だよ」

「ヘン、仰有いますワイ。何卒狸に取られぬ様に確かり御監督を願ひますよ。何は兔もあれ、神前に御禮を申しませう」

と四人は横縦陣を作り、赤心を籠めて一生懸命に感謝祈願の詞を奏上した。

イク「妖怪に騙し取られた寶玉も」

神かみの恵めぐみに吾手わがてに還かへれり㊦

サール㊦イクの奴やつまぬけた面つらをしてる故ゆゑ
狸たぬきの奴やつに眉毛まゆげよまれし㊦

イク㊦馬鹿ばか云いふな貴様きさまが曲津まがつにつままれて
首くびつり女をんなと見違みちがへた故ゆゑよ㊦

サール㊦横面よこつらを狸たぬきの奴やつに擲なぐられて
田圃たんぼに落ちおし可笑をかしき奴やつかな㊦

イクコ イクらでも人の悪口わるくちつくがよい
善言美詞ぜんげんびしの道みちを忘れてわす

サールコ 馬鹿ばか云いふな俺おれの辜丸きんたま握にぎらうと
思おもうて頭あたま擲なられた癖くせにコ

イクコ 擲なりたる男をとこに又またも擲なられて
サールの馬鹿ばかがベソをかくなりコ

サールコ 其その様な減へらず口ぐちをば叩たたくなら
水晶玉すいしやうたまをこつちへ渡わたせよコ

イクすいしやう「水晶みたまの靈なればこそ水晶すいしやうの
玉たまの守護しゆごをさせられてゐる」

サールたまぬ「玉脱まぬけけの間まぬけ拔男をとこが水晶すいしやうの
玉たまを抱いだいて罪つみを作つくるな」

イクまも「この玉たまは小北こぎたの山やまの皇神すめかみの
守まもりと二人ふたりの惠めぐみにかへれり。

さりながらサールこころ心もを持もち直なほせ

お前まへの罪つみが玉たまを汚けがせば。

汚よごれなば又またこの玉たまは逃にげて行ゆかむ

サールの玉たまをまたも嫌きらひて」

お千代ちよ「水晶すいしやうの瑞みづの御靈みたまは何神なにがみに
頂いただきましたか聞きかまほしさよ」

イク「この玉たまは日ひの出神でのかみの賜たまものぞ
いや永久とこしへに離はなされぬ玉たま」

お千代ちよ「放はなせとは誰たれも言いはねど油斷ゆだんから
狸たぬきの奴やつに取とられ玉たまふな」

イク「これは又また思おもひもよらぬお言葉ことばよ
萬劫まんごふまつ末代だい放はなしは致いたさぬ」

お菊きく「玉脱たまぬけのやうな面つらした二人男ふたりをとこの

この行先ゆくさきが案あんじられける。

初はつ稚わか姫かひめ神かみの命みことは此この二人ふたりを

嫌きらひ玉たまふも宜うべよとぞ思おもふ。

どことなく蟲むしの好すかないスタイルだ

バラモン軍ぐんに居をつた人ひとだらう」

イク「女をんなにも似合にあはずよくもベラベラと

大人おとななぶりの骨髒ほねなぶりするよ」

サール「吾われとても男をとこと生うまれた上うへからは

女をんなに負まけて居をれるものかい。

乙女子をとめごよがんぜなしとて餘あまりだよ
荒男あらしやをば嘲弄てうろうするとは

お菊きく「嘲弄てうろうする心こころは微塵みぢんもなければ
何なんとはなしに可笑をかしくぞなる」

お千代ちよ「お菊きくさま私もわたし二人ふたりの顔かほをみて
空氣くうきぬけ野郎やらうと思おもひましたよ。

ド狸たぬきに玉たまを取とられてメソメソと
吠面ほえつらかわく男をとこなりせば

サール「これ程ほどに口くちの達者たつしやな乙女子をとめこが
居をるとは知らしず訪ねたつ来きしよな」

イク「この乙女をとめ一筋繩ひとすぢなはでは行ゆかぬらし
俠客けふかくそだ育そだちの生地きぢが見みえてる」

お千代ちよ「松彦まつひこや松姫まつひめさまを親おやに持もつ
お千代ちよの方かたを知らしぬ馬鹿者ばかもの」

イク「これはしたり松彦まつひこさまの嬢様ぢやうさまか
知らぬ事こととて御無禮ごぶれいしました」

お千代ちよ「あやまれば別に咎とがめはせぬ程ほどに
これからキット謹つつしむがよい」

イク「狸たぬきには大馬鹿おほばかにされ梟ふくろには
笑わらはれ又またも馬鹿ばかをみるかな」

サール「アハハハ八呆あきれて物が言いはれない
彼方あなた此方こなたに化物ばけものがでる。

この女眉毛をんなまゆげに唾つばをつけてみよ
キット尻尾しつぽがついて居をらうぞ」

お千代ちよ「面白い狸たぬきのやうな面つらをして
つままれるのは當然あたりまへぞや」

サールさーる「どこまでも二人ふたりの乙女をとめに馬鹿ばかにされ
どこで男をとこの顔かほが立たたうか」

イクい「何なによりも水晶玉すいしやうだまが手てに入いらば
何なんと云いはれても辛抱しんぼうせうかい。

此この様やうなお轉婆娘てんばむすめがあればこそ
尻尾しつぽを出だした化狸野郎ばけたぬきやらう。

お千代ちよさまお前まへのお蔭かげで寶玉ほうぎよくが
返かへつたのだから拜をがみますぞや」

お千代ちよ「お菊きくさまこんな腰こしぬけ拔をと男こら等に
玉たまを與あたへた神かみは何なに神がみ」

お菊きく「義理ぎりてんじやう天上ひ日の出でのかみ神かみの格かくだらう

魂たまも調しらべず渡わたす神かみなら。

眞正しんせいの日の出でのかみ神かみは此この様やうな

頓馬とんま男をとこに渡わたす筈はずなし」

と互たがひに擲からか拵かひながら、受付うけつけに集あつまつて白湯さゆに喉のどを潤うるほし、それより二人ふたりは各かく神じん社じゃ
を参拜さんぱいし始はじめた。

(大正一二・一・二九 舊一一・一二・一三 松村眞澄録)

第八章 巡拜（一三四四）

イク、サールの二人は、大廣前の神殿を拜禮しをはり、
館の前に立つて、
蠓蝮別が籠りしと云ふ

サール「蠓蝮別お寅婆さまの古戦場
見るにつけても可笑しくなりぬ」

イク「この館土瓶が踊り徳利舞ひ
杯われし古戦場なり」

サール「魔我彦やお寅婆さまが改心を

なしたる場所ばしよも此館このやかたなり〆

イク〆 酔よひドレの熊公くまこうさまが飛とび込んで

脅おどし文句もんくで金かねを千兩せんりやう（占領せんりやう）。

一段いちだんと高たかく築きつける段梯子だんばしこ

登のぼりて行ゆくも姫ひめを訪たづねて〆

二人ふたりは木花姫このはなひめを祀まつりたる小ちひさき祠ほくらに参拜さんぱいし拜禮はいれいを了をはり、

イク〆 木花姫神このはなひめかみの恵めぐみは目まのあたり

開ひらき初そめにき木々きぎの梢しんがきに〆

サール 木の花の姫の命の御前に

その鼻高をさらすイクなり。

天教の山より下りし皇神は

わが馬鹿面を笑ひますらむ。

イクの奴狸の曲に魅まれて

恥も知らずに大前に來つ

斯く歌ひ、今度は金勝要神の祠の前に進み拜禮を了り、

イク 縁結ぶ畏き神と聞きしより

またたまらずして詣で來にけり

サール 其面で何程神を拜むとも

妻つまとなるべき人ひとのあるべき』

イク 『吾輩わがはいの顔かほを眺ながめて笑わらふより
一寸ちよつと見て来こい水鏡みづかがみをば
』

サール 『顔容姿かほかたちすがたで妻つまが出来できようか
魂麗たまうるはしき人ひとでなくては。
此この様やうに見みえても俺おれはをちこちの
女をんなにチャホヤされる曲者くせもの』

イク 『其様そのやうに慢心まんしんばかりするでないよ

乙女をとめに馬鹿ばかにされた身みながら。

要かねの神貴かみうづの御前みまへにこんな事こと

囀さへつる奴やつは鰐鳥やもめどりかも。

さア行ゆかう大神様おほかみさまに恥はづかしい

女をんななんぞと言いふ面つらでなし

アハハハハハハ

と笑わらひながら玉依姫たまよりひめ（龍宮りゅうぐうの乙女おとひめ）様さまを祭まつつたる祠ほこらの前まへに進すすみよつた。

イクくいろいろの寶たからをためて海うみの底そこに

隠かくし給たまひし欲よくな神様かみさま

サールく馬鹿ばか言いふな乙姫様おとひめさまは今いまは早はや

物質欲ぶつしつよくに離はなれた神かみよ〚

イク〚これはしたり失禮しつれいな事ことを言いひました
聞直ききなほしませ乙姫おとひめの神かみ〚

サール〚神様かみさまは寶たからを以もつて人々ひとびとに
與あたへ給たまへどお前まへには列外れつぐわい〚

イク〚列外れつぐわいか又案外またあんぐわいか知しらねども
寶たからなくて世よに立たつを得えず〚

サールぶつしつ「物質たからもとの寶なん求めて何なんになる

朽くちぬ寶たからを靈みたまにつめよ」

イクば「馬鹿かい云いふな水晶玉すいしやうたまも物質ぶつしつよ

されど暗夜やみよを照てらしましける。

金かねなくて何なんのおのれが人間にんげんかと

世よの人々ひとびとは相手あひてにもせず。

それ故ゆゑに俺おれは金銀財寶きんぎんざいほうを

むげには捨すてぬ冥加者みやうがものぞや」

サールやつ「イクの奴やつイク地ぢの足たらぬ證據しょうこには

寶たから々たからと憧あこがれゐるも。

かみさま なにほどだから
神様は何程寶あるとて

びんぼうづら
貧乏面にくれるものは。

ゆ め しゃつぐわつ
サア行かう目の正月をするよりも

たからわす たからひろ
寶忘れて寶拾ひに。

おれ たから
俺の云ふ寶といふは金銀や

すいしやう をしへ たから
水晶でない教の寶よ

かくうた をは
かく歌ひ終つて、
こんど
今度は中段の宮の
ちうだん
前に進んだ。
まへ
此處には日の大
こ こ
神の祠が建つ
おほかみ
てゐる。

いぎ なぎ すめおほかみ
イク 伊奘諾の皇大神を齋りたる

みあらか こと つるは
この御舎は殊に麗し

サールそのはず 其筈ただつくしの日向ひむかの立花たちばなで

楔みそぎ給たまひし神かみに坐ましませば〆

イクこ許こ々た多た久くの罪つみや汚けがれに溺おぼれたる

靈みたまを洗あらへ神かみの御前みまへに〆

サールまがかみ 曲神たほかに騙たほられたる愚おろかさを

許ゆるし給たまへと詫わびよイク公こう〆

イクあたま かもてなや頭打あたまたりよが打うたりよまいが

お前まへの知しつた事ことでなければ〆

サールみちづ 道伴れの一人ひとりが狸たぬきに叩たたかれて

吠面ほえづらかわくを見るみつらさかな。

天教てんけうの山やまに天降あもりし日ひの神かみの

宮みやは殊ことさら更高たかくおはせり〇

又また此處ここを去さつて、今度こんどは月つきの大神おほかみを齋まつりたる祠ほくらの前まへに進すすんだ。

イクす 素盞さの鳴をの神かみの御靈みたまを祀まつりたる

社やしろの前まへに月つきの大神おほかみ〇

サールふるだぬき 古狸ふるだぬき梟くろの奴やつに馬鹿ばかにされ

乙女をとめにまでも笑わらはれにけり。

さながらに愛想あいさつも月つきの大神おほかみが

貴様の面を笑ひ給はむ

イクかなら馬鹿云ふな善言美詞の神様だ
必ずよきに見直しまさむを

サールこのをとこせかい此男世界に稀な馬鹿なれば
守らせ給へ月の大神

イクたまサールこそ馬鹿の證據にや水晶の
玉をばイクにせしめられける

サール「イクの奴やつイク地ぢがないと知しつた故ゆゑ
玉たまを持もたせておいたばかりよ」

イク「サア行ゆかう月の光つきひかりに照てらされて
何なんとはなしに恥はづかしき宵よひ」

今こんど度は最上段さいじやうだんの國常立尊くにとこたちのみことの祠ほこらの前まへに參拜さんばいした。

イク「掛卷かけまくも畏かしこき神かみの御前おんまへに

詣まうで來きたりし吾われは罪人つみびと。

さりながら悔くい改あらためて大神おほかみの
道みちに仕つかへしイク身魂みたまなり」

サールサール「われこそは皇大神すめおほかみの御恵みめぐみに

與あづかりました未ひつじサールの神かみ」

イクイク「罰當ばちあたりサールのやうな面つらをして

坤ひつじとはよくもいはれた。

お前まへこそ世人よびとがサールの人真似ひとまねと

嘲あざけるとても仕方しかたあるまい」

サールサール「三五あななひの道みちにサール者ものありと云いふ

此神司このかむじ知らぬ馬鹿者ばかもの」

イク 『國くに所ところ立たちのき彦ひこの狼おほかみと
人ひとに言いはれた馬鹿ばか者ものは誰たれ』

斯かく二人ふたりは拜禮はいれいを終をり、次ついで互たがひに擲揄からかひ合あひながら、枝振えだぶりのよい松まつの七八しちはち
本ほんかたまつた下したに、餘あまり廣ひろからず狹せまからざる瀟洒せうしやたる一棟ひとむねが建たつてゐる。それが
所謂いはゆる松姫まつひめの館やかたであつた。

イク 『常磐木ときはぎの松まつの木蔭こかげに建たてられし
松姫館まつひめやかたをなつかしみ思おもふ』

サール 『吾慕わがしたふ初稚姫はつわかひめのいます上うへは
一ひとしほ戀こひしき館やかたなりけり』

イクこぎ「小北山やまかなめ要もととなりし此館このたちは

扇あふぎの如ごとくに建たてられにける」

サールとき「常磐木はぎの松まつの緑みどりは青々あをあをと

とめどもなしに伸のび立たてるかも」

イクはつわかひめ「初稚姫神かみの司つかさがますと聞きけば

胸轟むねとどろきて進すすみかねつつ」

サールおくびやうかせ「臆病風また又吹ふき荒すさみイクの奴やつ

イク地ぢのなきを暴露はくろせりけり」

イク□ そんな事こと言いふなら俺おれが先さきに立たち
一ひとつ肝きもをば見みせてやらうかい□

サール□ 面白おもしろい初はつ稚わか姫ひめの前まへに出でて
叱しかり飛とばされべソをかくだろ□

イク□ 水晶すいしやうの玉たまを抱いだきしわれなれば
初はつ稚わか姫ひめも褒ほめ給たまふべし。

その時ときは指ゆびをくはへてサールの奴やつは
恨うらめしさうに見みてゐるがよい□

サールひめさま 姫様に會あうたら皆素破みんなすつぱぬき

一いちぶしじふ伍一まを仕を申あし上あぐべし。

その時ときは赤あかい顔かほをばせぬがよい

梟鳥ふくろどりにもなぶられる奴やつよ」

イクひと 〃イクらでも人の悪口わるくち言いふがよい

首吊りくびつそこねし死損しにぞこね奴めが」

サールきさま 〃貴様とて矢張やはりくびつ首吊り仲間なかまぞや

何どうして姫ひめに顔かほがあはせよう」

二人ふたりは流石さすがに恥はつかしさに堪たへかね、松姫まつひめの館やかたの四五しごけん間んばかり側そばまでやつて來きて、

互たがひに「お前まへから先さきへ行ゆけ」「イヤ貴様きさまから先さきへ」と、押合おしあひをやつてゐる。スマー
トは二人ふたりの影かげを見るみより、喜よろこんで走はしり來きたり、胸むねに飛とびついたり、背せなか中に抱だきつ
たり、頬ほほをなめたり、勇いさみ出した。

イク「ヤア、スーちゃんか、先まづ先まづ御無事ごぶじでお目出度めでたう。漸やうやく此處ここまでお後あとを
慕したつて参まゐりました。何卒どうぞ姫様ひめさまに宜よろしうお取とりなしを願ねがひますよ」

サール「ハハハハ馬鹿ばかだなア。此頃このごろの衆議院しうぎゐんの候補者こうほしやのやうに、犬いぬにまで追從つゐしやう
してゐやがる、犬いぬがもの言いふかい」

「主人しゅじんに威勢いせいがあると、何なんだか犬いぬに迄頭まであたまが下さがるやうな氣きになるものだ。そこが
人情にんじやうの然しからしむる所ところだよ。娘むすめを嫁よめにやつてある在所ざいしよへ入はいると、其親そのおやは野良犬のらいぬにで
も辭儀じぎをするといふぢやないか。貴様きさまも譯わけの分わからぬ奴やつだなア。そんな事ことで今日こんにちの
虚偽きよぎ萬能ばんのうの世よの中に、どうして生存せいぞんが續つづけられると思おもうてるか、時代じだい遅おくれの骨董こつどう
品ひんだなア」

「ほつといてくれ、何程なにほど偉えらさうに云いつても、姫様ひめさまに叱しかられるかと思おもつて、ビリビ
リしとるやうな腰拔こしぬけの言葉ことばに、何どうして權威けんゐがあるものか、マア、俺おれのすること

を見てをれ、エヘン」

と云ひながら、思ひ切つて門口に立寄り、怖さうに中を眺めた。初稚姫と松姫は何事か一生懸命に、ニコニコしながら話の最中であつた。サールがガラリと戸を開け、

「へーご免なさいませ。松姫様、始めてお目にかかります。私は祠の森のサールと申す者、モ一人の従者はイクと申します。イヤもう意氣地のない野郎でムいませから、何卒可愛がつてやつて下さいませ」

松姫「それはそれはよくマアいらせられました。サ、どうぞお上り下さいませ」

サール「スマートさまも御壯健で、大慶至極に存じます」

と初稚姫に御機嫌を取らうといふ考へか、切りに犬に追従してゐる。イクは不在の家へ盗人が這入るやうな調子で、ビリビリもので、足音もさせず這入つて來た。

初稚姫は二人を見て、言葉靜に、

「貴方はイクさま、サールさま、神様へお参りでムいますか」

二人は、

「へー、あの、何です」

と頭をかき、モチモチとして土間に踞んで了つた。

初稚「妾に何ぞ御用がムいましたのか、何卒早く仰有つて下さいな」

イクは思ひ切つて、

「イヤ實の所は姫様の、何處までもお供をさして頂かうと思ひまして、お後を慕ひ参つたのでムいます。吾々兩人の眞心をお汲み取り下さいまして、是非にお供をさして頂きたうムいます」

「貴方、山口の森で何か變つたことはムいませぬでしたか」

「ハイ、イヤもう面白いこつてムいましたよ。結構な御神力を戴いて鬼の奴、二匹迄遁走させました。それはそれは随分愉快なものでムいましたよ」

「それはお手柄でムいましたな。そして貴方、何だか神様から頂いたでせう」

「ハイ、頂きました」

「無事に此處まで、貴方は守護して來ましたか。途中に他の者の手に入るやうな

ことはありませなんだかな

「へ、此通り、此處に所持して居ります。實に立派な水晶玉で△います」

「それは夜光の玉と云つて、水晶ではありませぬ。筑紫の島から現はれた結構なダイヤモンドですよ」

「へーエ、さうで△いましたか、誠に有難いこつて△いました」

「貴方、途中で妖怪につままれ、一旦ふんだくられるやうな、不都合な事はなさいますまいな」

サール「イヤもう恐れ入りました。實の所は、古狸に騙かされ、取られて了つたのですが、お千代さまのお蔭で再び元へ返つたのです」

「其玉は一旦曲神の手に入つた上は、大變に汚れて居りますよ。これは今のうちに襖をなさらぬと、役に立たなくなりますからねえ」

イク「鹽水を貰つて清めませうかなア」

「貴方の無形の魂をお清めになれば自然に玉は淨まります。そしてお前さまは其玉に執着心を持つてゐるでせう。なぜサールさまに渡さなかつたのですか。一旦

貴方あなたの手てに入り、妖魅えうみに取とられたのだから、貴方あなたは玉たまに對たいして、監督權かんとくけんを自然しぜんに放棄ほうきしたやうなものです。今度こんどはサールさまに持もたせておくが宜よろしい。實じつの所ところは妾わらわより日ひの出神でのかみ様さまにお願ねがひ申まをし、貴方等あなたがたの熱心ねつしんに感かんじて、お二人様ふたりさまの中なかへ一個いっこをお與あたへ申まをしたので、此玉このたまは二人ふたりの身魂みたまが一つひとつになつた證據しょうこです。決けつして一人ひとりが獨占どくせんすべき物ものではありません。即すなはちイクさまの心こころはサールさまの心こころ、サールさまの心こころはイクさまの心こころ、二人一體ににんいつたいとなり、神界しんかいの爲ために活動くわつどうなさるやうに仕組しぐまれてあるのです」

サール「オイ、イク州しゅう、どうだ。ヤツパリ寶たからの獨占どくせんは許ゆるされまいがな。貴様きさまが自分の物もののやうにして、俺おれにも碌ろくに見みせず、懷ふところへ捻ねぢ込こんで來きよつたものだから、神罰しんばつが當あたつて、狸たぬきの野郎やらうに一旦いつたん取とられて了しまつたのだよ」

「モシ姫様ひめさま、さうすると此玉このたまは、これからサールに渡わたすべき物ものでムむいますか」

「誰たれの物ものといふ譯わけには參まゐりませぬ。お二人ふたりさまが交か代たみに保ほ護ごなさるれば宜よろしい。そして此寶このたからは世界救濟せかいきうさいの爲ための御神寶ごしんぼうで、人間にんげんの私わたくしすべき物ものではありません。暫しばく拜借はいしやくしてゐる考かんがへになつて、大切たいせつに保ほ存ぞんなさいませ。そして其玉そのたまが手てに入いつた以い

上は、妾について来る必要はありません。一時も早く祠の森に歸つて下さい。貴方の御親切は有難うございますが、妾は神様が澤山に守つて下さいますから、決して淋しい事は無いませぬからな」

サール「それなら、此玉を貴方に御返し致します。何卒、どんな御用でも致しますから、そんな事仰有らずに、サール一人でも、ハルナの都までお供を許して下さいませ。もし此通りでムいます」

と熱誠を面にあらはして、涙を流しながら頼み込むのであつた。

初稚姫「夜光る寶を神に得し君は

祠の森に歸り行きませ。

この玉は日の出神の賜ひてし

暗夜を照らす珍の御寶。

曲神のたけり狂へる月の國へ

かかる寶を持ち行くべしやは。

汝なれこそは此この御寶みたからを守るまもべく

計はかり給たまひし神かみの御心みこころ

ハルナへは供ともを連つれ行ゆく事ことならず

神かみの嚴きびしき仰おほせなりせば」

イク」姫様ひめさまのその御言葉おことばには背そむかれず

さりとして此この儘まま歸かへるべきやは」

サール」いかならむ仰おほせ受けさせ給たまふとも

許ゆるさせ給たまへ見直みなほしまして」

初稚姫はつわかひめ 益良夫ますらをの心こころの花はなは匂にほへども

手折たをらむ由よしもなきぞうたてき

イク 〆さりとても此この儘ままこれが歸かへりよか

假令たとへ死しすとも姫ひめに仕つかへむ

サール 〆どうしても許ゆるし給たまはぬ事ことならば

われは此ここ處こにて腹はらを切きるなり

松姫まつひめ 〆姫君ひめぎみの嚴いつの言葉ことばを聞きかずして

迷まよへる人ひとぞ憐あはれなりけり。

赤心の溢れ出でたる益良夫が

心はかりて涙こぼるる。

さりながら皇大神の御心に

背くべしやは宣傳使のわれ

初稚姫 伊ク、サール二人の司よ村肝の

心鎮めてかへりみませよ

伊ク 今暫し思案定めていらへせむ

何は兔もあれ頼み参らす

サールひめぎみ姫君の言葉ことばを背そむくにあらねども

彌猛心やたげこころを抑おさゆるすべなし

さりながら暫しばし彼方かなたに休やすらひて

身みの振方ふりかたを胸むねに問とひみむら

斯かく歌うたを以もつて姫ひめに答こたへ、蝶いもり蛸わけ別べつ、お寅とらの住居ぢゆうきよせし元もとの教けう主しゆ館やかたに退しりぞきて、二人ふたりは茶ちやを啜すすりながら、腕うでを組くみ、吐と息いきをもらし、進しん退たい谷きはまつて、涙なみだに暮くれてゐた。これより初はつ稚わか姫かひめは松まつ姫ひめに別わかれを告つげ、二人ふたりの隙すきを窺うかがひ、ススママートトを伴ともなひ、逸いち早はやく聖せい場じやうを立たち出いで、征せい途とに上のぼることとなつた。イク、サールの兩りやう人にんは、依い然ぜんとして初はつ稚わか姫かひめは松まつ姫ひめ館やかたにいま事ことと確かく信しんし、お菊きくに酒さけを勸すすめられ一いち夜やを明あかした。そして文ぶん助すけの危き篤とくを聞きいて、夜よ中なか頃ころ館やかたを飛とび出だし、河か鹿じか川がはに降くだつて水みづ垢ごり離りを取とり、一いつ生しやう懸けん命めいに其その恢くわい復ふくを祈いのつた。

(大正一二・一・二九 舊一一・一二・一三 松村眞澄録)

第九章 黄泉歸（一三四五）

侠客育ちのお菊は年にも似合はず人馴れがして、二人の男をよくもてなし、夜中頃まで酒を勧め互に歌などを詠み交してゐた。イク、サールは初稚姫にお供を願つた處、あの様子では到底許されさうにもない。夜光の玉は戴いて嬉しいが、其爲に自分の目的を遮られるのは、又格別に苦しい。初稚姫さまも寶を與へて、吾々の進路を壅塞せむとし給ふ、其やり口、随分お人が悪い……と時々愚癡りながら、お菊の酌でチビリチビリと飲んでゐた。されど神經興奮して、或は悲しく或は淋しくなり、ま一度夜が明けたら、所在方法を以て姫に願ひ出で、どうしても聞かれなければ、自分等二人は自由行動をとり、後になり先になりしてハルナの都まで行かねばおかぬ。神様が吾々の決心を試してゐるのかも知れぬなどと、積んだり崩したり、ひそびそ話に時を移した。お菊は既に既に初稚姫が此聖場を出立された事はよく知つてゐた。併し二人に餘り氣の毒と思つて、其實を明さなかつたのである。

イク ㊦ 默然と手を組みし儘寝もやらず
息の白きに見入りけるかも ㊦

サール ㊦ 悲しみは冥想となり歌となり
涙となりて吾をめぐるも ㊦

お菊 ㊦ 益良夫が固き心をひるがへし
歸り行きます事のあはれさ ㊦

イク ㊦ 何事の都合のますか知らねども
強ひて行かましハルナの都へ ㊦

サールマ益ス良ラ夫をが若ワき女をに弾ハかれて
恥ハの上ウ塗ヘするぞ悲カしきキ

お菊キ皇ス神メは何イ處ヅの地チにも坐マませば
いまし二人フは此コ處コに居ルたまへヘ

イクイク度タか思オひ返カしてみたれども
思オひ切キられぬ初シ一念イなりニ

サールタ玉マの緒オの命イ惜ノしまシまず道ミの爲タに
進スむ吾ワ身ミを許ユさせ給タへヘ

神國かみくにに生うれあひたる吾々われわれは
神かみより外ほかに仕つかふるものなし
』

イク『いかにして此この難關なんくわんを切きりぬ抜ぬけむ
ああ只ただ心々こころこころなりけり』

お菊きく『汝なが心こころ深ふかくも思おもひやるにつけ
われも涙なみだに濡ぬれ果はてにける。

魔我彦まがひこの司つかさなりともましまさば
かくも心こころを痛いためざるらむ』

イクイ 兔と 角かく も 初はつ 稚わか 姫ひめ に 今いま 一いち 度ど
命いのち を 的まと に 願ねが ひ み む かな

サールサー 千ち 引び 岩いは 押お せ ども 引ひ け ども 動うご き な き
固かた き 心こころ を いか に と や せ む

お菊きく 夜よる の 間ま に も し も 嵐あらし の 吹ふ く なら ば
汝なれ 等ら 二ふ 人たり は いか に 散ち る ら む

イクイ 度たび か 嵐あらし に 吹ふ か れ 叩たた か れ て
實み を 結むす ぶ な り 白しろ 梅うめ の 花はな は

サール 〇 敷島の 大和心は白梅の

旭あさひに 匂におふ 如ごとくなりけり。

大和魂やまとたまふる 振おこひ 起おこして 進すすみ 行ゆかむ

千里萬里せんりばんりの 荒野あらのわたりて 〇

イク 〇 岩根木根いはねきね ふみさく みつつ 月の國つきくにに

進すすまに やおかぬ 大和魂やまとたましひ 〇

斯かく 三人さんにんは 夜更よふけまで 眠ねも やらず、 淋さびしげに 歌うたを 詠よんで、 初稚はつわかひめ姫ひめの 拒きよ否ひの 如いかん何いかんを 氣遣きづかひつつ あつた。 俄にはかに 騒さわがしき 人ひとの 聲こゑ、 足駄あしだの 音おと、 何事なにことならむと 耳みみを すます 處ところへ、 お千代ちよは 慌あわただしく 入いり 來きたり、

〇 お菊きくさま、 文助ぶんすけさまの 様子やうすが 變へんになりました。 何卒どうぞ來きて 下くださいな 〇

お菊きく 〇 そら 大變たいへんです、 もしお二人ふたりさま、 此處ここに 待まつて みて 下ください。 一寸ちよつと 文助ぶんすけさま

の居間まで行つて來ます」

と早くも立出でむとする。二人は驚いて、

「私もお供しませう」

とお菊の後に従ひ、文助の病室へ駆け込んだ。見れば松姫が一生懸命に魂返しの祝詞を奏上してゐる最中であつた。數多の役員信徒は室の内外に狼狽へ騒いで、殆どなす所を知らざる有様である。イク公は、

「御免」

と云ひながら、文助の側に寄り、松姫に向ひ、

「御苦勞さまでムいます」

と軽く挨拶し、懷中から夜光の玉を取り出して、文助の前額部に當て、赤心を捧げて十分間ばかり祈願を凝らした。此時既に文助は冷たくなつてゐた。只心臓部の鼓動が幽かにあるのみ。

「ヤア此奴ア駄目かも知れませぬな、實に困つた事です。松姫様、此玉を貴女にお預け致します。何卒之を前額部に離さぬやうに當てておいて下さい。私はこれ

から河鹿川で楔をして参ります
とイクはサール、お菊を伴ひ、河邊に向つた。そして神政松の根元に衣類を脱ぎ
すて、ザンブとばかり飛込んで、鼻から上を出し、三人聲を揃へて、文助の再び
蘇生せむ事を祈つた。

お菊「赤心を神に捧げて仕へたる

司の命救ひ給へよ。

惟神のまにまに行く人を

止めむとするわれは悲しも

イク「何事も速川の瀬に流しすてて

清き身魂を甦らせよ

サール□死しして行ゆく人ひとの命いのちをとどめむと

願ねがふも人ひとの誠まことなりけり。

今いま一度息いちどいき吹返ふきかへし道みちの爲ために

盡つくす眞人まびととならしめ給たまへ□

お菊きく □日頃ひごろより誠まこと一つひとつの此翁このおきなを

神かみも憐あはれみ救すくひますらむ。

道みちのためよに世よのため盡つくす此翁このおきなを

救すくはせ給たまへ神かみの力ちからに。

無理むりばかり神かみの御前みまへに宣のる心こころを

あはれと思おもへ天地あめつちの神かみ□

と心こころ急せくまま、口くちから出で任まかせの歌うたを歌うたひ、
激流げきりうに浮うきつ沈しづみつ、
危険きけんを冒をかして祈いの

り出した。大神もこの三人が赤心を必ず許し給ふであらう。平素は悪戯好の茶目男、餘り親切らしく見えぬイク、サールの口の悪い連中も、お轉婆娘のお菊も、人の危難に際しては其赤心現はれ、吾身の危険を忘れて神に祈る。これぞ全く美はしき人情の發露にして、常に神に従ひ、神を信じ、誠の道を悟り得るものでなくては出来ぬ所爲である。

三人は文助の身を氣遣ひながら歸つて來た。忽ちお菊は神懸状態となつて病床に駆け入り、松姫が手より夜光の玉を取り、左右の耳の穴に代る代る當て、何事か小聲に稱へながら、汗を流して祈つてゐる。イク、サールの兩人は赤裸のまま文助の足を揉んだり、息を吹いたり、あらゆる手段を盡した。「ウン」と一聲叫んで目をパチリとあげ、起上つた文助、四邊をキヨロキヨロ見廻しながら、大勢の集まりゐるを知つて、

「皆さま、何ぞ變つた事が出来ましたか、大勢さまがお集まりになつて居りますか」

お菊「氣がつかしましたか、それはマア嬉しいこつてムいます。本當にお菊も心配

いたしましたよ」

「私は或美はしき山へ遊びに行つて居りました。何だか急に目が見え出して、そこから中の青々とした景色や咲き匂ふ花の色香、久し振りで自分の目が見え、世の中の明りに接した時の愉快さ、口で云ふ様な事ぢやありませんか。ああ又目が見えなくなつた」

と力なげに云ふ。

松姫「文助さま、貴方は此間から人事不省で、皆の者が大變に心配をして居りました。初、徳の兩人が貴方を打擲したきり姿を晦まし、貴方はその時からチツとも性念がなかつたのですよ。毎日日囃言ばかり云うてゐられました。マアマア正氣になられて結構でムいますワ。松姫も蘇生の思ひが致します」

文助「成程、さう聞けば、そんな事もあつたやうに仄に覺えて居ります。つひ最前も小さい村の四辻で二人に會ひましたが、大變親切にしてくれました」

お菊「文助さま、貴方は此處に寝たきり、そんな男は來ませぬよ。大方夢でも見たのでせう。チツと確りなさいませ。一旦貴方は死んで居たのですからなア」

「イエイエ、私は決して死んだ覺はありませぬ。どこの方が知らぬが、美しい娘さまが私の手を曳いて、いろいろの所へ連れて行って下さいました。そして目を直して下さったお蔭で、永らく見なんだ現界の風光に接し、本當に楽しい旅を續けました。そしてた處に、自分の顔の二三間ばかり前に、大變な光物が現はれ、眩しくてたまらず、暫く目を塞いで居つた所、今度は祝詞の聲が聞え出したので、よくよく耳をすませて考へてみると、松姫さまやお菊さま其他の方々の聲であつた。ハツと思うたら又目が見えなくなりました。」

文助は初、徳の二人の若者と格闘した際、頭蓋骨を打たれて昏倒し、一旦假死状態になつてゐたのである。此時若しもイク、サールの兩人が夜光の玉を持つて居らなかつたなれば、或は蘇生しなかつたかも知れぬ。文助が幽冥界に入つて彷徨うたのは、第三天國の廣大なる原野であつた。そして或村の十字街頭で初、徳の兩人に出會つたのは、何れも其精靈であつた。初、徳の兩人は元より文助を尊敬してゐた。併しながら一時の欲に驅られて、高姫や妖幻坊に誤られ、文助の拾

うておいた妖幻坊の玉を受取つて歸らうとしたのを文助が拒んだので、止むを得ず、こんな騒動が突發したのである。併しながら二人の精靈は肉體の意思と反對で、文助を虐待したことを非常に怒り、暫く兩人の體を脱出して、文助を現界に今一度呼戻さむと此處までやつて來たのである。そこへ熱心なるイク、サール、お菊、松姫等の祈祷の力に依つて、再び現世の殘務を果すべく蘇生せしめられたのである。文助は肉體の眼は既に盲し、非常な不愼な者であつたが、靈界に到るや、忽ち外部的状态を脱出し、第二の中間状態を越えて、第三の内分的状態にまで急速度を以て進んだ。其爲、神に親しみ神に仕へたる赤心のみ殘存し、心の眼開け居りし爲に、天界を見ることを得たのである。

すべて現界に在つて耳の遠き者、或は手足の自由の利かぬ者、其他種々の難病に苦んでゐた者も、靈肉脱離の關門を経て靈界に入る時は、肉體の時の如き不具者ではない。すべての官能は益々正確に明瞭に活動するものである。併しながら假令圓満具足せる肉體人と雖も、其心に缺陷ありし者は、靈肉脱離の後に聾者となり盲目となり、或は癡呆者となり不具者となり、其容貌は忽ち變化して妖怪の

如くなるものである。總て人間の面貌は心の索引ともいふべきものなるが故に、其心性の如何は直に靈界に於ては暴露さるるものである。現界に於ても惡の最も濃厚なる者は、何程立派な容貌と雖も、之を熟視する時は、どこかに其妖怪的面相を認め得るものである。形體は申分なき美人にして、凄く或は厭らしく見える者もあり、又どこことなくお化の様な氣持ちのする人間は、其精靈の惡に向ふ事最も甚だしきを證するものである。

文助は先づ天の八衢の關所に突然着いてゐた。されど本人は自分の嘗て死去した事や、如何なる手續きによつて、こんな見ず知らずの所へ來たかななどと云ふ事は一向考へなかつた。そして現界に残してある妻子のことや、知己朋友の事などもスツカリ忘れてゐた。只神に關する知識のみ益々明瞭になつてゐた。彼は八衢の關所の門を何の氣もなく潛つて行つた。後振り返つて見れば、白面赤面の守衛が二人、門の左右に立つてゐる。

「ハテ不思議な所だ、地名は何といふだらうか、あの守衛に尋ねて見たいものだ」と再び踵を返して側に寄り、文助は、

「此處は何と云ふ所ですか」

と尋ねてみた。二人の守衛は、

「何れ後になつたら分るでせう。お尋ねには及びませぬ。又吾々も申し上げる事は出来ない」

とキツパリ答へた。これはまだ現界へ歸るべき因縁がある事を守衛が知つてゐた

からである。もし此處は靈界の八衢であるといふ事を知らしたならば、或は文助

が吃驚して、現界に於ける妻子のことを思ひ浮かべ、美はしき天國の關門を覗く

事も出来ず、又其魂が中有界に彷徨うて、容易に肉體に還り得ない事を知つたか

らである。文助は何とはなしに愉快な氣分に充たされ、小北山の事も念頭になく、

只自分の行先に結構な處、美はしき所があるやうな思ひで、足も軽々と進むので

あつた。そして俄に目の開いたのに心勇み、フラフラフラと花に憧憬れた蝶の如

く、次へ次へと進んだのである。途中に現界に在る友人や知己竝に自分等の知己

にして、既に歸幽せし人間にも屢出會うた。されど其時の彼の心は歸幽せし者と

歸幽せざる者とを判別する考へもなく、何れも自分と同様に肉身を以て生きて働

いてゐることとのみ思(おも)うてゐたのである。

斯(かく)の如(ごと)く、人間(にんげん)は假死(かしじやうたい)状態(とき)の時(とき)も、又(また)全(ま)く死(し)の状(じやう)態(たい)に入(い)つた後(のち)も、決(けつ)して自(じ)分(ぶん)は靈(れい)肉(にく)脱(だ)離(り)して、靈(れい)界(かい)に來(き)てゐるといふ事(こと)を知(し)らないものである。何(なに)故(ゆゑ)ならば、意(い)思(し)想(さう)念(ねん)其(そ)の他(た)の總(すべ)ての情(じやう)動(どう)に何(なん)等(ら)の變(へん)移(い)なく、且(かつ)現(げん)界(かい)に於(お)けるが如(ごと)き種(しゆ)々(じゆ)煩(はん)雜(ざ)なる羈(き)絆(はん)なく、恰(あ)だか小(せう)兒(に)の如(ごと)き情(じやう)態(たい)に身(み)を置(お)くが故(ゆゑ)である。之(これ)を思(おも)へば人(にん)間(げん)は現(げん)世(せ)に於(お)いて神(かみ)に背(そむ)き、眞(しん)理(り)を無(な)視(み)し、社(しゃ)會(かい)に大(たい)害(がい)を與(あた)へざる限(かぎ)り、死(し)後(ご)は肉(にく)體(たい)上(じやう)に於(お)ける欲(よく)望(ぼう)や感(かん)念(ねん)即(すなは)ち自(じ)愛(あい)の惡(あく)念(ねん)は拂(ふ)拭(し)され、其(その)内(ない)分(ぶん)に屬(ぞく)する善(ぜん)の自(じ)由(ゆう)に活(くわ)躍(やく)することを得(う)るが故(ゆゑ)に、死(し)後(ご)の安(あん)逸(いつ)なる生(しやう)涯(がい)を樂(たの)しむ事(こと)が出來(で)るのである。

天(てん)國(こく)は上(のほ)り難(がた)く地(ぢ)獄(ごく)は落(お)ち易(やす)しと或(ある)聖(せい)人(じん)が云(い)つた。併(しか)しながら人(にん)間(げん)は肉(にく)體(たい)の限(かぎ)り、どうしても外(ぐわい)的(てき)生(しやう)涯(がい)と内(ない)的(てき)生(しやう)涯(がい)との中(ちゆう)間(かん)的(てき)境(きやう)域(い)に居(を)らねばならぬ。故(ゆゑ)に肉(にく)體(たい)のある中(うち)には、どうしても天(てん)國(こく)に在(あ)る天(てん)人(にん)の如(ごと)き圓(えん)滿(まん)なる善(ぜん)を行(おこな)ふ事(こと)は出(で)來(き)ない。どうしても善(ぜん)惡(あく)混(こん)淆(こう)、美(び)醜(しゆう)相(あひ)交(まじ)はる底(てい)の中(ちゆう)有(ゆう)的(てき)生(しやう)涯(がい)に甘(あま)んぜねばならぬ。

人(ひと)の死(し)後(ご)に於(お)けるや、神(かみ)は直(ただ)ち生(せい)前(ぜん)の惡(あく)と善(ぜん)とを調(しら)べ、惡(あく)の分(ぶん)子(し)を取(と)り去(さ)つて、可(なる)成(べ)く天(てん)國(こく)へ救(すく)はむとなし給(たま)ふものである。故(ゆゑ)に吾(われ)々(われ)は天(てん)國(こく)は上(のほ)り易(やす)く、地(ぢ)獄(ごく)は

落ち難しと言ひたくなるのである。併しながら之は普通の人間としての見解であつて、今日の如く虚偽と罪惡に充ちたる地獄界に籍をおける人間は、既に已に地獄の住民であるから、生前に於て此地獄を脱却し、せめて中有界なりと救はれておかねば、死後の生涯を安樂ならしむることは不可能である。されど神は至仁至愛にましますが故に、如何なる者と雖も、あらゆる方法手段を盡して、之を天國に導き、天國の住民として靈界の爲に働かしめ且樂しき生涯を送らしめむと念じ給ふのである。

前にも述べたる如く、神は宇宙を一個の人格者と看做して之を統制し給ふが故に、如何なる悪人と雖も、一個人の身體の一部である。何程汚穢しい所でも、そこに痛みを生じ或は腫物などが出来た時は、其一個人たる人間は種々の方法を盡して之を癒さむ事を願ふやうに、神は地獄界に落ち行く……即ち吾肉體の一部分に發生する腫物や痛み所を治さむと焦慮し給ふは當然である。之を以ても神が如何に人間を始め宇宙一切を吾身の如くにして愛し給ふかが判明するであらう。惟
がらたまちはへませ
神靈幸倍坐世。

第一〇章

靈界土産(一三四六)

小北山の神殿にては、文助が蘇生したる其祝意を表する爲に、盛大なる祭典を行ひ、且直會の宴を張つた。松姫を始め其他一般の役員信者は大廣前に集まつて、文助が神より與へられたる廣大無邊の神徳にあやからむと參籠せる信者は各宿舎より來つて歡喜の神酒に酔うた。文助はソロソロ歌ひ出した。

無限絶對無始無終

生死の上に超越し

此世を造り給ひたる

皇大神の神徳に

生れ出でたる人草は

何れも神の子神の宮

永遠無窮の生命を

保ちて顯幽兩界に

生き通し行く尊さよ

われは一度大神の

恵の綱にあやつられ

ふとした事より靈界に

知らず知らずに突入し

山河草木悉く

現實界に變りなく

大地の上を歩みつつ

吾身の嘗て死去したる

事は一つも知らざりき

之を思へば人の身は

神の教にある如く

不老不死にて永遠に

神の御國に榮え行く

靈物ぞと知られける

ああ惟神々々

一度神の御國へ

旅立したる愉快さは

醒めて此世にありとて

容易に忘るることを得ず

實にも樂しき靈界の

光は今に現然し

宛然高天の神界に

身をおく如き心地なり

松姫司や其他の

百の司の介抱に

再び現世に立歸り

四方の有様伺へば

實にも此世は娑婆世界

罪に汚れし状態に

彷徨ふものとの感深し

神靈界に至りては

目かひの見えぬ吾々も

すべての物をありありと

残る隈なく目撃し

殊更氣分も麗しく

身も軽々と道を行く

地上の世界を行く如き

苦痛は少しも知らざりき

現界人は氣を急ぎ

足を早めて道行けば

必ず呼吸切迫し

心臓の鼓動忽ちに

烈しくなりて息塞り

喉は渴き汗は出で

足は疲れて苦しさを

覺ゆるなれど神界の

旅行は之に相反し

何の苦もなく易々と

思ひの儘に進みけり

實にも此世は苦の世界

厭離穢土ぞと言ふことは

只聖人の方便と

思ひそめしは誤謬と

深くも感得したりけり

抑も神の坐す國は

恨み嫉みも醜業も 塵ほどもなきパラダイス

愛と善との徳に充ち 信と眞との光明に

輝き渡り日限も 土地さへ知らぬ長閑なる

常世の春の如くなり 之を思へば大神の

仁慈無限の御經綸 ゆめゆめ疑ふ餘地もなし

此大前に參集ふ 信徒等よ司等

人の此世にある時は 時世時節に従ひて

國の掟をよく守り 五倫五常の大道を

明め悟り實行し 最第一の神の國

開き給ひし大神の 其神格を理解して

善と眞との徳を積み 神より來る美はしき

智慧證覺に充たされて 假の浮世の生涯を

完全無缺に相送り 凡ての罪を大神の

御前にひれ伏し悉く 悔い改めて天國の

門戸を開く準備をば

此文助は云ふも更

皆さま心を一つにし

身の行ひを慎みて

神の御國の御爲に

吾三五の大道を

盡しまつらむ神力を

具備させ給へと大前に

祈れよ祈れ百の人

これ文助が靈界に

至りて親しく見聞し

實驗したる物語

黄泉路歸りの禮祭に

集ひ給ひし人々に

土産話と述べておく

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

少しも動かぬ神の國

常住不斷の信樂に

身をおくならば何事も

恐るることやあらざらむ

省み給へ百の人

われ人ともに慎みて

此神國に生れたる

恵に報いまつるべく

心の限り身のきはみ 誠を捧げまつるべし

ああ惟神々々 神の御前に文助が

見聞したる一端を 此處に謹み述べ終る

ああ有難し有難し 限りも知らぬ神の恩

果てしも知らぬ御稜威

と歌ひ了り、一同に向つて自分が假死中種々親切な介抱に預かつたことを感謝し、
且將來の自分の神に仕ふる方針に就いて略敘し自席に着いた。次に松姫は歌ふ。

高姫司の開きたる ウラナイ教によく仕へ

支離滅裂の教義をば 至善至美なる大道と

渴仰したる受付の 文助さまも漸くに

三五教の御光に 照らされ給ひ大神の

誠の心を理解して 朝な夕なに神殿に

いと忠實まめやかに仕つかへたる
誠まことの信者しんじやとなり給たまふ

かかる尊たふとき眞人しんじんを
惜をしみ給たまひて神々かみがみは

再びふたたび此世このよに追おひ返かへし
現實界げんじつがいに殘のこしたる

其神業そのしんげふを完成くわんせいし
神かみの御前みまへに復命かへりごと

申まをさせ給たまはむ御心おんこころ
仰あふぐも畏かしこき次第しだいなり

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ
心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

只何事ただなにごとも人ひとの世よは
直日なほひに見直みなほせ聞直ききなほせ

身みの過あやまちは宣のりかへと
善言美詞ぜんげんびしの詔みことり

深遠微妙しんゑんびめうの眞理しんりをば
含ふくませ給たまふ有難ありがたさ

初公はつこう、徳公とくこう兩人りやうにんは
妖幻坊えうげんぼうや高姫たかひめの

醜しこの曲津まがつに欺あそむかれ
朝あさな夕ゆふなに大神おほがみに

いと忠實まめやかに仕つかへたる
此眞人このしんじんを打擲ちやうちやくし

假死状態かしじやうたいに至いたるまで
惱なやめしかども翻ひるがへり

其眞相そのしんさつを思惟しゐすれば
之これも全ま tuttaく神界しんがいの

不可知ふかちてき的きなる御經綸ごけいりん

文助ぶんすけさまは其その爲ために

願ねがうてもなき靈界れいかいの

眞相しんさうまでも探險たんけんし

再ふたび此この世よに歸かへり來きて

世人よびとを導みちびき給たまふべく

計はからひ給たまひし事ことならむ

ああ惟かむながらかむながら神々々

只ただ何事なにごとも神様かみさまに

任まかしておけば怪我けがはない

何程なにほど人ひとが利口りこうでも

物質ぶつしつ界かいに住すむ上うへは

幽玄いうげん微妙びめうの神界しんかいの

深ふかき眞理しんりは分わからない

卑いやしき弱よわき人ひとの身みで

何程なにほど眞理しんりを究きはめむと

焦慮せうりよするとも無益むえきなり

文助ぶんすけさまの物語ものがたり

聞きくにつけてもヒシヒシと

胸むねにこたえて吾魂わがたまは

俄にわかに向上かうじやうせし如ごとく

神かみの御國みくにの有様ありさまを

いと明あきかに悟さとり得えし

歡喜くわんきの心こころに充みたされぬ

いざ之これよりは松姫まつひめは

文助ぶんすけさまを師父しふとなし

すべての執着しつちやく排除はいじよして

いと忠實まめやかに仕つかふべし

許させ給へ眞人よ 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 少しも動かぬ神の國

現實界の人々の 計り知らるる事ならず

ああ惟神々々 神のまにまに進むより

吾等は手段なきものぞ 初稚姫の神司

天國淨土や地獄道 中有界の状態を

いと懇に説き給ひ 歸りましたる其後へ

文助さまの甦り 右と左に眞人が

現はれまして靈界の 其眞相を詳細に

教へ給ひし有難さ ああ諸人よ諸人よ

此世に命のある限り 神に親しみ神を愛し

善と眞との徳を積み 生きて此世の範となり

死しては神の御使と 仕へまつらふ其爲に

三五教の御教を 心ひそめて拜聴し

處世しよせいを誤あやまること勿なかれ
神かみの御前みまへに此度このたびの

ああ惟かむながらかむながら神々々
恵めぐみを感謝かんしゃし奉たてまつる
」

イクは立上たちあがつて歌うたひ出だした。

ああ有難ありがたし有難ありがたし

思おもひ掛がけなき神界しんかいの

深遠しんゑん微妙びめうの經綸けいりんを

今目いままのあたり明あきかに

説とき示しめされし吾々われわれは

此世このよの中なかの人ひととして

いと幸福かうふくの者ものぞかし

文助ぶんすけさまの物語ものがたり

松姫まつひめさまの御教訓ごけうくん

聞きくにつけても何なんとなく

心こころは勇いさみ腕うでは鳴なり

只ただ一刻いつこくもグツグツと

して居をれないよな心持こころもち

俄にはかに湧わき出し全身ぜんしんの

血ちは漲みなぎりて歡樂くわんらくの

涙なみだは胸むねに溢あふれけり

さはさりながら命いのちとも

柱杖はしらとも頼たのみてし

初稚姫の神司 夜前の騒ぎを他所にして

出で行きますとは何事ぞ かかる優しき神人も

文助さまの危難をば 他所に見すてて歸るとは

合點の行かぬ節がある とは言ふものの吾々は

向ふの見えぬ愚か者 智慧證覺に秀れたる

愛と信との善徳を 身に帯び給ひし姫君の

心は如何で吾々の 小才淺智の知悉する

限りにあらずと諦めて 此上何にも言ひませぬ

さは言へ吾はどこ迄も 初心を貫徹せにやならぬ

初稚姫に相反き 假令地獄に墮つるとも

神の御爲世の爲に 盡す誠の益良夫を

神は必ず救ふべし 松姫様よお菊さま

其外百の司たち いかいお世話になりました

之より私は小北山 神の御前に拜禮し

膝ひざの栗毛くりげに鞭むちうつて 特急列車とくきふれつしゃに身みを任まかせ

矢やを射いる如ごとく御後おんあとを つけて行ゆかねばおきませぬ

我慢がまんの強つよい男をとこだと 必ずかならず笑わらうて下くださるな

バラモン軍ぐんの猪突武者ちよとつむしや 首くびもまはらぬ男をとこだと

今迄いままで言いはれて來きたけれど 夜光やくわうの玉たまを保ほ護ごしつつ

常世とこよの暗やみを踏ふみ分わけて 浮うき瀬せに惱なやむ人ひと々びとを

神かみの光ひかりに照てらしつつ 舍身しやしんの活くわつ動どう繼けい續ぞくし

首尾しゆびよくハルナに立向たちむかひ 大神業だいしんげふに參加さんかして

齋苑いその館やかたに復命かへりごと 申まをさむ折をりは小北山こぎたやま

大神殿だいしんでんに參詣まゐまうで 山やまと積つもれる御話おはなしを

皆々みなみなさまの御前おんまへに 申上まをしあぐべき時ときこそは

今いまより樂たのしみ待またれける ああ惟かむながらかむながら神々かむながら

御靈幸みたまさちはひましませよ

と歌ひ了り、サールを促して早くも此場を立出で、初稚姫の後を追はむとした。
松姫は百方言葉を盡して、イク、サールの出立を止むべく、初稚姫の意を體して
説き諭した。されど「はやり」男の猪武者、いかでか其言葉に耳を傾くべき。サー
ルと共に小北山を拜禮し、善一筋の心を渡す一本橋、二人の身なりも怪シの森、
運ぶ歩みも浮木ヶ原を指して進み行く。

(大正一二・一・三〇 舊一一・一二・一四 松村眞澄録)

第一章 千代の菊〔一三四七〕

お菊は歌ふ。

三月三日の桃の花
散り敷く庭の小北山
春めき渡り何となく
小鳥の歌ふ聲さへも

いとど長閑のどかに聞きこえくる
四四十六しじふろくの菊きくの花はな

一つ越こえたる此このお菊きく
朝あさな夕ゆふなに大前おほまへに

清きよく仕つかへし文助ぶんすけの
翁おきなの祝いはひに加くははりて

此この聖場せいぢやうに竝ならびます
多士たし濟せい々の役員やくゐんが

前まへをも怖おぢず一言ひとことの
言こと靈奏たまかなで奉たてまつる

朝あさ日は照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

地ち異い天變てんぺんは起おこるとも
只ただ一身いつしんを神様かみさまに

任まかして仕つかへまつりなば
世よに恐おそろしきものはない

文助ぶんすけさまの甦よみがへり
靈界れいかい土産みやげの物語ものがたり

聞きくにつけても神様かみさまの
廣大無邊くわうだいむへんの御神德ごしんとく

實げに有難ありがたく拜はいします
百ももの司つかさよ信徒まめひとよ

此この世よの泥どろを雪すすがむと
地ち上じやうに降くだりて三五あななひの

教をしへを開ひらき給たまひたる
國治立くにいはるたちの大神おほかみや

豐國とよくにひめ姫ひめの大神おほかみの
化身けしんとあれます嚴御魂いづみたま

瑞の御靈の御教を

朝な夕なに畏みて

心に悟り味はひつ

其行ひを忠實に

盡して神の御心に

酬いまつるは吾々の

最第一の務めぞや

高姫司の開きたる

ウラナイ教の神々は

世に恐ろしき兇黨界

醜の身魂の憑依して

書きあらはせる醜道を

此上なく尊み敬いて

世の人々を迷はせし

蠖蝮別や魔我彦や

母のお寅に至るまで

日に夜に深き罪重ね

此世を曇らせまつれども

至仁至愛の神様は

廣き心に見直して

許し給はむ惟神

神の心はありありと

手にとる如く知られけり

文助さまがよい手本

ウラナイ教に惑溺し

千座の置戸を負ひまして

汚れし此世を清めます

神素盞鳴の大神を

悪鬼邪神と貶しつつ 教を傳へ來りしゆ

もし文助が世を去らば 忽ち無限の地獄道

神に背きし罪科を 冥官共に數へられ

無残の運命に陥らむ 由々しき事よと恐れみて

蠚蝮別や魔我彦や 母の罪をば救はむと

朝な夕なに祈りけり さはさりながら大神の

心は吾等人々の 如何でか圖り知られむや

悔い改めて大道に 甦りなば大神は

必ず許し給ふべく 無限の樂土に導きて

圓滿具足の生涯を 送らせ給ふ事の由

實に有難く悟りけり ああ惟神々々

神の御爲世の爲に 之より腹帯締め直し

災多き世の中の 小さき欲を打忘れ

水に溺れず火に焼けず 錆び朽ち腐らぬ寶をば

高天原の天國に 貯へ置きて永遠の

死後の生涯送るべく 決心したる此お菊

心の空も晴れ渡り 月日は輝き綺羅星は

我靈身に閃きて 愉絶快絶譬ふるに

物なき身とはなりにけり ああ惟神々々

神の御前に吾々が 犯し來りし罪科を

慎み敬ひ悔いまつる

お千代は又歌ふ。

常世の春の氣はひして 四方の山々青々と

甦りたる現世界 花咲き匂ひ蝶は舞ひ

小鳥は歌ふ樂しさよ 小北の山の靈場も

一度は冬の凧に 吹かれて法燈滅盡し

すでに危くなりけるが

松姫司が現はれて

朝な夕なに誠心を

籠めさせ給ひ神の道

仕へまつりし折柄に

蝶蜋別や魔我彦の

踏み荒したる聖域も

漸くここに返り咲き

やや賑はしくなりにける

此時松彦神司

五三公さまを始めとし

アク、タク、テクや萬公司

引連れ來り三五の

教の道に立直し

世に恐ろしき兇黨界

醜の魔神を追ひ出し

誠一つの三五の

正しき神を奉齋し

正しき清きいと赤き

誠心を捧げつつ

仕へまつりし甲斐ありて

今は漸く立春の

梅咲く季節も打過ぎて

百の花咲く彌生空

草青々と生茂る

常世の春となりけり

蕪大根黒蛇や

其外百の繪姿を

描えがきて四方よもの信徒まめひとに 配くばり與あたへし文助ぶんすけも

漸やうやくここに目めをさまし 嚴いづの御靈みたまと瑞御靈みづみたま

經たてと緯よことの經綸けいりんを 悟さとらせ給たまひ今迄いままでの

偏狹へんけふしん心を立直たてなほし 四邊あたりかがや輝あさひこく朝日子あさひこの

日ひの出神でのかみや木花このはな姫ひめの 神かみの教をしへを眞解しんかいし

義理ぎりてんじやう天上じしやうと自稱じしやうせる 日ひの出神でのかみの贖神にせがみを

放逐はうちくしたる雄々ををしさよ ウラナイ教けうの發起ほつきにん人

高姫たかひめ司つかさが現あらはれて 妖幻坊えうげんぼうの空助もくすけと

此處ここに本據ほんきよを構かまへつつ 一旗ひとはた擧あげむと企たくらみて

言葉ことば巧たくみに司等つかさらを 言向ことむけせむとする時ときに

皇大神すめおほかみの御光みひかりに 曲まがの心こころを照破せうはされ

アツと驚おどろく其途端そのとたん 斷岩だんがんじやう上つみらくより墜落つあらくし

二人ふたりは傷きずを負おひながら 魔法使まはふづかひの寶物たからもの

曲輪まがわの玉たまを文助ぶんすけの 内懷うちぶとこに捻ねぢ込んで

後白浪と逃げて行く

小さき欲に捉はれて

神に背きし初、徳の

二人は後を慕ひつつ

八百長芝居がききすぎて

尻を破られ血を出し

足の痛みを堪へつつ

テクテク後を追つて行く

後に残りし文助は

吾懐に残りたる

曲輪の玉を打眺め

ブンブン玉よと恐れつつ

小箱に固く封じ込み

守り居たりし折もあれ

初公、徳公歸り来て

曲輪の玉を奪はむと

文助さまを殴りつけ

倒れた隙を見すまして

スタスタ逃げ行く憎らしさ 文助さまは其日より

人事不省に陥りて

譯の分らぬ囁言を

喋り出せしぞ悲しけれ

かかる所へ三五の

夜の司イク、サール

日の出神の賜ひてし

夜光の玉の神力を

現はしまして文助を

まじつた 全^{まじつた}く生^いかし給^{たま}ひけり 文^{ぶん}助^{すけ}さまは靈^{れい}界^{かい}に

さまよ 彷徨^{さまよ}ひ給^{たま}ひ種^{いろ}々と 現^{げん}界^{かい}人^{じん}の夢^{ゆめ}にだも

さと 悟^{さと}り得^えざりし秘^ひ密^{みつ}をば 詳^う細^{まら}に委^つ曲^{ばら}に目^も撃^げし

われら 吾^{われら}等^が前^{まへ}に概^{がい}略^{りやく}を 傳^{つた}へ給^{たま}ひし尊^{たふと}さよ

か 斯^かく明^{あき}かに靈^{れい}界^{かい}の 様^{やう}子^すを悟^{さと}る上^{うへ}からは

なほわれわれ 尚^{なほ}吾^{われわれ}々^は心^{こころ}をば 洗^{あら}ひ清^{きよ}めて日^{にち}々^{にち}の

おこな その行^{おこな}ひを改^か良^{りやう}し 神^{かみ}の心^{こころ}にかなふべく

つか 仕^{つか}へまつらであるべきや 思^{おも}へば思^{おも}へば人^{ひと}の世^よは

げ 實^げに淺^あ間^{さま}しきものなれど 必^{かなら}ず死^し後^ごの生^{しやう}涯^{がい}は

さか 榮^{さか}えに満^みてるパ^パラ^ラダ^{イス} 圓^{えん}満^{まん}具^ぐ足^{そく}の天^{てん}國^{こく}に

すく 救^{すく}ひ上^あげられ永^{えい}遠^{えん}の 清^{きよ}き正^{ただ}しき生^{しやう}涯^{がい}を

おく 送^{おく}られ得^うべきものぞかし 神^{かみ}を敬^{うや}まひ且^かつ愛^{あい}し

かみ 神^{かみ}の心^{こころ}に逆^{さか}らはず 世^よ人^{びと}の爲^ために善^{ぜん}業^{げふ}を

つと 勤^{つと}め勵^{はげ}みて神^{しん}界^{かい}の 人^{ひと}を此^{この}世^よに下^{くだ}したる

其目的に叶ふべく

仕へまつれよ百の人

吾等と共に大前に

誓ひを立てて懇ろに

身の幸ひを祈るべし

ああ惟神々々

恩頼を賜へかし

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

地異天變は起るとも

神の此世にます限り

誠一つを通しなば

必ず救ひ給ふべし

吾等は神の子神の宮

世の萬物に勝れたる

奇き尊きものなれば

神の順序を克く守り

愛と信との全徳に

浸りて此世の花となり

光ともなり鹽となり

穢れを洗ひ魔を拂ひ

天地の花と謳はれて

人の人たる本分を

盡すも嬉し神國に

生ひ立ち出でし吾々は

實にも至幸のものぞかし

仰ぎ敬へ神の子よ

勇み行へ善の道

ああ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよみたまさち』

此この外ほか神かみの司つかさ等たち竝ならびに信まめ徒ひとの祝しゆ歌くは數かず限かぎりなくあれども此こ處こには省しやう略りやくする。切きて文ぶん助すけは數あまた多ひとのびと人ひと々びとに杯さかづきをさされ、折せつ角かくの志こころを受うけぬ譯わけにも行ゆかぬので少すこしく頭あたまの痛いたむ身みに、元くわん來らい下げ戸この事こととて忽たちちま酩めい酊ていし階かい段だんを踏ふみ外はづして地ち上じやうに顛てん落らくし、又またもや人じん事じ不ふ省せいに陷おちつた。ここに松まつ姫ひめ外ほか一いち同どうは忽たちちま祝いは酒ひざけの醉よひも醒さめ、河か鹿か川がに禊みそぎして文ぶん助すけの病びやう氣き平へい癒ゆを祈いのる事こととなつた。數あまた多やくのあん役しん員じや信ねつ者しんの熱ねつ心しんなる祈きぐ願わんの聲こゑは九きう天てんに響ひびき山さん嶽がくも揺ゆるぐばかりに思おもはれた。

(大正一二・一・三〇 舊一一・一二・一四 北村隆光録)

第三篇

衡平無死かうへいむし

第一二章 盲縞（一三四八）

灰白の暮色に包まれた野も山も凡ては静かで淋しい。山と山とに挟まれた枯草のぼうぼうと生え茂る細い谷路を、杖を力にトボトボと爪先上がりに登り行く一人の盲者がある。これは小北山の受付にゐた文助の精霊であることはいふまでもない。文助は微酔ひ機嫌で鼻歌を唄ひながら、ボンヤリとした目の光を頼りに、どこを當ともなく歩いてゐたのである。傍の叢にガサガサと音がしたので、八テ何者が飛出すのかと立止まつて考へてゐた。疎い目からよくよくすかして見れば、労働服を着けた十七八歳の色の黒い青年であつた。

文助「コレお若い衆、どうやら日も暮れかかつたさうだが、お前さま一人こんな處で何をしてゐるのだい」

青年「俺は泥棒をやつてゐるのだ。此街道は目の悪い奴ばかりが通過する處だから、俺の様な甲斐性のない泥棒は、盲でない性と性に合はぬから、待つてゐたのだ」

「八八八八、私のやうなスカンピンの盲に相手になつた所で、何があるものか。」

それよりも巨萬の金を有て居る盲は世界に何程あるか知れぬぢやないか。總理大臣でも、博士でも、富豪でも、大寺の和尚でも皆盲だ。お前は黒い着物を着て居ると思へば、盲縞の被衣を着たりパッチをはいてるぢやないか、さうすると矢張りお前も盲だな」

「盲にも色々あつて、其盲が又盲を騙す力のある奴だから、俺たちの盲には手合はぬのぢや。お前も随分世界の人間を盲にして來た男だが、世間の盲に比べて見ると餘程「くみ」し易いとみたから、ここに待ち構へてゐたのだ。サ、持物一切を渡して貰はうかい」

「ハハハハ、盲滅法界な事を言ふ奴だなア。斯うみえても、此文助は心の眼が光つてゐるぞ。世間の盲は肉眼は開いて居つても心の眼は咫尺暗澹だが、此文助は貴様の腹の底まで鏡に照らした如く分つてゐるのだ。無理無體に虚勢を張つて恐喝しようとしても、お前の心は既に非常なる脅威を感じ、戦慄してゐるぢやないか、そんなことで盲を脅かさうなんて、チツと過分ぢやないか」

「何だか、お前に會うてから、俺も泥棒が厭になつた。何卒、何處へ行くのか知

らぬが連れて行って貰へまいかな」

「貴様の様な奴を道連れにしようものなら、チツとも安心するこたア出来やしな
い。送り狼と道連れのやうなものだ、何時スキがあつたら咬み殺すか分つたもの
ぢやない、マア御免蒙つとこうかい。ああ惟神靈幸倍坐世」

「オイ盲爺さま、お前は世間の人間を盲にして、毎日日日地獄界へ案内してゐた
癖に、俺一人の盲を捨てると云ふ事があるか」

「馬鹿を申せ、俺は皆人間の靈を高天原へ導いてゐたのだ。それだから此間も一
寸氣絶した時に天國を覗いて來たのだ。俺の導いた連中は皆高天原に安住してゐ
るのだぞ」

「お前、高天原へ行つた時に其弟子に、一人でも出會つたか、滅多に出會はせま
い、何奴も此奴も地獄へ墜ちてるのだからな。神の取次皆盲ばかり、その又盲が
暗雲で、世界の盲の手を引いて、インフェルノ（地獄界）の底へと連れまゐる…
…といふのはお前の事だよ」

「エ、そんなこたア聞く耳持たぬワイ。何なと勝手にほざいておけ、ゴマの蠅奴

が
」

「ヨーシ俺も天下の青年だ。青年重ねて来らず、一日再晨なり難しといふ事を知つてゐるか、俺は斯う労働服を着てゐるやうに見えても赤裸だぞ。それだから青年重ねて着足らずといふのだ。貴様の上着を一枚所望するから、キツパリと俺に渡せ、裸で道中はならぬからのう」

「丸で三途の川の脱衣婆のやうな事をぬかす奴だな。工工仕方がない、そんな一枚恵んでやる。どうせ此先で婆アに取られるのだから……」

「オイ爺、お前は今幽界旅行をしてゐるといふ事を知つてゐるのか」

「きまつた事だ。一度経験がある。何時の間にやら體がこんな所へ來てるのだから、夢でなければ幽界旅行だ。夢であらうが、幽界旅行であらうが、どちらもユーメ旅行だ。貴様は此處を現界と思つてるのか、オイ黒助」

「コリヤ黒助とは何だ。これでも中には赤い血が通つてるぞ」

「エー、邪魔臭い、羽織を一枚やつたら、エエカゲンに歸つたらどうだ。これから長旅をせにやならぬのに、貴様の様な奴がついてゐるとザマが悪いワ」

「ハハア、ヤツパリ貴様は偽善者だな。餓鬼蟲ケラまで助けるのが神の道だと、小北山で吐いて居つたが、とうと、正體を現はしよつたな。氣の毒ながら、何うしてもインフェルノ行きの代物だ、エツへへへへ、實は地獄界から貴様を迎へに來たのだぞ」

「へん、何を吐しよるのだ、そんな事に驚く俺かい。俺は前回に於て、正に天國に籍のある事をチャンとつきとめておいたのだ。そんな事を云つて強迫しても、ゴマの蠅の如き者の慣用手段に乗るやうなチャーチヤーチヤでないぞ。勿體なくも大國治立尊様の教を傳達するグレーテスト（最も偉大な）プロバガンティストだ。燕雀何ぞ大鵬の志を知らむや、そのけツ」

と杖を以て四邊の芝草をメツタ矢鱈にしばき倒しながら、トントンと登り行く。青年は後姿を見送つて、

「アハハハハ阿呆阿呆、イヒヒヒヒインフェルノ行きの文助爺、ウフフフフフろたへ者の盲爺、エへへへへエクスタシーを知らぬ盲爺、オホホホホお氣の毒さま、今度は地獄の定紋付だ。お前の背中を見い、オツホホホホ」

と大聲に笑ふ。文助は後振返つて其青年を見ると、赤ら顔に耳までさけた大きな口をあけ、舌を五寸ばかりはみ出して、厭らしい面して腮をしゃくつてゐる。文助は惟神靈幸倍坐世と幾回となく繰返しながら、山と山との谷道を一目散に進んで行く。

(大正一二・二・九 舊一一・一二・二四 松村眞澄録)

第一三章 黒長姫(一三四九)

天引峠の頂上に四五人の男車座となつて、青い火をチヨロチヨロ焚きながら、暖を取つてゐる。何れもパルチザンのやうな面構、髯をモシヤモシヤと生やし、何だか人の腕のやうな物を、火の中へくべては、横笛を吹くやうな調子で口に當ててしがんでゐる。此時文助の目は餘程内分的になつて、明かになつて來た。文助は……厭な奴が居やがる、此奴ア又一つ悶錯だワイ。併しながら一度死んだ者

が命を取られるやうなこともあるまい。工工惟神に任すより仕方がない……と決
心の臍を固め、幽かな聲で宣傳歌を歌ひながら近よつて行く。其中の一人は目ざ
とく文助を見て、

甲「オイ旅人、一寸待つて貰はうかい」

文助は悪胴をきめて、ワザと平氣を装ひ、

「待つて貰はうと言はいでも、一あたりさして貰ひたいのだ、大分寒うなつたか
らな。そしてお前等は泥棒商賣と見えるが、チツと儲かりますかな」

「ヤアもう不景氣風が八衢街道まで吹きまくつて来たものだから、一向此頃は駄
目だ。お前は俺から見れば随分偉い奴だ。ウマく善の假面を被つて、神様のお取
次と化け込み、鼻紙の端に松の木や黒蛇、蕪大根を描きよつて、苦勞なしに禮言
はして金をとる剛の者だから、一つ俺達にも教へて貰ひたいものだ。ここで泥棒
講習會を開かうかと云つて、最前から相談して居つたのだが、根つから適當な先
生がないので、實の所は當惑してゐる所だ。うまく法律にふれない様に、喜ばれ
て泥棒する方法を研究するのが、最も賢明な處世法だから、一つ小北山の先生、

吾々の教導者になつて下さるまいかなア[㊦]

「馬鹿なことを言ふな、俺は正當の理由に仍つて正當の報酬を頂いて居つたのだ。貴様等は泥棒根性があるから、世界一切の事が皆泥棒的に解釋が出来るのだ。ピユリタンとしてのプロパガンデイストの心事が泥棒先生に分るものかい。こんなことが教へて欲しければ、やがて現界に羽振を利かして居つた、大原さんがやつて来るだらう。そしたら十分に敬禮を表し、敬して近付けるのだ。現界に於ても、大多數盜を擁してゐた豪傑だからのう。俺は畑が違ふから、こればかりは御免だ、天國行の邪魔になると、一生の不利益だからのう」

「ヤツパリお前は利己主義だな。幽界へ來ても自愛と世間愛に執着してゐるから駄目だよ。そんなこと言はずに、男らしく祕密を教へて呉れたらどうだい」

「お前達はピユリタンの精神が分らないから泥棒に見えるのだが、人が喜んで獻つたものを戴くのは、つまり神様から下さる様なものだ。神の寶を間接拜受するのだから、盗人ではないよ。お前達は往來の人を掠めて無理往生に取らうとする小盗人だよ。一層のこと、今此處で改心をして俺のお供をしたら何うだい、キツ

と天國へつれて行つてやるがなア」

乙「オイ甲州、こんな屁古垂爺を相手にしても駄目だぞ。すべて泥棒團體といふものは、こんなヒヨロヒヨロなレストレントの力のないやうな者では、頭に戴いた所で、統一が出来ない、ヤツパリ大原さまのやうな、大悪盗でないと、コントロールの力がないからな」

文助「さうださうだ、畑が違ふのだから、私には駄目だ。元から屁こいたやうな男だから、平兵衛ともいひ文助ともいふのだから」

甲「何と四方のない盲だなア。それなら免除してやるから、キリキリと此の場を立つたがよからうぞ。併し此關所は天引峠の二度ビツクリといふのだから、一つビツクリ吃驚せなくちや通過は出来ない。ビツクリ箱の蓋があくぞよと、いつも現界で云うて居つただらう。その實現だから、これから一つ實行にかかるよつて、自由自在に吃驚するがよからう、煩悶苦惱驚愕の權利は、お前が惟神的に保有してるのだから、お手のものだ。イヒヒヒヒ」

「大和魂の生粹の水晶魂のビクとも致さぬ文助だ。幾らなりと吃驚さして御覽。」

如何なる悪魔も、恐怖も、醜事も、忽ち惟神の妙法に仍つて、所謂ザブリメーションに仍つて一掃する神力が備はつてあるエンゼル様だ。サア、吃驚さしたり吃驚さしたり」

「餘り向ふ意氣の強い盲滅法界の馬鹿者だから、話にならぬワイ。こつちが吃驚して了ふワイ。サア、キリキリ此處を通れ」

「貴様が通れと云はなくても、自由の権利で通るのだ。桃季物言はず自ら小徑をなすというて、チャンと道がついてるのだ。ヘンお構ひ御無用、お先へ失禮致します。此文助は斯う見えても、神様から、重大なるメッセージを受けてゐるのだから、汝等如き泥棒の容喙は許さないのだ。エツヘツへへ」

と細い目に皺をよせ、笑ひながらコツリコツリと杖を突いて峠を下つて行く。文助は四五町ばかり降つて行くと、其處に形ばかりの屋根があつて、石の六地藏が竝んでゐる。ツと立寄つて、傍の蟲の喰ひさがした足の半腐つた鞍掛に腰を打かけ、よくよく見れば古ぼけた柱に墨黒々と樂書がやつてある。見るともなしに目についたのは……盲の宣傳使文助がやがてここを通過するだらう、さうすれば一

つ談判がある。黒蛇の一族は此處へ集まれ……と記されてあつた。文助は之を見て獨言、

「ハハア、おれが朝から晩まで、龍人さまだと云つて、黒蛇を書いては信者に渡し、掛字や額に仕立てて祭らしてやつたお蔭で、結構な飲食を供へて貰ひ、黒蛇の奴、俺の行方を大に徳となし、歓迎會でも開きよる積だなア。そらさうだらう。誰一人お給仕をしてくれる者が無いのに、蟲の分際として大神さま格に祀つて貰ふのだから、喜ぶのも無理はないワイ。ああ人はヤツパリ禽獸に至る迄助けておかねばならぬものかいな。ああ惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世。三五教の松彦さまがやつて来てゴテゴテ言ふものだから、黒蛇の畫かきも中止してしまひ、松に日輪様ばかりを描いて居つたが、あれから引續いてやつてみたなら、まだまだ澤山に喜ばれただらうに……何程日輪様を描いた所で、日輪様が喜んで下さる筈もなし、ヤツパリ性に合うた龍神さまを描いてをつたがよかつたのだ。靈不相應なことをすると、却て何にもなりやしないワ」

斯かる所へ妙齡の美人が三人連れで忽焉と現はれて來た。

「モシ、貴方は文助さまぢやありませんか、私は黒長姫と申します、随分苦しめて下さいましたね。朝から晩迄、松の木にまき付いたなりで、身動きも出来ぬやうな目に遇はし、殺生なお方ですワ。サア是から御禮を申しませう」

「お前は黒龍神の精霊と見えるが、あれだけ立派に祀らして上げたのに、何が不足なのだ。畜生の分際として、神様として貰つて、喜ぶことを措いて、こんな處で不足を聞く耳は持ちませぬワイ」

「吾々は畜生道に墮ちたもの、靈相應ですから、さやうな神様の席へ上げられ祀られては、目が眩み、頭が痛み、苦しくてなりませぬ。それだから吾々の怨みが塊まつて、お前さまの目が見えなくなつたのだ。分に過ぎた待遇をせられては本當に迷惑だ。お前さまのお蔭で、私達の眷族が幾千人苦しんだか知れやしない。そしてお前さまは之を祀つておけば、悪事災難が逃れるとか云つて、神様の眞似をしたでないか。吾々の眷族を龍神さまなど大それた名をつけ、そして大變に神力のある神のやうに言ひふらし、世界の亡者に拜ませて、柝麵棒をふらさした張本人だ。神様の側に祀られて苦しくてたまらなかつたと、皆が云つてゐる」

「そんな不足を聞かうと思つて描いたのぢやない。一人でも世に墮ちた靈を世に上げてやらうと思つて善意を以てしたのだ。チツと其精神も買つて貰はなくちや困るぢやないか」

「よう仰有いますワイ。世に墮ちた者を世にあげる様な力が、人間の分際としてどこにありますか。それは皆神様の御権限にあるのだ。神様の神徳を横領せむとするお前さまは天の賊だよ。それだから、こんな天引峠の二度吃驚を通らなくちやならぬ様になつたのだ。エ工恨めしい。これから五體をグタグタに咬み碎いて恨を晴らすから、其積りでゐなさい。そしてお前の身體は黒蛇となり、私達の仲間に入り、奴となつて働くのだ。あのお前の描いた黒蛇には、スツカリお前の靈魂の一部が憑依してゐるから、自然の道理でお前の靈身は蛇となるのは當然だ。お前は口の先で、神様の爲世人の爲と云つてゐるが、私達の仲間の姿をかいて祀らすのは、所謂ゼルブスト・ツエツクを達せむとする野心に外ならなかつたのだ」

「馬鹿を云ふな。神の道に仕へる者が、どうしてそんな心になれるか、何れも神の大御心に倣つて、蟲ケラまで助けようと云ふ眞心からやつたのだ。何程大蛇の

お前だとして蛇推するにも程がある。チツとは善意に解して貰ひたいものだな」

「何と云つても、セルフ・プリサベーションの爲にしてゐたことは、瞭然たるものだ。お前は神を松魚節にする偽善者だ。なぜ自分は謙遜して、人に頼まれても断りを云はないのだ。嚴の御靈の筆先には、御神號や神姿は書く人がきまつてるぢやないか。きまつた方に書いて貰ふのなれば、所謂神様の靈がこもつてゐるから、蛇だつて解脱することが出来るが、權威なき者に描かれては益々苦しみを増し、罪を重ぬるのみだよ」

「それだと云つて、俺もヤツパリ天國の天人團體に籍をおいてる者だ。蛇なんぞを勿體ない、變性男子の御手で描いて貰ふといふことがあるか。俺の繪で満足すべきものだ、餘り増長するな」

「ホホホホ、どちらが増長してゐるのか、よく考へてみなさい。それだから盲聾と神様が仰有るのだ。今に口笛を吹いたが最後、お前に苦しめられた眷屬が此處へやつて来るから覺悟をなさい」

と云ふより早く、ピューピューと口笛をふいた。俄に四邊の草も木の片も木の葉

も眞黒けの蛇となり、一本の角を生やし、波の打ち寄する如く、文助の四邊を力一杯口をあけて襲撃して来た。文助は杖を打振り打振り、キヤアキヤアと斷末魔のやうな聲を出し、蛇の群を踏み越えて、命カラガラ西北さして逃げて行く。忽ち強烈なる山嵐となり、數多の蛇は中空高く舞ひ上り、空を眞黒に染めて、文助の走つて行く數百間の前まで飛散してゐる。文助は心も心ならず、神言を奏しながら、倒けつ轉びつ進み行く。

(大正一二・二・九 舊一一・一二・二四 松村眞澄録)

第一四章 天賊(一三五〇)

文助は悄然として黒蛇に天地四方を包まれながら、何事も神に任して驀地に進み行く。ピタリと玉子草の生えた沼に行當つた、何うしてもここを跋渉せなくては前進することは出来ぬ。黒蛇は此沼の畔まで追つかけて来たが、何うしたものは

か水中へは襲うて來なかつた。文助はヤツと蛇の難を遁れ一息したと思へば、此沼を渡らねばならぬ、どこ迄廣いか遠いか見當のつかぬシクシク原である。そして怪しの蟲が足にたかつて來て登りつき、尺取蟲の様な恰好で顔の方まで這うてくる其氣持の悪さ、消え入るばかりに思はれて來た。力限りに之を薙拂ひ、むしつては落し、漸く顔だけは中立地帯の安全を得て進んで行くと、澤山な人間の頭が水面に浮んでゐる。よくよく見れば、自分が今迄靈祭りをしてやつた知己や朋友の靈界に行つた者及びまだ現世に居る筈の人間の顔である。文助は此時は既に目が餘程明くなつてゐた。そして其聲の色によつて、現界で知己となつた信者は皆悟ることを得た。眞先に現はれた人間の頭は、小北山に永らく參詣し、ヘグレ神社の信者であつた久助といふ男である。

「オイ、お前は久助さまぢやないか、何しにこんな所に迷うてゐるのだい、結構な天津祝詞を奏上し靈祭までしてやつてあるのに、なぜこんな所にうるついでるのか」

「お前が神様の職權を横領して猪口才な靈祭をしてやらうの、天國へ上げてやら

うのと慢心を致したものでござから、天國へ行くべき俺の先祖までが、これ此通り、こんな所に墮されてゐるのだ。祝詞のお蔭で、地獄へまでは行かないが、地獄に等しいこんな沼の中で苦しんでゐるのは、皆貴様が神さま氣取になつて、神様がら貰うた俺たちの靈を左右致したからだ。ササ何うしてくれ、大先祖が地獄に墮ちてるから、靈祭をして高天原へ上げてやらうなどと吐きやがつて、こんな所へ押込めておいたぢやないか」

「ソリヤ貴様が悪いのだよ。おれが靈祭をした時にや、貴様靈媒に憑つて……お蔭で天國へ救はれた、地獄の苦を遁れました……と喜びよつたぢやないか、一旦天國へ上つて又惡を致し、こんな所へ落されたのだらう、そんな不足は聞きませぬぞや」

「今の宣傳使といふ奴は、皆自分が神様の氣取になり、神様の神徳を横領して、平然と構へてゐる天賊だから、そんな奴の言靈が何うして大神様の耳に達するか、皆兇黨界の惡靈が、貴様の聲を聞いて集まり來り、俺達の先祖の名を騙り、天國へ助けてくれたの何のと、嘘を言つてゐるのだ。靈を天國へ上げるものは大神様

よりないのだ、又大神様の聖靈に充された豫言者のみ、之をよくするのだ。其外の宣傳使の分際として、何うして結構な神様の分霊が左右されるか、不心得にも程があるぞ。俺の子孫は貴様等盲審神者に騙されて、自分の先祖は天國へ行つて居ると云つて喜んでゐるが、子孫の供物は皆兇黨界にしてやられ、可愛い子孫の側へも近づくことが出来ない様にしてしまつたのだ。お前に限らずすべての宣傳使は自我心が強く癡狂癡呆の輩だから、大それた神様の権利を代理するやうな考へでゐるのだから困つたものだ。地獄界の案内者といふのは、貴様等如き天賊的プロパガンデイストの仕業だ。サア是から俺たちの先祖や知己を迷はしてくれたいお禮だ、チツタ苦しうても辛抱せい。これから暫く此沼の中へ沈めてブルブルをさしてやらう。さうなとせなくちや、俺たちの蟲がいえないワ、のう熊八、テル、ヨク、七、ヨツ、賢太郎、權州、さうぢやないか。お富、お竹、お夏貴様もチツと來い、此奴の爲には被害者だ』

といふや否や、「ワーツ」と蜂の巣を破つたやうな聲を出して、水面に各首をつき出した。數百千のゴム球を水中に投げたやうに、圓い頭が四方八方から數限り

もなく浮上つて来た。

「今文助が言靈を奏上して助けてやろう。身の過ちは宣り直せと云ふことがある。知らず知らずの御無禮御氣障りだ。神様も神直日大直日に見直し聞直して下さるだらう。これから貴様たちも、俺が宣り直しをするから浮べるだらう、マアさう一時に喧しくいふない。惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世」

「コリヤ、久助は一同の代表者だが、そんな濁つた言靈は益々俺たちを苦しむるものだ。そして言靈を奏上して救うてやらうとは何だ。まだ貴様は我が折れぬのか、ここでお詫を致せばよし、まだ我をはるのなら、此方にも考へがあるぞ」

「俺は何と云つても、貴様達を悪に導かうとしてやつたことぢやない、どうぞよくしてやらうと思ふから、一生懸命に靈祭をしたり、貴様達の子孫に言ひ付けて鄭重なお給仕をさしてるのだ。そんな不足は聞きたくはないワイ」

「此奴ア何と云つても駄目だ。オーイ、皆の連中、餓鬼も人数だ、かかれ かね」

と下知するや、バサバサと水をもぐつて幾千萬とも限りなく大小無数の頭が浮き

上り、口から各眞黒のエグイともいがいとも知れぬ、煙草の脂を溶いたやうな水を吹き、四方八方より襲撃する。文助は一生懸命に、早く岸に泳ぎつきたいものだと、頭に躓き乍ら目も眩むばかりになつて、殆ど二時ばかりを無性矢鱈にシクシク原の膝を没する許りの沼を漸く向岸に着いた。

後振返り見れば、澤山の首は水際まで追つかけて来り、恨めしさうな顔をして眺めてゐる。久助の頭は眞先に進んで、目を怒らし、

「俺達は貴様の爲に、斯様な所へ押し込められてゐるが、素より案内者の貴様が悪かつた爲に苦しんでゐるのだ。決して元よりの悪人ぢやない、天國へ進むだけの資格は持つてゐるのだ。其證據は常から神様を信仰して來たのだ。今に瑞の御靈が現はれて、水の中から救つて下さるといふ御沙汰が今下つた所だから、最早お前を恨んだ所で仕方がない。綺麗薩張と大神様の徳に對して忘れてやるから、これから先、氣をつけたがよからうぞ。キツと自分の神力で祖先の靈や人の病氣が助かるなぞと思つたら當が違ふぞ。皆人をかやうな苦しい所へおとすばかりだから、別れに臨んで一言注意を與へておく。何れ八衢において會ふかも知れない、

それまでにチツと心を直しておくがよからう」

と言ふより早く、無数の頭は俄に白煙となつて、沼の二三間許り上に渦をまき、遂にはそれが紫色に變じ、月の如き玉となり、澤山の星の様なものが其周圍に集まり、次第々々に昇騰して南の天を指して昇つて行く。其中の最も大なる月の如き玉は久助の精靈であつた。其他の小さき星の如き光は、何れも神の道に在つて忠實なる信者なりし者が、宣傳使に誤られて、一時ここに苦悶を續けてゐたのである。文助は此態を見て、初めて悟り……

「ああ自分は實に慢心をして居つた、いかにも久助の言つた通だ。嚴の御靈、瑞の御靈の大神様、貴神の御神徳を、知らず知らずに慢心を致して自分の物と致して居りました。重々の罪惡をお許し下さいませ。御神諭にある天の賊とは全く吾々の事で亾いました。ああ惟神靈幸倍坐世」

と詫びながら、荒風たける萱野ヶ原を當途もなく進んで行く。後へ歸らうとすれども、何者か後より押すやうに思へて、一步も退くことは出来ぬ。只機械的に馬車馬的に、何者にか制縛されつつあるやうな心地で、心ならずも進み行くのであ

つた。ここには草原くさはらの中に可なかなり大きな平ひらたい石いしがあつて、ムクムクと其石そのいしが動うごいてゐる。ハテ訝いぶかしやと、文助ぶんすけは立止たちどまつて目めも放はなたず眺ながめてゐた。

(大正一二・二・九 舊一一・一二・二四 松村眞澄録)

第一五章 千引岩ちびきいは (一三五)

文助ぶんすけは重おもた相さうな石いしが、土鼠もぐらが持もつ様やうに、ムクムクと動うごくので、此奴こいつア不ふ思し議ぎと立止たちどり神言かみごとを奏上そうじやうしてゐると、一人ひとりは二十歳にじっさいくらゐ位むすめな娘むすめ、一人ひとりは十八歳じふはちさいくらゐ位をとこな男いが岩いはの下したから現あらはれて來きた。文助ぶんすけは何者なにものならむと身構みがまへしてゐると、男女だんぢよふたり二人ふたりは文助ぶんすけの側そばへ馴なれなれ々々なれなれしくよつて來きて、

「お父とうさま、能よう來きて下くださいました。私わたくしは年子としこでムこいます……私わたくしは平吉へいきちでムこいます」

「私わたしには、成程なるほどお年とし、平吉へいきちといふ二人ふたりの子こはあつた。併しかしながら其子そのこは、姉あねは三みつ

つの年に、弟は二つの年に死んだ筈だ。お前のやうな大きな子を持った筈はない、ソラ大方人違だらう」

年子「私は三つの年に現界を去つて、あなたの側を離れ、靈界へ出て来ました。

さうすると澤山な、お父さまに騙された人がやつて来て、彼奴は文助の娘だと睨みますので、居るにも居られず、行く所へも行けず、今日で十六年の間、此萱野ヶ原で暮して来ました。そして毎日ここに隠れて、姉弟が住居をして居ります。

靈界へ来てから、ここまで成人したのです」

成程、さう聞けばどこともなしに女房に似た所もあり、私の記憶に残つてゐるやうだ。そしてお前等二人は永い間此處ばかりに居つたのか」

平吉「ハイ、姉さまと二人が木の實を取つたり、芋を掘つたり、いろいろとして、今日迄暮して来ました。人に見つけられようものなら、すぐに、お前の親は俺をチヨ口まかして、こんな所へ落しよつたと云つて責めますから、それが苦しさに、永い間穴住居をして居ました」

と涙を瀧の如くに流し、其場で姉弟は泣き伏して了つた。文助は手を組み、涙を

流しながら思案にくれてみると、後から文助の背を叩いて、

「オイ文助」

といふ者がある。よくよく見れば、生前に見覺のある龍助であつた。文助は驚いて、

「イヤ、お前は龍助か、根つから年がよらぬぢやないか」

折角お前が生前に於ていろと結構な話をしてくれたが、併しながら其話は

スツカリ靈界へ来て見ると、間違ひだらけで、サツパリ方角が分らぬやうになり、

今日で十年の間、此原野に彷徨うてゐるのだ、これから先へ行くと、八衢の關所

があるが、そこから追ひかへされて、かやうな所で面白からぬ生活をやつてゐる

のだ。お前の爲にどれだけ苦しんでゐる者があるか分つたものでないワ」

「誰もかれも、會ふ人毎に不足を聞かされ、たまつたものぢやない。ヤツパリ私

の言ふ事は違つて居つたのかなア」

「お前はウライナイ教を俺に教へてくれた先生だが、あの教は皆兇黨界の神の言葉

だつた。それ故妙な所へ落される所だつたが、産土の神様の御かげによつて、靈

界の方へやつて貰うたのだ。併しながら生前に於て誠の神様に反き、兇黨界ばかりを拜んだ罪が酬うて来て、智慧は眩み、力はおち、かやうな所に修業を致して居るのだ。お前の娘、息子だつてヤツパリお前の脱線した教を聞いてゐたものだから、俺達と同じやうに、こんな荒野ヶ原に惨めな生活をしてゐるのだ。そして大勢の者にお前の子だからと云つて、憎まれてゐるのだ、俺はいつも二人が可愛相なので、大勢に隠れて、チヨコ　チヨコ喰物を持つて來たり、又淋しからうと思つて訪問してやるのだよ」

「あ、困つた事が出来たものだなア、今は改心して三五教に入つてゐるのだ。マ、其時は悪氣でしたのでないから、マ、許して貰はな仕方がない、どうぞ皆さまに會つてお詫をしたいものだ」

「三五教だつて、お前の慢心が強いから、肝腎の神様の教は傳はらず、ヤツパリお前の我ばかりで、人を導いて來たのだから、地獄道へ墮ちたのもあり、ここに迷うて居るのも澤山ある。なにほど尊い神の教でも、取次が間違つたならば、信者は迷はざるを得ないのだよ」

「何と難かしいものだなア。吾々宣傳使は一體何うしたらいいのだらうか、譯が分らぬやうになつて了つた」

「何でもない事だよ、何事も皆神様の御蔭、神様の御神徳に仍つて人が助かり、自分も生き働き、人の上に立つて教へる事が出来るのだ。自分の力は一つも之に加はるのでないといふ事が合點が行けば、それでお前は立派な宣傳使だ。餘り自分の力を頼つて慢心を致すと、助かるべき者も助からぬやうな事が出来るのだよ。是から先には澤山のお前に導かれた連中が苦しんでゐるから、其積りで行つたがよい。二人の娘、息子だつてお前の爲に可愛相なものだ。筆先に「子に毒をのます」と書いてあるのは此事だ。合點がいつたか」

と、どこともなしに龍助の言葉は莊重になつて來た。文助は思はず神の言葉のやうに思はれてハツと首を下げ、感謝の涙にくれてゐる。忽ちあたりがクワツと明るくなつたと思へば、龍助は大火團となつて中空に舞ひのぼり、東の方面指して歸つて行く。之は文助の産土の神であつた。

産土の神はお年、平吉の二人を憐れみ、神務の餘暇に此處へ現はれて、二人を

助け給ひつつあつたのである。文助は始めて産土の神の御仁慈を悟り、地にひれ伏して涕泣感謝を稍久しうした。

文助は二人に向い、

「お前たち二人は、子供でもあり、まだ罪も作つてゐないから、ウラナイ教の御神徳で天國へ行つて居る者だとのみ思つてゐたのに、斯様な所で苦勞してゐたとは氣がつかなくかつた。之も全く私の罪だ。どうぞ許してくれ、さぞさぞ苦勞をしたらであらうな」

お年「お父さま、あなたの吾々を思つて下さる御志は本當に有難うムいますが、何と云つても、誠の神様の道に反き、兇黨界の神に媚び諂ひ、日々罪を重ねてゐられるものですから、私たちの耳にも、現界の消息がチヨコチヨコ聞えて、其度毎に劍を呑むやうな心持でムいました。今日も亦文助の導きで兇黨界行があつたが、産土様のお蔭で靈界へ救はれたといふ噂を幾ら聞いたか分りませぬ。弟も餘り恥かしいと云つて外へ出ず、又外へ出て大勢の者に睨まれるのが辛さに狐のやうに、穴を掘つて、此岩の下に生活を續けて來ました。これだけ廣い野原で、

石いしとなければ印しるしがないので、産土様うぶすなさまのお蔭かげで、此石このいしを一つ運はこんで貰もらひ、これを目當めあてに暮くらしてゐます。石いしといふものは、さやります黄泉大神よもつおほかみと云いつて、これさへあれば敵てきは襲しふらい来らいませぬ。此岩このいはのお蔭かげで、姉弟きやうだいがやうやうとここまで成人せいじんしたのでごいます。お父とうさまも、一時いちじも早く御改心ごかいしんを遊あそばして、吾々われわれを天國てんごくへ行くやうにして下ください〆

「今いままでは、吾々われわれが祝詞のりとの力ちからに仍よつて天國てんごくへ救すくへるもの、又は導またけるものと思おもうてゐたが大變たいへんな間違まちがひだつた。これは神様かみさまの御力おちからに仍よつて救すくはれるのだつた、今迄いままでは自分じぶんの力ちからで人ひとを救すくうと思おもひ、又人またひとの病やまひを自分じぶんの力ちからで直なほすと思おもうたのが慢心まんしんだつたのだ。もう此上このうへは神様かみさまに何事なにごとも任まかして、御指圖おさしづを受うける外ほかはない。ああ惟かむながら神靈たま幸倍坐世ちはへませせ〆

と親子三人おやこさんにんは荒野あらのヶ原がはらに端坐たんざして、一生懸命いつしやうけんめいに祈願きぐわんを凝こらした。因ちなみに石いしといふものは、眞しんを現あらはすものである。そして、所在あらゆる虚偽きよぎと罪惡ざいあくと醜穢しうゑを裁斷さいだんする所ところの神力しんりきの備そなはつたものである。神典古事記しんでんこじきにも、黄泉平坂よもつひらさかの上うへに千引ちびの岩いはをおかれたのは、黄泉國よもつくにの曲まがを裁斷さいだんする爲ためであつた。人間にんげんの屋敷やしきの入口いりぐちに

大きな岩を立てて、門に代用するのも外來の惡魔を防ぐ爲である。又家屋の周圍に延石を引きまはすのも、千引の岩の古事にならひ惡魔の襲來を防ぐ爲である。築山を石を以て飾るのも神の眞を現はす爲であり、又惡魔の襲來を防ぐ爲である。そして所在植物を庭園に栽培するのは愛を表徴したのである。人間の庭園は愛善の徳と信眞の光を惟神的に現はした至聖所である。故に之を坪の内とも花園とも稱するのである。天國の諸團體の有様は、すべて美はしき石を配置し、所在植物を植ゑつけられた庭園に類似したものである。それから石は礦物であり玉留魂である。故に神様の御靈を齋るのは所謂靈國の眞相を現はすもので、月の大神の御神徳に相應するが故に、石の玉を以て御神體とするのである。これ故に靈國の神の御舎は皆石を以て造られ、天國は木を以て、其宮を造られてある。木は愛に相應し、太陽の熱に和合するが故である。大本の御神體が石であつたから、何でも無い神だと嘲笑してゐるそこらあたりの新聞記事などは、實に靈界の眞理に到達せざる癡狂癡呆であつて、新聞記者自らの不明を表白してゐるものである。

ああ惟神靈幸倍坐世。

第一六章 水車みづぐるま（一三五二）

文助ぶんすけは久ひさし振ぶりに會あうた二人ふたりの子供こどもを引連ひきつれて、八衢やちまたの關所せきしよに進すすまむとしたが、何どうしても二人ふたりの子供こどもは其時そのときに限かぎつて體からだが磐石ばんじやくの如ごとくなり、動うごく事ことが出來できなかつた。之これは産土うぶすなの神かみの取計とりはからひによつて、かくなつたのである。文助ぶんすけが一いち念悔悟ねんくわいごの上うへは大神おほかみより直接ちよくせつに産土神うぶすながみに傳つたへられ、それより各靈おのおのたまの安住所あんぢうしよに導みちびかる事ことになつてゐるが故ゆゑである。文助ぶんすけも吾子わがこの側そばに暫しばらくなりと居をりたかつた。されど何者なにものにか後うしろより押おさるる様やうにあつて、次第しだい々々しだいに遠とほざかり行ゆく。僅わずかに後あとふりかへつて茲ここに親子おやこさん三人にんは悲かなしき別わかれを告つげた。

文助ぶんすけは只ただ一人ひとり、トボトボ薄すすきの穂ほにも怖おそぢ恐おそれながら、西北せいほくをさして機き械かい的てきに進すすみ行ゆくと、ドンと行當ゆきあたつたのは水車すいしやこや小屋こやであつた。俄にはかに空腹くうふくを感じかんじたので、水車すいし

小屋に立寄つて食物を乞はむと門口に訪へば豈圖らむや、自分の生前に仕へて居た實父母が、粉まぶれになつて働いてゐた。文助は驚いてよくよく其顔をすかし見た。老夫婦も亦文助の顔を穴のあく程睨んでゐる。やや暫し互に首をかたげ沈黙の幕がおりた。此二人は冬助、おくみと云ふ文助の両親である。十年許り前に現界を去つてここに第二の新生涯に入り、水車小屋の主となつてゐたのである。

冬助「お前は倅の文助ぢやないか」

「はい、左様でムります。貴方はお父さま、お母さま、どうしてマア、こんな處で斯様な事をして居られますのか。チツとも合點が行きませぬ」

「ここはお前の目では何う見えるか知らぬが、大變な處だよ。お前の爲に吾々夫婦は天國の團體から下されて、賠償的勞働に従事してるのだよ」

「ここは水車小屋ではムりませぬか。ヤツパリ靈界に於ても現界同様に水車小屋があるのですかな」

おくみ「お前は若い時から随分私の強いヤンチャ男で神様の事は少しも耳に這入らず、其天罰で到頭目を病み、種々雑多と手を盡した揚句、しよう事なしに神様

の道（みち）を信仰（しんかう）する様（やう）になつたのだ。併（しか）しながら三（みつ）つ兒（こ）のくせは百迄（ひやくまで）と云（い）つて、持（も）つて生（うま）れた我情（がじやう）我慢（がまん）は容易（ようい）に直（なほ）らず、ウラナイ教（けう）や三五教（あななひけう）の取次（とりつき）をして受付（うけつけ）に頑張（ぐわんば）り、いろいろと脱線（だつせん）的（てき）教理（けうり）を傳（つた）へたものだから、お前（まへ）の爲（ため）に地獄（ぢごく）へ迷（まよ）うて來（く）るものは何程（いくら）あるか知（し）れぬ。そして不思議（ふしぎ）な事（こと）には、お前（まへ）の導（みちび）いた連中（れんぢゆう）は皆（みな）此道（このみち）を通（とほ）るのだ。お前（まへ）は澤山（たくさん）の人間（にんげん）を地獄（ぢごく）に導（みちび）いた科（とが）によつて、地獄（ぢごく）の苦（くる）しみを受け（う）ねばならぬ處（ところ）だ。それを親（おや）として如何（どう）して黙（だま）つて見（み）て居（ゐ）る事（こと）が出來（でき）ようか。親（おや）となり子（こ）と生（うま）れるのも皆（みな）深（ふか）い因縁（いんねん）があつての事（こと）だ。それ故（ゆゑ）自分（じぶん）は下層（かそう）天國（てんくにん）の天人（だんたい）の團體（だんたい）に加（く）へられ夫婦（ふうふ）が樂（たの）しい生活（せいくわつ）を送（おく）つて居（を）つたが、お前（まへ）が現界（げんかい）に於（おい）て神様（かみさま）のお道（みち）の邪魔（じやま）を致（いた）して居（を）るがために、大勢（おほぜい）の者（もの）が地獄（ぢごく）に墮（お）ち行（ゆ）き、子（こ）や孫（まご）に至（いた）るまで中（ちゆう）有（う）界（かい）に迷（まよ）うと云（い）ふ事（こと）を、エンゼルから聞（き）いたによつて、せめては子（こ）の罪（つみ）を輕（かろ）くしてやりた（い）、又（また）世間（せけん）の人間（にんげん）を一人（ひとり）でも助（たす）けて吾子孫（わがしそん）の罪（つみ）を輕（かろ）くしたいと思（おも）つて、神（かみ）様（さま）にお願（ねが）ひ致（いた）し、此（この）荒野（あらの）ヶ原（がはら）の中央（まんなか）に水車（すいし）小屋（やこ）を建（た）てて此（この）通（とほ）り艱難（かんなん）苦勞（くらう）をしてるのだ。ここを通（とほ）る旅人（たびびと）は大抵（たいてい）偽（にせ）宣傳（せんべん）使（し）の教（を）によつて迷（まよ）うて來（く）るものが多い（おほ）。自分（じぶん）の息子（むすこ）も其（その）一人（ひとり）だから、何卒（どうぞ）吾（われ）々（われ）夫婦（ふうふ）が犠牲（ぎせい）になつて、皆（みな）様の罪（つみ）を洗（あら）ひ清（きよ）め、天（てん）

國へ上らし度いと思ひ神様にお願ひすれば、澤山の亡者の罪穢れ垢等が吾等夫婦の體に堆高く集まり來り、どうしても落ちないので、夫婦が互に搗臼の中に體を沈め、地獄以上の苦みをして皆様のために靈を研いて居るのだ』
とばかりワツと泣き伏す。文助は父母の恩の何處迄も限りなきを感謝し、只兩手を合して泣きじやくりするのみであつた。

文助は水車小屋の中へ這つて見れば大きな二つの「つぼ」があつて、そこには縦柱の杵が二本互に臼を搗いてゐる。ここは兩親が替はる替はる臼の中へ這入つて此柱杵に體の垢を摺り落される修行場である。米や麥を搗く水車とは餘程趣が變つてゐる。併しながら、トントンと臼搗きする毎に何處ともなしに白い粉が立つて二人の體は灰を被つた様になつて居た。文助は兩親の手を曳き形ばかりの小さい居間に座を占め、兩親に向つて心の底から天津祝詞を奏上し、神に謝罪した。そして、

「自分が兩親に代り水車の苦業を致しますから、兩親や吾子を助けて頂きたい」と熱涙を流して祈願を凝らした。兩親は又一生懸命に、

「吾々は假令如何なる苦勞を致しましても、少しも厭ひませぬ。何卒吾子の文助や孫が天國に救はれます様に……」

と一心不亂に涙と共に祈つてゐる。そこへ宙空を照して此場に下り來る大火團があつた。火團は忽ち五色の色と變じ、其中より容色端麗なる美人が現はれた。之は初稚姫の聖靈である。親子はハツと頭を下げ、

「何れのエンゼルか存じませぬが、此穢るしい冬助の處へ御降臨下さいまして有難うムります。就いては如何なる御用でムりますか、承はり度うムります」

「妾は高天原の靈國よりの命によつて、只今此處に現はれたエンゼルでムります。冬助、おくみの兩人が世人を思ひ吾子孫を思ふ眞心が天に通じ、子孫の罪を許され愈もとの天國へ歸らるる事となりました。さア御夫婦殿、妾に跟いてお出でなさいませ、妾は三五教の初稚姫でムりますよ」

おくみ「何とも申し上げやうのない有難い事でムります。併しながら吾々夫婦は如何なる苦勞を致しましても少しも厭ひませぬ。何卒倅の文助を天國に救うて下されば、吾々が救はれたよりも何程有難いか知りませぬ。何卒其お取計らひを願

ひ度う存じます」

「其願は尤もなれども、神界の規則は動かす事は出来ませぬ。此文助殿はまだ現界に於て盡すべき仕事も残つて居りますれば、再び八衢の關所まで送り、それより現界に返さねばならぬ事となつてゐます。貴方等は先に行つて天國の生涯を送り、子孫の上り來るをお待ちなさるが宜しい」

冬助「然らば仰せに従ひ、冬助お供に仕へませう」

文助「有難うムります。何分兩親を宜しくお願ひします。私は兩親に倣ひ此水車小屋で修行をさして頂きませう」

「神の言葉に二言はムらぬ。貴方は八衢に向つてお進みなさい。冬助殿、おくみ殿、さア参りませう」

と云ふより早く紫の雲に包み、三個の火團となつて東南方をさして、宙空を掠めて立去り給うた。文助は此姿を見送つて兩手を合せ、感謝の涙にうたれてゐる。

(大正一二・二・九 舊一一・一二・二四 北村隆光録)

第一七章 飴屋（一三五三）

靈主體從とは、人間の内分が神に向つて開け、唯神を愛し、神を理解し、善徳を積み、眞の智慧を輝かし、信の眞徳に居り、外的の事物に些しも拘泥せざる状態を云ふのである。斯の如き人は所謂地上の天人にして、生きながら天國に籍を置いて居る者で、この精靈を稱して本守護神と云ふのである。至粹、至純、至美、至善、至愛、至眞の徳に居るものでなくては、此境遇に居る事は出来ぬ。

又體主靈從とは、人間はどうしても靈界と現界との中間に介在するものである以上は、一方に天國を開き一方に地獄を開いて居るものだ。故に人間はどうしても善惡混交美醜互に交はつて世の中の神業に奉仕せなくてはならない。併しこれは、普通一般の善にも非ず惡にも非ざる人間の事である。人間は肉體を基礎とし、又終極點とするが故に、外的方面より見て體主靈從と云ふのであるが、併しながら、之を主觀的に云へば靈的五分、體的五分、即ち、靈五體五たるべきものである。若し靈を軽んじ體を重んずるに至らば、茲に、體五靈五となるのである。同

じ體五分靈五分と雖も、其所主の愛が外的なると、内的なるとに依つて、靈五體五となり、又體五靈五となるのである。故に靈五體五の人間は、天國に向つて内分が開け、體五靈五の人間は、地獄に向つて其内分が開けて居るものである。一般に體主靈従と云へば、靈學の説明上惡となつて居るが、併し體主靈従とは、生ながら中有界に迷つて居る人間の境遇を云ふのである。人間は最善を盡し、唯一つの惡をなさなくても其心性情動の如何に依りて、或は善となり或は惡となるものである。故に人間は、どうしても靈五體五より下る事は出来ない。これを下れば忽ち地獄界に墮ちねばならぬのである。何程善を盡したと思つて居ても、其愛が神的なると自然的なるとに依つて、天國地獄が分るのであるから、體主靈従の人間が、現世に於て一つでも惡事をなしたならば、どうしても是は體五靈五所か體六靈四、體七靈三となりて、忽ち地獄道へ落ちねばならぬのである。信者の中には善惡不二とか、正邪一如とか云ふ聖言を楯に取つて、自分の勝手のよいやうに解釋して居る人もあるやうだが、是は神が善惡不二と云はるるのは中有界に迷へる人間に對して云はれるのであり、且神は善惡に拘はらず慈愛の心

をもつて臨ませらるる見地から仰せらるる言葉である。決して人間の云爲すべき言葉ではない。どうしても人間が肉體を保つて現世にある間は、絶對的の善を爲す事は出来ない。併しながら其内の生涯に於て天國に籍を置く事を得るならば、最早これを靈主體從の人と云ふ事が出来るのである。

中有界の八衢は善惡正邪の審判所であつて、今日の人間の大部分はこの中有界と地獄界に籍を置いて居るものである。されども人間が靈肉脱離の關門を越えて靈界に行つた時は、其外分の情態は時を経るに従つて除却さるるが故に、其内分のみ存在し、茲に靈的生涯を營む事となる。此時は肉體に附ける總ての惡は拂拭され、其純潔なる靈は天國の團體に、靈相應に和合し得るものである。併しながら餘り利己心の強い精靈は、死後に至るまで其執着を殘し、容易に驅除されないが故に、外分のみ開け、且又外分が時を追うて脱離すると共に其内底の惡は忽ち暴露され、妖怪變化の如き淺ましき面貌となつて地獄界に墮ち往くものである。文助は漸くにして八衢の關所に着いた。白、赤二人の守衛に比較的叮嚀に導かれ、門の傍の口八臺の上に腰打かけ、息を休めて居た。半町ばかり手前に當つて

騒さわがしい音おとが聞きえて來きた。

トントン トントン トントン トントン

チントン、チントン、チントン、チンチントン

夕日ゆふひが赤あかい横町よこぢやうに

飴屋あめやのお爺さんぢい 鉦かねならす

大おほきい子こども供ちひに小ちひさな子こども供

一いつせん錢だ出だしては飴あめお呉くれ

二にせん錢だ出だしては飴あめお呉くれ

お爺さんぢい 兩手りやうてが巧たくみに動うごく

金魚きんぎょが一ひとつ兔うさぎが一ひとつ

も一ひとつ目めには日ひがくくれた

飴屋あめやのお爺さんぢい 鉦かねならす

と子供が澤山に群がつて飴屋の後から跟いて来る。飴屋は妙な身振をしながら、

トントン トントン、チンチン トントン

チントン チントン、チンチン トントン

と囃し立て、八衢の關所の前にやつて来た。さうして其處に荷を下ろし、おもちやの喇叭を頻りに吹き立てて澤山の子供を集め出した。子供は四方八方から集まつて来て、お酒に酔つた赤い錢や、白粉をつけた白い銀貨を出して、先を争うて「飴呉れ飴呉れ」と押しかける。飴屋は指の先を巧に動かして、兔や、鶏、達磨などを瞬く間に捻つては拵へ、麥藁でふつと吹いて量を高くし、寄つて来る子供に金と引きかへに渡して居る。さうして子供の所望によつて又もや歌ひだした。

トントン トントン、チンチン トントン

チントン チントン、チンチン トントン

餡あめの中なかからお多たやん工こ、お多たやんが嫌いやなら金時きんときだ

金時きんとき嫌いやなら達磨だるまさま

兔うさぎでも餅もちつく、お猿さるでも

十五じふごのお月つきさんの餅もちつきに

よう似にた餡屋あめやのお爺ぢいさんよ

こりやこりや其處そこらの子供達こどもたち

餡あめが欲ほしけりや幾何いくらでもやらう

しかしお金かねと引きひかへぢや

地獄ぢごくの沙汰さたでも金次第かねしだい

お金かねが無なければ甘い汁うまじ

どうしてもかうしても吸すはりやせぬ

お母かんの乳ちちよりお砂糖さとより

もつと甘いあまのは此餡このあめぢや

あめが下したには他人たにんと云いふ事ことは

無いものぞやと三五教の

神様が云はしやつたけれど

何程「あめ」の下ぢやとて

金が無ければ他人ぢやぞ

金が敵の世の中だ

このお爺さんが今打つ鉦は

ミロク三會の明けの鐘

金の無い奴ア近寄るな

トンチントントン、チンチントントン

チントン、チントン、チンチントン

と一生懸命に子供を相手に暴儲けをやつて居る。

白、赤の守衛は通行人の身許調べに忙殺されて居る所へ、澤山の子供を集め、

鉦や太鼓で騒ぎ出したので大に面喰ひ、白の守衛は傍に寄つて、

「これこれお爺さん、場所を考へないか。こんな關所の前で、さうやかましく云つて呉れては、俺達の邪魔になるぢやないか。ちと氣を利かして、彼方の方へ行つてやつたらどうだ」

「構うて下さるな。私は行商と云つて道路を歩いて商ひをするものだ。これでも政府へ税金を納めて居るものだ。何處で商賣をしようと構うて下さるな。子供の澤山よつて居る所で、子供相手の商賣をやつて居るのだ。私の商賣の邪魔をするのなら、損害賠償で訴へませうか」

「現界でなればお前の勝手だらうが、此處は冥途の八衢の關所だから、お前もやがて調べてやる時が来るのだ。まア暫く彼方の方へ往つて居て呉れ」

「何と云つても此處は動かないのだ。へん冥途の八衢なんぞと馬鹿にしなさんな。最前から聲が枯れる程歌つて子供を集め、商賣繁昌の眞最中だ。お前の勝手がよければ此方の勝手が悪い、私の商賣が邪魔になるのなら、なぜ高い税金を取るのだ」

と呶鳴りつけ、尚トントンと、チンチンとと鉦を叩き歌を歌つて、

子供の機嫌を取つて居る。

赤の守衛は、餘り頑強の飴屋の態度にグツト目を剥き、

「これ飴屋、これ程事を分けて申すのに、其方は聞かぬのか」

「そんな日の丸のやうな赤い顔をして睨んだ所が、此亞米利加屋さまはビクとも致しませぬわいな、ヤンキイモンキイ云はずに、黙言つて引込んで居なさい。

トンチントン、チンチントン

飴の中からお多やんと金太さんが飛んで出たよ」

と又もや踊り狂ふ。赤は白の守衛に向ひ、

「困つたものですか、どうしませうかなア」

「暫くほつといてやりませうかい、譯の分らぬ爺をつかまへて叱つて見た所で何にもなりませんまい。やがて商賣が無くなつたら歸るでせうし、子供だつて有るだけの金をつかへば飴屋に用はありませぬからなア」

赤あか「デモ、かう喧やかましくは仕方しかたがないぢやありませんか、どうしてもこいつは追おつ拂ばらはにやりますまい。こりやこりや飴屋あめや、此處ここに居をる事は許ゆるさないから、どこかへ行いつて商賣あきなをして來くるがよからう、喧やかましくて事務じむの邪魔じやまになるからな」

「へん甘い事仰ことおつしや有ありますワイ。飴屋あめやの太鼓位たいこくらゐが何喧なにやかましいのだ。今日こんにちの世よの中なかは労働どうさうぎ争議さうぎとか普選ふせん問題もんだいとか、小作争議こさくさうぎだとか外交ぐわいかう問題もんだいだとか云いつて、あれだけ喧やかましう騒さわぎ立たてて居ゐるのに、其聲そのこゑが聞きえないのか。飴屋位あめやくらゐが喧やかましいとはちと聞きえないぢやないか。これ位くらゐの事ことが耳みみに障さはるやうで、どうして役人やくにんがつとまるか。役人やくにんの耳みみは何億なんおくと云いふ人民じんみんの號泣がうきふの聲こゑがちつとも聞きえないやうに塞ふさがつて居ゐるのだ。それでなくては今日こんにちの世よに處しよして、大人物だいじんぶつとは云いはれないぞ。假令たとへ木端こつぱ役員やくゐんと雖いへども勤つとまるものぢやない。庚申かうしんさまの眷族けんぞくになつて、見みざる、聞きかざる、言いはざるを守まもつて居ゐるのが一番賢いちばんかしこいやりかただ。喧やかましう云いふと何時いつまでも門番もんばんをさされて苦くるしんで居をらねばならぬぞ、ほんとに仕方しかたのない奴やつだ。

トンチントントン チントントン

チンチントン

八衢街道のまん中で

白と赤との守衛に出會うた

飴の味をば知らないと見えて

苦い顔して睨みよる

ほんに因果な生れつき

チンチントン チンチントン

と又もや喧しく離立て踊り狂ふ。赤は大に怒り、矢庭に飴屋の腕を後に廻し、手早く引つ括つて門内に姿を隠した。

文助は五里霧中に彷徨した心地で、今涉つて来た山路や沼、萱野ヶ原の事や、両親に會うた事など思ひ出し、夢か現か將た現界か幽界かと、頻りに首を捻つて居た。

(大正一二・二・九 舊一一・一二・二四 加藤明子録)

第四篇 怪妖蟠離

第一八章 臭風（一三五四）

浮木の森の火の見櫓の前の庭園に、悪狸に騙されて一夜を明したガリヤ、ケース、初、徳の四人は、瘡のおちた様な顔をして、四邊をキヨロキヨロ見廻しながら、互に面を見合せ苦笑してみた。そこへ何とも知れぬ美しい女が一人、何處からともなく現はれ来り、四人の前後左右を十を描いて足跡を印し、一歩々々尻から缺伸をしながら、臭い匂ひを遠慮なく放出し、どこともなく足早に姿を隠した。四人は鼻を撮んで、息も塞ぐばかりに苦んでゐた。サツと吹来る一陣の風に、四邊の臭氣はスツカリ拂拭された。

ガリヤ「あああ、エライ目に遇うた。狸にはつままれ、鼬のお化には屁を嗅がされ、本當に踏んだり蹴つたりな目に遇うた。オイ皆の連中、長居は恐れだ、一時

も早く此場を退却しようぢやないか」

ケース「何と云つても日の下開山の天下の力士だ。退却は断じてやらない。退却

の後にはキット追撃が伴ふものだ。宣教師の後には必ず大砲ありだ。俺達も一つ

宣教師となつた以上は、大砲でも放射して、黜のお化に應戦せなくちや、此儘豫

定の退却は出来ぬぢやないか。幸ひここに物見櫓がある。此櫓に陣取つて、大に

騙サレ組の氣焰を上げようぢやないか」

「さうだな、何とかせなくちや馬鹿らしくて此儘歸る譯にも行かない。マア一つ

上へ上つて悪魔を平定するか、或は屁輪快議でも開かうかな」

「何と云つても、吾々に因縁のある此物見櫓だ。百日以前は俺達がここで羽振を

利かして居つた所だから、誰に遠慮はいらぬ。又ランチ將軍様から拂下になつた

のでもなし、其儘においてあるのだから、特定の持主がある筈もない。サア上つ

たり上つたり」

と茲に四人は、ランチ、片彦が戀の伊達引をやつて、幽界旅行をしたと云ふ新し

い歴史の残つた最高の座敷に陣取つた。上つて見るとコトコトと押入のスミから

音がするので、ケースはコハゴ八戸を開けると、以前の屁こき女が小さくなつて
慄うてゐる。ケースは矢庭に胸倉をグツと取り、押入から引張り出して、

「コラあまつちよ、失敬千萬な、武士の前に屁を嗅がすといふ事があるか。何か
之には理由があらう、サ、一々白状致せ」

「ハイ、私はおならと申します。ここら界限切つての屁こき女で、それが爲に村
にもおいて貰へず、此物見櫓が空いてゐるのを幸ひ、村の衆に送られて、ここへ
放り込まれたのですよ。そして餘り物を食はすと、屁をたれるからと云つて、食
ふものも口にくれず、腹がへつてたまらないの。そこへ又オナラが止め度もな
く出るものですから、すいた腹が猶すいてたまりませぬ」

「ハハハハア、此奴アさうすると黽の生れ變りだな。オイおならとやら、貴様隨
分綺麗な面をしてゐるが、どこに缺點はないけれど、屁たれるだけが尻點とみえ
るのう。何とかして此病氣を直してやりたいものだ、否へーユさして見たいもの
だ。オイ初公、徳公、何かいい考へはあるまいかの。こんな奴が側に居ると、何
時屁をひられるか分つたものぢやない。本當に最前に懲りてるからなア」

初はつ「これが所謂いはゆる屁和へいわの女神めがみといふのだらうかい。屁へといふものは随分ずいぶん笑顔えがほのいいものだからなア」

ケース「コリヤおならとやら、お前まへはそれだけ屁へが出でるといふと、到底たうていくわんぜん完全をな夫をとを持つも譯わけには行くゆまいのう」

「ハイ、私わたしも一度いちどは嫁入よめいりを致いたしましたが、屁への爲ために失敗しくじつて歸かへつて來きたのですよ」
一同いっしょどうは、

「アハハハハハハ」
と倒こけて笑わらふ。

ケース「ヤア面白おもしろい、屁へをこいて離縁りえんされたとは初耳はつみみだ。オイおならさま、一寸ちよつと其顛末そのてんまつを聞きかして貰もらへまいかなア」

「へーへー、今更いまさら隠かくした所ところで仕方しかたがありません、随分ずいぶん名高なだかい話はなしですよ。へコキのおならと云いつたら、此界隈このかいわいに知しらぬ者ものはありません。私わたしのお父とうさまは文助ぶんすけ、お母かあさまはお久きうと云いひまして、私わたしがおならと申まをします。私わたしも今年ことしは十八じふはちになつたものだから、一寸ちよつと濫皮しふかはの剥むけた所ところから、屁へこき娘むすめでも、随分ずいぶん矢入やいれが澤山たくさんあつて困こまり

ましたのよ。何と云つても、女にスタリ者はありません。……さて、ピラトの村の平助さまの家へ嫁入ることにきまりました所、家のお母さまが今までは、自分の家だから、何程屁をひつても差支ないが、他家へ行つて花嫁が屁を【こく】と外聞が悪い。それが不縁の元になつちやならないから、辛抱して居れと仰有いました。それで私も正直に親の言葉を守り、平助さまの嫁になつても、屁の出ないやう屁の出ないやうと尻に詰をしてきばつて居りましたが、屁が逆流して缺伸となり、臭い臭い息が出ますのよ。それでもヤツパリ屁ではないと思つて、ゴミを濁して居りましたが、體はブウブウと膨れて来る、毎日日顔は青うなる、どうにもかうにもこらへ切れなくなつたので、一遍親の家へ歸つて、思ふ存分屁をひつて来ようと思ひ、お福といふ姑さまに、何卒一寸歸して下さいと願つた所、お福さまの仰有るには……コレおなら、お前は私の家へ来てから、私に親切に仕へて下さるなり、平助を大事にしてくれるさうだから、大變に喜んでゐるのに、家へ歸りたいといふのは、何が氣にいらぬのだ……と問はれましたので私も包み隠さず……實の所は、屁の出る病があつて、【こき】たくて【こき】たくて仕方が

ありませぬけれど、家のお母さまが、嫁にいつたら、決して屁は一つも【こい】
ちやならぬ。もしそんな事があつたら、一遍に不縁になるぞと仰有いましたから、
それでよう【こか】ずに辛抱して居りましたら、この通り膨れたのでムいます…
…と、コハゴ八申上げた所、姑のお福さまも開けた人で…ナア二おなら、そん
な心配はあるものか。お前の名からしておならぢやないか。屁といふものは笑ひ
の神さまだから、あいさに屁の一つも【こい】て貰はなくちや家庭が面白くない。
サアサア遠慮はいらぬ。鳴物入りで嫁を貰つたと思へば結構だ。サアサア【こい】
たり【こい】たり…と氣よう言うて下さりました。それを聞くと矢も楯もたま
らず、私の命令を下さぬ先に、屁の奴勝手に連發銃の様に、ポンポンと際限
なく放出し、屁風の勢で、とうとう姑婆さまを天井まで吹き上げて了ひ、姑さま
は天井裏にへバリついて両手を合せ…コレコレおなら、モウ澤山だ、一時も早
く屁口をとめてたも…と仰有つたので、俄に止めようと思つても止まらず、仕
方なしに平助さまの着物を尻につめて、ヤツトの事で屁口をとめました。そした
所が、俄に屁風がやんだので、吹上げられてゐたお婆さまが、風の抵抗力が取れ

たとみえ、パタツと鼠がおちたやうに、座敷の眞中にふん伸びて目をまかして了つた。それから又もや屁が切りに催して来た。エ工焼け糞だと、雪隠へ飛込み、尻ひんまくつて放射した所、出るワ出るワ、まるで火事の太鼓のやうな音がして来ましたよ。ホホホホ、餘りのことで、吾ながらケツが呆れて雪隠は踊る、音はポンポンとするので、近所合壁から火事だと思ひ、空平、田吾作、八助どんや、其他澤山の連中が寄つて来て、火元はどこぢやどこぢやと駆けまはる可笑しさ。仕方がないので、屁元はここだと尻を捲つて飛んで出ました。それつきり平助さまに愛想をつかさね、忽ち不縁となり、平和の家庭は破れて、親の家へつき戻された時の残念さ、御推量して下さりませ、アンアンアン　ホホホホ
と泣いたり、笑うたりやつてゐる。

ケース　「成程、随分豪ケツだな。俺も豪傑だと思つてゐたが、お前のケツは又格別だ、古今無雙のケツ物だ。俺ならそんな屁こきさまなら、喜んで妻君に貰ふのだけれどなア」

「お前さまは駄目ですよ。あの位な屁を嗅がされて、鼻が曲るのどうのと云つて

悔むやうなこつては、私の夫になる資格はありませぬよ。世の中には物好きがあつて、平助さまの家を屁で失敗つた私を貰はうと云ふ方があつて、同じ在所のベコ助さまの所へ貰はれて行きました。所がその姑婆さまがおキツというて、本當にキツくて、悋氣がひどくて、流石のおならもやり切れない。怪我の拍子に屁でもひらうものなら、スツたもんだと云つて苦しめるので、私も腹が立つてたまらず、飯を焚きよつた所へ、婆さまがやつて来て、しつこしつこ小言をいふものだから、正勝姑さまを叩く譯にも行かぬので、傍に居つた羊を婆さまに當てつけて、もえ杭でコン畜生と云つてくらはした所、羊の毛に火がつき、羊は驚いて藁小屋の中に飛び込み、其藁小屋に火がついて、とうとうベコ助さまの家が焼けてしまひ、又も放り出され、こんな所へ押込められて居るのだ。本當に困つたものですよ、へへへへ」

初「プツプツプツ」

ガリヤ「イヤもう、お前さまの經歷は、ガリヤもスツカリ承はりました。其處まで徹底すれば偉いものだ」

「ねえ貴方、さうでせう、貴方だつて、へーたれさまと云つて、毎日毎日プツプツと口からラツパを吹いてみたでせう。男は口から屁を吹き、女は尻からラツパを吹くのは當然ですわねえ」

徳「オイおならさま、お前の耳が動くぢやないか、チツと徳さまには可笑しいぞ」
「ホホホホ、耳が動くのが可笑しいのかいな。今耳から屁を殺して出してるから、耳たぶが屁風に揺れて動いとるのだよ」

「まるで化物みたやうな女だなア」

ガリヤ「徳公、化物は始めから定つてるぢやないか。此奴ア古黽の化けたのだ。マア兔も角、俺も狸に騙された腹いせに、此化黽を、騙されたやうな顔して、ガリヤが反對に騙してやつたのだよ……コリヤ黽、どうだ、間違ひはあらうまいかな」

「間違ありませぬよ、最後屁をひつて上げませうか。さうすりや、お前さま等の息がとまつて了ふがな、ホホホホ」

と云ひながら、ブスツと臭い奴をひつた。そこら一面黄色になつて、鼻ふさがり

息つまり、四人は、此奴はたまらぬと階段を下るうち、雪崩の如くなつて階下に顛落し、腕や向脛をうち、四人共ウンウンと唸つてゐる。春風はかむばしき花の香を送つて、あけつ放しの居間を通つて行く。

(大正一二・二・九 舊一一・一二・二四 松村眞澄録)

第十九章 屁口垂(へこたれ) (一三五五)

浮木の森の物見櫓の上から、おならと名告る妖怪の屁に吹き飛ばされて階段から轉げ落ち、頭や脛等をしたたか負傷したガリヤ、ケース、初、徳の四人はヤケ糞になり、互に川柳を口ずさみ、身體の痛みを笑ひに紛らさむと力めてゐた。ガリヤ「どうも俺達は神様に戒めを食つたと見えて、散々の目に遇つたぢやないか。實に閉口頓首だ。一つ川柳會でも催して笑はなくちや、やりきれぬぢやないか。凡て人間が他愛もなく笑ふ時は、凡ての苦痛の去る時だからな」

ケースたぬき 狸につままれ屁へに吹き飛ばされたのだから、屁へと云ふ題だいを出だして、一ひとつ駄だ句くらうぢやないか〃

ガリヤ、初はつ、徳とくの三人さんにんは手てを拍うつて賛成さんせいした。

ガリヤたぬき 狸たぬきには騙だまされおならには臭くさい屁へを嗅かがされ何處どこで男をとこが立たたう〃

ケースくさ 臭くさい屁へに屁へ古こ垂たれよつて四人よにん連れ物見櫓ものみやぐらで又またも閉口へいこう〃

初はつ 〃おならとは名なを聞きいてさへ臭くさい奴やつ〃

徳とく 〇 尻しりの毛けを臭くさい曲津まがつに引ひき抜ぬかれ
屁へつ放びり腰こしの態さまの悪わるさよ 〇

ケース 〇 グルグルと腹はらの中なかにて模様もやうなし。
おとなしう見みせて踵かかとで屁へを殺ころし 〇

初はつ 〇 屁へを放ひりに屋根やねから下おりる宮大工みやだいこく。
貴様等きさまらは何なにを笑わらふと隠居いんきよの屁へ 〇

徳とく 〇 屁への論ろんに泣なくも流石さすがは女をんななり。
屁へを放ひつて嫁よめは雪隠出せつちんでにくがり。

屁へを放ひつたより臭くさいのはおならなり㊦

ガリヤ㊦風呂ふうろ中の屁へは偶然ぐうぜんの輕氣球けいききゅう。

念佛ねんぶつも唱となへ屁へも放ひる炬燵こたつかな㊦

ケース㊦屁へを放ひつて裾すそあふぎたる團扇うちはかな。

俺おれよりも遙はるか上手じやうずな屁へ放ひり蟲むし㊦

初はつ長ながき日ひや沈香ちんかうも焚たかず屁へも放ひらず。

馬うまが屁へを放ひりながら行ゆく春野はるのかな。

賑にぎやかさ浮木うきぎの森もりに屁へが絶たえず㊦

徳とく 「屁へを放ひつた長太郎ちやうたらうさ探さがすお師匠ししやうさん。

大笑おほわらひ下女げぢよの寢言ねごとに屁へが交まじり。

幫間金たいこもちかねになる屁へを三みつつ放ひり」

ガリヤ 「姑しつとめが屁へを放ひつたので氣きがほどけ。

屁へを放ひつて可笑をかしくもない獨身者ひとりもの。

姑しつとめの屁へを喜よろこぶも家いえ大切だいじ」

ケース 「女禮式ぢよれいしき蟲むしも殺ころさず屁へを殺ころし。

屁へを殺ころし四邊あたりしご四五人ごにんかかり合あひ」

初はつ 己おのが屁へをオヤオヤオヤと子こにかづけ。
外そとで屁へを放ひる雪隠せつちんの居ゐ催促さいそく」

徳とく 風ふう呂ろの屁へで發明はつめいしたか水雷火すゐらいくわ。

紙張かみはりの放屁風船はうひふうせんに入いる空氣くうきかな。

屁へを放ひつてもう十二時じふにじとシヤレて居ゐる。

屁への様な理窟りくつに俺おれも鼻抓はなつまみ」

ガリヤ 炬燵こたつから猫ねこも呆あきれて飛とんで出でる。

蠟燭らふそくの火ひを屁へで消けした自慢じまん振り。

よい機嫌きげん便所べんじよで謠うたひ屁へを放ひりつ。

花嫁はなよめの屁へは自動車じどうしゃに辨護べんごされ。

屁への種たね子こも最も早はや之これにてきれにけり』

『アハハハハ』

と一同いちどうは苦痛くつうを忘わすれて笑わらひ興きようじた。それより題だいなしの川柳せんりうにかかり、口々くちぐちに思おもひ思おもひの事ことを喋しゃべり出だし笑わらひに紛まぎらした。

ガリヤ 鐵道てつどうの議事ぎじ速すみかに進しん行かうし。

手てにあまる子こは兩親ふたおやの脛すねかじり。

身代しんだいが瘦やせて壁かべまで骨ほねを出だし。

轉ころぶ筈はず銀杏いてふがへ返かへしに結ゆうた髪かみ』

ケース 忍しのぶ仲竹なかたけ藪やぶだけが知しつて居をり。

辻堂つじだうの地藏ぢざうは横目よこめで涎よだれくり。

脱線だつせんの一いち座ざに下げ戸こは折をりを下さげ。
貴方あなただと屁へを譲ゆづり合あふ睦むつまじさ。
瘦やせた蚊かは戸と棚たなの隅すみに愚ぐ癡ちを云いひ。
夕ゆふ立たちや座ざ敷しきの中なかの大おほ盥だらひ。
藝げいなしは末まつ座ざで茶ちや碗わん叩たたくなりなり。

初はつ「馴なれ初そめを話はなせば女によう房ぼう目めで叱しかり。
暢のん氣き者もの缺あく伸びに節ふしをつけてゐる。
酒さけ機き嫌げん等などとごまかす翌あくる朝あさ」

徳とく「高たか島しま田た又また蚊かを蚊か帳やの中なかへ入いれ。
一いっ方ぱうの足あしが長ながいと跛びつ足こ云いひ。

小説は謀反人かと下女が由井

ガリヤ 晝花火物干竿が追驅ける。
脱線の汽車が寝轉ぶ春の土手

初戸棚から猫が眞面目な顔を出し。
戸棚から臭いおならが顔を出し

徳 其の藝に惚れたと息子負惜み

ガリヤ ㊦ アカンベエをさせて眼めい醫者しやは金かね貰もらひ ㊦

ケース ㊦ 釣竿つりざをや暢のん氣きな顔かほで話はなし合あひ。

洋服やうふくで職工しよく下げ駄たを穿はいて來くる。

藝者げいしや論ろん浮世うきよの馬鹿ばかが喧譁けんくわ腰こし ㊦

ガリヤ ㊦ 家柄いへがらと目方めかたにかけ持ぢ參金さんきん。

新聞しんぶんで見たみ事ことにする遠とほい火事くわじ ㊦

ケース ㊦ 強情がうじやうを線香せんかうと灸きうがおつかける。

死顔しがほへ碁石ごいし握にぎつてかけつける ㊦

初はつ 食卓しょくたくで又またもめて居ゐる子澤山こたくさん。

お話中はなしちゆう受話器じゆわきをヤケにひきかける。

缺伸あくびから缺伸あくびへ移うつる夜の長ながさ。

似にた顔かほへキマリの悪わるい挨拶あいさつし

徳とく 牛肉屋ぎうにくや下駄げたを竝ならべて客きやくを引ひき。

三味太鼓しやみたいこ故ゆゑに浮世うきよは捨すてられぬ

ガリヤ 失敗しつぱいが蟲むしを殺ころして持参金ぢさんきん。

物干ものほしと屋根やねと話はなすは遠とほい火事くわじ

ケース「強情を直すに乳母の智慧を借り。」

食ひ足らぬ團子に子供串をなめ。

食卓が机に代る二階借」

初「立聞の話がすむと咳拂ひ。」

夜長さや盗人飯を食つて逃げ。

顔だけは見ぬいても寫真物云はず」

徳「茶柱にすねて居る程よい女。」

湯に行くと出た儘亭主歸り来ず。

炬燵から手を出してゐる年賀状。

初夢に追驅けられて汗をかき」

ガリヤの 蚤とが飛ぶ後あとから後あとへ指ゆびが飛とび。
乞食こじきにはデモクラシーでくれぬなり。
意氣地いなし屁へに散ちらされて顛落てんらくし」

ケース」 一笑ひとわらひさせて辨士べんしは暗やみに消きえ。

湯豆腐ゆどうふも粉々こなこなになつて酔よひつぶれ。

茶柱ちやばしらに無線電話むせんでんわの装置さうちあり」

初はつ 湯ゆの禮れいに背せ中なかを流ながす賑にぎやかさ。

諦あきらめの悪わるい男をとこの年賀状ねんがじやう
」

徳とく 〇 勝手かつてから八百屋やほやが汗あせの首くびを出だし。
蚤のみがで出でて話はなしも他所よそへ飛とんで了しまひ。
終しまひ風呂ぶろデモクラシー風邪かぜを引ひき

初はつ 〇 地團駄ぢだんだを他人たにんにふます意氣地いくだぢなし。
悲劇物ひげきもの泣なく程ほど辨士べんし褒ほめられる

徳とく 〇 湯豆腐ゆどうふの皿さらへ盲めくらの箸はしが外それ。

居催促ゐざいそくどつちも飽あきたやうな顔かほ。

四股踏しこふんで嬢かかあが塵紙ちりがみ儉約けんやくし。

前垂まへたれが塵紙ちりがみさんの代理だいいりをし。

居催促ゐざいそく煙管きせるをむごい目めに遇あはし

斯く開放題の句を捻り出し笑ひ興じてゐる。そこへドシン ドシンと大きな足音をさせてやつて来たのは曲輪城の城主高宮彦であつた。高宮彦は四人の姿を見て、口をモチモチさせながら無言の儘睨みつけてゐた。四人はあまり巨大な男の姿に稍驚きを感じ、内心私かに打慄うてゐる。

(大正一二・二・九 舊一一・一二・二四 北村隆光録)

第二〇章 險學(一三五六)

四人は妖幻坊の變化なる高宮彦の巨大な姿に内心打驚きながら、心に深く神を念じ、吾身に危害の加へらるる事あらば、速に助け給へと祈つてゐた。妖幻坊はカラカラと打笑ひ、

其方はハルナの都の大黒主が部下、ランチ、片彦將軍の側近く仕へて居つたガリヤ、ケースであらうがな。そして二人は初公、徳公の兩人、随分貴様も惡事に

かけては抜目のない代物だ。今は殊勝らしく三五の教に歸順してゐるが、一つ風が吹けば、又もや惡道へ逆轉致す代物だらう。ても扨ても意氣地のないへゲタレ男だなあ、アハハハハ」

と嘲弄されてガリヤは躍起となり、兩手の拳を握り、齒ぎしりをしながら、

「拙者は如何にもバラモン軍に仕へて居つたガリヤである。併しながら決して變心致す様な意氣地なしではムらぬぞ。誠の道を悟つた上は、將軍よりも城主よりも尊いのは宣傳使だ。堂々たる大黒主が三軍を叱咤し、生殺與奪の權を握つて世界を睥睨し、ハルナの都に金殿玉樓を構へ、城寨を築いて、堅牢無比の鐵壁と構へてゐるなれども、拙者は左様なものが何になるか。天に聳ゆる天主閣や隅櫓、まつた、大理石を以て疊み上げられた王宮、左様なものは今にメチヤメチヤになつて了ふであらう。そして其跡は滿目荒涼たる雜草の野邊と變じ、八重葎の軒に茂るに任すのみ、果敢なき運命に陥るは目のあたりだ。其如く此高宮城も、やがては凋落の運命に陥るであらう。高宮彦が何だ。曲輪城の城主が何偉い。愛善の徳と信眞の光によつて、永久不滅の生命力を有する信仰其ものより外には、世

の中なかに決けつして尊たふときものはない筈はずだ。世よの中なかの利巧りかうな愚物ぐぶつや俗漢ぞくかんが、畢生ひつせいの事業じげふとか、政權せいけんとか、利益りえきとか、株式かぶしきだとか云いつてゐるやうな、十年じふねんもたたずに亡ほろびて了しまふやうなものが何なんになるか。吾々われわれは此眞理このしんりを悟さとつたが故ゆゑに、バラモンの軍籍ぐんせきをすてて、永久不滅えいきうふめつの生命せいめいに入るべく信仰しんかうの道みちを辿たどつたのだ。何なんだ高宮彦たかみやひこ、吾々われわれもバラモン軍ぐんの營所えいしよを何時いつの間まにか修繕致しうぜんいたし、黙だまつて占領致せんりやういたすとは不都合ふつがふぢやないか。サア、誰たれにこたへて、斯様かやつな立派りつぱな城廓じやうくわくを造つくつたのだ。返答聞へんたふかして貰もらはうかい」

と何時いつの間まにやら恐怖心きようふしんは何處どこへか行いつて、腕うでを打うち振り、勇氣百倍ゆうきひやくばいして無性矢むしやうやた鱈らに喋しゃべり出した。妖幻坊えうげんぼうは大口おほぐちをあけて高笑たかわらひ、
「アツハハハハ、叩たたくな叩たたくな、へらず口くちを叩たたいてそれが何なんになる。末すゑの百ひやくより今いまの五十ごじふ、人間にんげんは太ふとく短みじかく暮くらせば可いいのだ。コリヤ其方共そのはうども、吾城内わがじやうないに來きたつて其莊そのさう嚴ごんに打うたれ、且物質かつぶつ的方面しつてきほうめんの如何いかに莊嚴優美さうごんいうびにして且華美かつくわびなるかを、チツとは研けん究きうしたがよからうぞ。何事なにことも見學けんがくの爲ためだ。どうだ、城主じやうしゆが直接ちやくせつに許ゆるすといふのだから大丈夫だいぢやうぶだらう」

ガリヤ「ヤア、高宮彦とやら、僅か三四ヶ月の間に、斯様な立派な普請をなさるとは、ガリヤに取つては不審千萬、合點が參らぬでムる。そして此浮木の森は妖怪變化出沒し、行人を苦しむるや實に名状す可らざる魔窟である。斯様な處に城廓を構へるやうな奴は、只の狸ぢやあるまい、氣の利いた化物はすつ込む時分だ、サ、どいたりどいたり」

「アハハハハ、お疑は御尤も千萬、拙者は決して怪しき者ではムらぬ。元は拙者も三五教の宣傳使なりしが、思ふ仔細あつて、齋苑の館を脱退し、吾名を高宮彦と改めて、ここに君臨致したものだ。其方も三五の道に歸順した以上は、一度こへ參拜致さねばなるまい。實の所は、某は初稚姫の父親なる時置師の空助だ。どうぞや、一度休息して行く氣はないか」

「どうも合點の行かぬ事になつて來た。ああ併しながら此浮木の森は吾々が稍暫し住みなれて、地理もよく知り居れば、有爲天變の世の有様を目撃するも亦一興、然らば御免を蒙つて拜見さして頂かうかな。各方如何でムるかな」

とガリヤは三人に問ひかけた。三人は無言のまま首を下げ、贊成の意を表した。

「然らば高宮彦殿、ガリヤ以下一同、御世話になりませう」

と口ではキツパリ言ひ放つたものの、心の中で思ふやう、此奴アどうしても妖怪の親玉に相違ない。此方の方から甘く騙されたやうな風を装ひ、スツカリ様子を考へた上、三五教の神力に歸順させるか、但は根底から打ち亡ぼしてやるか二つに一つの思案だ。これも何かの神様のお仕組だらう……と心にうなづきながら、さあらぬ體にて妖幻坊の言葉に従ふ事となつた。妖幻坊は俄に顔色を和らげ、言葉も叮嚀に、

「イヤ各方、それでこそ三五のピュリタンでムる。拙者の娘初稚姫も奥に控へ居れば、一度は會つてやつて下さい。親の口から褒めるぢやないが、實に天稟の美貌だ。こんな武骨な男に、なぜあんな娘が出来たかと思へば實に不思議だ。之も要するに天の配劑でせう、アハハハハ」

「何と仰有います、有名な初稚姫様がお出になつて居りますか。ソリヤ一度ガリヤも是非お目にかかりたいものでムいます」

ケースは、

「まだ獨身どくしんでゐられますかな」

「ハイ、獨身者どくしんしやでムいますよ。どうか適當てきたうな夫をつとがあれば、持もたせたきものと、親おやぢ心こころで朝あさな夕ゆふなに祈いのつて居をりました。どうやらここに初はつ稚わか姫ひめの夫をつととして恥はづかしからぬ御方おかたが、たつた一人交ひとりまじつてムるやうだ。イヤ是これも天てんの時じせつ節せつが來きたのでムらう、アハハハハ」

ガリヤは何なに、此この妖怪ばけもの奴め、其手そのては喰くはぬぞ……と腹はらの中なかできめてみたが、ケース他ほか二人ふたりはスツカリ降ま参あつて了しまひ、そして此この中なかに初はつ稚わか姫ひめの婿むことなるべき者ものがあると云いつたのは誰たれであらうか、ヒヨツトしたら俺おれであるまいかなどと、互たがひにニコニコしながら跟ついて行く。

ケース「エーもし城主じやうしゆさま様さま、初はつ稚わか姫ひめ様さまの夫をつとになるやうな男をとこは、ケースの眼めからは、生憎あいにく此處ここには居をらないぢやありませんか。何いづれもへボクチャ男をとこばかりですからな。此中このなかに一人ひとりは、それでも可か成なり及きふ第だいする奴やつがあるかも知しれませぬな」

「どうか其方そのかたを養子やうしとなし、ここの城主じやうしゆになつて貰もらひたいものだ」
「成程なるほど、實じつに立派りつぱなお屋敷やしきでムいますな。私わたしが將軍しやうぐんの副官ふくぐわんをして居をつた時にや、

半永久的の建物で、見る影もなき粗末至極な陣營でしたが、貴方の御神力は偉いものです。少時の間に斯様な事にならうとは、此ケース、實に夢にも思ひませぬでした。實に立派なものでムいますワ。私此様な親が持たいたいものでムいます、オホホホホ」

「サ、私のやうな男にでも、子になつてくれる人がありませんか。初稚姫が見たら、さぞ此四人の中の一人に目をつけて喜ぶ事でせうよ」

「そして貴方のお目に止まつた男といふのは誰でムいますか。ガ印ですか、但は八かトかケか、どちらでムいませうな」

「ケのつくお方でせう」

ガリヤは、

「ハハハハ、ケのつく、獸先生にはよい対象だ、ハハハハ、ヤツパリ靈相應かなと呟いた。されど妖幻坊も他の連中も、一生懸命に話に實が入つて、ガリヤの囁きに氣が付かなんだ。」

漸くにして菫、蒲公英、紫雲英などの美しく咲きみちた城内の廣庭をよぎりな

がら、金色燦爛たる隔ての門を幾つともなく潜つて玄關口についた。ここには七寶をもつて飾られたる卓子や椅子が竝べられ、大きな瓶に芳香馥郁として咲きみちたる白梅の花が活けられてあつた。妖幻坊の高宮彦は先に立つて、玄關を上り行く。八人の美しい美女は満面に笑を湛へて、四人の手を一本づつ取り、各居間へ導いて行く。

(大正一二・二・九 舊一一・一二・二四 松村眞澄録)

第二章 狸妻(一三五七)

ガリヤ、ケース、初、徳の四人は、八人の美女に導かれ、美はしき廣き奥の一間に請ぜられた。ケースは何となく、女の美はしさと殿内の莊嚴さに打たれて呆氣に取られてゐる。ガリヤは始終注意の眼を放つて、四邊の不可解な光景を凝視してゐた。初、徳兩人は曲輪城の城主高宮彦及び高宮姫の此場に現はれたのを見

て、餘程容貌は變つて居れども、どこともなく、高宮姫は小北山で見た高姫に似てゐるので、しきりに首を傾けてゐた。高宮姫は初、徳を見て打笑ひ、

「ホホホホ、初さま、徳さま、これには恐れ入りましただらう。高宮彦といふのは空助さまだよ。そして高宮姫はかう若く見えてもヤツパリ高姫だよ。お前が取つて来てくれた曲輪の神力に依つて、斯の如き莊嚴美麗なる城廓が瞬く間に出来上がり、又妾の容貌が元の十八に返り、斯の如き容色端麗なる美人となつたのも曲輪の神力だよ。お前はよいことをしてくれましたねえ」

初「貴女等は私たちに骨を折らせておきながら、怪志の森からドロロンと消えて了ひ、足の立たない兩人を置去りにした上、石をぶつかけて逃げるとは、チツとひどいですな。初は恨んで居ましたよ」

「ホホホホ、お前の度胸を試してみたのだよ。サ、之からお前は此城の大番頭だ。忠實に御用をしなさい。初は左守、徳は右守だ、ねえ高宮彦さま、それでよいでせう」

妖幻「何事も女王の御意見に任しませう。女帝崇拜の現代だから、仕方がないワ

イ、アハハハハ」

初「思ひ掛なき拔擢に預かりまして、まるで初公は狸につままれたやうな氣分が致します」

「コレ初公、否初司、狸につままれたやうだとは、何といふ不謹慎なことを仰有る。ここは地の高天原でムるぞや。決して曲津などは近寄る事は出来ませぬ。今後は心得なされ」

徳「私は異數の拔擢に與りまして、右守と任せられ、身にあまる光榮でムります。これと申すも、全く吾々が命がけの大活動を致し、曲輪の玉を取返して來た其酬いでムいますれば、徳が右守となつたとて、餘り出世のし過ぎでもムいませぬ。

當然の所得として謹んでお受けを致します」

妖幻「アハハハハ、喜んで居るのか不足を云つてるのか、チツとも譯が分らぬぢやないか。怪體な挨拶だなア」

「何分狸と相撲とり、鼬に屁はかがされ、精神に異状を來したと見えまして、申し上ぐる事が前後矛盾、自家撞着の傾きがムいませう。何と云つても曲輪城で

すから、本氣で徳公もお受けは出来ませぬ、アハハハハ

高姫は柳眉を逆立て、

「コレ徳、お前は右守に任じて貰ひながら、左様な挨拶を致すのは、吾々を侮辱してるのぢやないかい。決してお前でなければ右守が勤まらぬといふのではない。それなら今から取消します。其代りとして、ケースに願ひませう」

ケース「ハイ、右守でも結構です。何なら左守も兼ねても宜しうムいます」

「兩方といふ譯には行きませぬ。ヤツパリ貴方は右守を勤めて下さい。就いては右守、左守とも夫婦相竝んで御用を致さねばならぬ。左守の妻には初稚姫、右守の妻には宮野姫ときまつて居りますれば、やがて盛大なる結婚式を取行ふことに致しませう」

初「エへへへへ、まるで夢のやうだ。オイ、ケース、初公に失禮、すみまへんな」
ケース「ウン、もし高宮姫さま、左守、右守といふことは之は職名でせう。人間を又人間として各自に夫婦を選むのが至當ぢやありませんか。女を左守、右守の職名の附屬物にするとは、チツと變なものですな。これだけは自由結婚にして

頂いたきたいものです。もしそれが出来できねば、ケースを左守さもりにして貰もらひたいものです」
「然しからば宮野みやの姫ひめ、初稚はつわか姫ひめ兩人りやうにんを次つぎの間に控ひかへさしておきますから、ケースに初公はっこうは自由じゆうに妻つまをお選えらびなさいませ。又また女をんなの方ほうにも考かんがへがありませうから、兩方りやうほうから水火いの合あうたものが夫婦ふうふになれば、極きはめて圓滿えんまんに暮くらされるでせうよ」
「イヤ、よく分わかりました。オイ初公はっこう、サア之これから選せん舉ぎ競ぎやう争そうだ。中原ちゅうげんの鹿しかは誰たれの手てにおちるか、ここが一つ獅し子し奮ふん迅じんの活くわつ動どう舞ぶ臺たいだ。ケースの俺おれは上杉うへすぎ謙けん信しんだ。貴き様さまは武田たけだ信しん玄げんだ。川中かはなか島じまを隔へだてて、いよいよ女房にようぼうの争さう奪だつ戦せんだ、イヒヒヒヒ」
徳とく「オイ初公はっこう、ケース、徳とくと考かんがへりやチツとここは怪あやしいぞ。又また狸たぬきにつままれて、ドブへはめられなよ。なア ガリヤ、此この立りつ派ぱな宮殿きうてんのやうに見みえてるが、どうやらすると草くさつ原はらが見みえるやうですな。かう見みえて居をつても、ヤツパリ狸たぬきの巢窟さうくつかも知しれませぬで」
ガリヤ「ナアニ、そんなことがあらうか、結構けつこうな曲輪城まがわじやうの御殿ごてんだ。空助もくすけさまに高たか姫ひめさま、初稚はつわか姫ひめさままでがムこるなもの、そんな心配しんぱいはするものでないワ」
「へエー、妙めうですな」

かく言つてゐる所へ四五人の美人、盛装を凝らして現はれ來り、一人の女は徳公の首玉に喰ひつき、柔かい頬を顔ににじりつけて、

「あのマア徳さまの良い男、あたえ、こんな氣の利いた氣骨のある人は、まだ見たことがないワ、ねえ四人のお方」

四人は一時にうなづく。徳公に喰ひついた女は名をサベル姫といふ。

「徳さま、そんな六つかしい小理窟をいはずに私の居間へ來て頂戴ね。お前は狸と相撲とつたでせう。其時の妄念が残つてゐて、何もかも狸に見えるのですよ。

あたえかて、そんな恐ろしい狸の巣窟にはよう居りませぬワ。あたえが居ること思へば、狸の巣ぢやありますまい。浮木の森のランチ將軍様の陣營の跡ですもの、サ參りませう、サベルと一緒に」

徳は半信半疑の雲に包まれて、暫く思案をしてゐたが、サベル姫の容貌は何うしても捨て難く思はれ、たうとう戀の曲者に捉はれて、目尻を下げ、サベル姫の居間に導かれて行く。徳は立派な一間に請ぜられ、サベル姫と共に、喋々囁々として甘き囁きを續けてゐた。そこへ以前の四人の美人、ドアを開けて入り來り、

「アレマア姉さま、色男の獨占はチツと殘酷ですワ。私も徳さまの女房になりま
す……あたえも……わらはも……」

と四方より徳一人の體に喰ひ付き、耳を舐めたり、手を舐めたりして戀しがる。
徳公は魂が有頂天となつて、耳を咬み取られ、指を嚙られて居るのも、少しも痛
痒を感じず、口を立方形にあけて涎をくつてゐる。耳や爪先から血をチウチウと
吸はれて段々青くなり、よい氣分になつて、ぐつたりと寝て了つた。ガリヤは何
處までも此正體を見届けねばおかぬと、一分の間も心の中に神言をきらさず稱
へながら、呆けたやうな面をして様子を考へてゐた。高宮姫は……このガリヤは
容易に喰へぬ奴だ、此奴をうまく説き付けねばなるまい……と全力を盡してゐる。
「ガリヤさま、貴方はバラモン教でも智勇兼備の勇士と承はりましたが、何とは
なしに威風凜々として四邊を拂ふ御人格者でゝいますねえ。實の所は吾夫高宮彦
さまも、お前を自分の代理にしたいものだ、それはそれは懇望して居られます
よ。どうか副城主になつて下さる譯には行きませぬだらうか」

ガリヤは詐つて承諾し、一切の様子を突きとめむと思ひ、ワザと嬉しさうな聲

で、

「私の様な不調法な者が、何うしてそんな尊いお役が勤まりませうか。身分不相應なことを致して後で失敗るよりも、一兵卒として低う仕へるのが、私の身の爲に最も安全でムいます。何卒そればかりは平に御免を蒙りませう」

「そんな廻りくどい辭令を用ゐるよりも、本當のことを言つて下さい。お前は何と云つてもヤツパリ副城主の方がお望みでせう。此忙しい時節に、そんな探るやうなことをいはずに、素直に承諾なさるが宜しからう」

「私のやうな者が、そんな役になれば、世間の人間は狸が化けたと言ふでせう。狢猴が冠したと笑ふでせう。併しながら人は何とも云はば云へ、吾心根は神のみぞ知る……と云ふ譬もムいますれば、喜んでお受けを致しませう」

「結構々々、それでこそお前も男があがる。高宮彦さまも嘸お喜びでせうねえ」と後振向けば、高宮彦は最早其場に姿は見えなかつた。高宮姫は、

「アレまあ」

と驚きの聲を放ち、ガリヤを後に残り、慌しく夫の後を追うて奥に入る。

あとにガリヤは只一人兩手を組み吐息を漏らして、どうしても此處は魔窟に違ひない。何とかして暴露させてくれむものと考へ込んでゐた。そこへドアを押開け入り来る妙齡の美人があつた。これはサベル姫である。ガリヤは、
「ああ貴女はサベル姫さま、こんな所へお越しになると、徳公さまが氣を揉みますよ、ハハハハハ」

「ホホホホ、あたえ、徳公さまが嫌ひで嫌ひでたまらなくつて、逃げて來ましたのよ。あたえのラブしてゐるのは、ガの字のつくお方ですワ、ホホホホ」と赤い顔に袖をあてて俯く。

(大正一二・二・一〇 舊一一・一二・二五 松村眞澄録)

第二章 空走(一三五八)

ガリヤはサベル姫の口許に赤い生血がついてゐるのを見て、いよいよ此奴ア不

思議な奴と目を注いだ。サベルはガリヤに睨みつけられ、ビリビリと身慄ひしながら、俄に笑ひ聲、

「ホホホホ、あのマア男らしいお顔わいの、なぜ其様に私を睨ましゃんすのですか」

「お前の口許に赤い血がついてるので、不思議だと思つて覗いたのだ」
サベルは驚いて、小袖の袂で唇を拭き、

「これは紅をつけましたの、餘り慌てたものですから、つひ流れまして、無細工な所を、貴方に見付けられたのですよ。どうです、貴方はお厭ですか」

「厭でも何でもありませんが、私は人の耳にかぶりついたり、玉にキツスするやうな化女は嫌ですよ。徳は何うなりましたか、随分満足して居るでせうな」

「ハイ、徳さまは四人のお方に一任しておきました。私、本當にガの字のついた人が好きでたまらないのですよ。ねえ、貴方、餘り憎うはありますまい」

と云ひながら、ガリヤの耳に喰ひつかうとした。ガリヤはサベルの腕をグツと握つてみれば、象牙細工のやうな光つた腕と見えてゐたのは、毛だらけの古狸の手

であつた。ガリヤは全身の力を籠めてグツと握り、チツとも放さぬ。サベルは忽ち正體を現はし、古狸となつてヂタバタ體をもがいてゐる。ガリヤは直に懷より細紐を取出し、四つ足を固く括つて、天井裏に吊り下げて了つた。そしてケース、初の兩人を此處へ引寄せて、目を醒ましてやらうとの考へであつた。狸は一生懸命に悲鳴をあげて泣き叫ぶ。此聲に驚いてやつて來たのは、妖幻坊と高姫の二人であつた。

妖幻「ヤア、ガリヤさま、コリヤ何ですか、えらいものが手に入りましたな」

「ハイ、狸汁でも拵へて一杯やつたら、随分甘いことでせう。サベル姫なんて、うまく化けよつて、吾々の耳を咬み取らうと致した曲者ですよ。ここに澤山ある美人は皆狸ばかりでせう。どの女もどの女も、一齊に耳が動いてるぢやありませんか。ヤ、お前さまも耳が動きますね」

「アハハハハ、何分空氣の動搖が烈しい所ですから、身體の末端が風に揺られて動くのでせう。併しながら此狸は私が手料理致しますから、お任せ下さい」と云ひながら狸を下げて次の間に行かうとする。高宮姫は吃驚して、一言も言は

ず……あのサベル姫が狸であつたか、何とマア油斷のならぬものだなア……と秘かに舌を巻いてみた。高宮彦は無理無體に古狸を引抱へ自分の居間に姿を隠した。これは綱を解いてやつて自分の家來を助ける爲である。サベルに化けてみたのは幻相坊であつた。それからガリヤはケース、初公の密談の居間へ行つて様子を探らうと、磴蛩音を忍ばせ壁に耳を當てて聞いてみると、四人の男女が金切聲を出して、甘つたるい言葉つきで何か意茶ついてゐるやうである。室内の四人はガリヤが外に立つて様子を聞いてゐることは夢にも知らず、現をぬかして、女の取合、男の取合に火花を散らして正に戦ひ酣なる時であつた。天下分目の關ヶ原、天王山の晴戦は今や瞬間に迫れりといふ調子で、あらゆるベストを盡し、夢中になつてゐる。

「初稚姫のあたえは、何と云つてもケースさまが好きです。そして初さまもヤツパリ好きですワ」

「エへへへへ、オイ初公、どうだ、ヤツパリ、ケースのものだらう。貴様は宮野姫で辛抱せい」

「馬鹿云ふな、俺は初から初稚姫さまにきめてあるのだ。宮野姫さまはお前のものだよ」

「何と云つてもケースの妻は初稚姫さまだよ」

「私は誰が何と云つても、ケースさまが好きですよ。そして初さまも、ヤツパリ好きですワ、宮野は二人を夫に持ちますワ」

「初稚も二人とも夫に持ちますワ」

「何と、色男に生れて来ると苦しいものだなア。何でこんな良い男に、親の奴、生みやがったのだらう。チツと子の迷惑も考へて製造すると可いだけれどなア。有難迷惑だ」

と調子に乗りケースは自惚れてゐる。ガリヤはたまらなくなつて、無理にドアを押しあげ、飛込んで見ると、ケース、初の兩人は、古狸に耳たぶをスツカリむしり取られ、血みどろになつて倒れてゐる。古狸は逃げ場を失ひ、鼠のやうに室の隅をクルクルと駆け廻る。ガリヤは漸くにして一匹の狸を押へた一刹那、二の腕にかぶり付かれ……「アイタタ」と云つて放した途端に、二匹の古狸は一生懸命

に姿を隠して了つた。暫くすると宣傳歌の聲が涼しく聞えて來た。

「ウー　ワンワン」

と猛犬の聲。四邊を見れば、ガリヤは草奔々たる萱野の眞中に立つてゐた。そして、ケース、初の兩人は顔一面泥まぶれとなり、耳たぶを半分ばかり咬み取られ、血みどろになつて呻いてゐる。宣傳歌の主は眞の初稚姫であつた。そして愛犬スマートは前後左右に驅け廻り、古狸を追ひ驅け、咬み殺す其勢ひに、流石の妖幻坊も幻魔坊、幻相坊もゐたたまらず、曲輪の術を以て、高宮姫を雲に乗せ、空中に赤茶色の太い尾をチラチラ見せながら、東南の天を指して歸つて行く。竹藪の中には蜘蛛の巣だらけになつて、ランチ、片彦將軍は青い面して慄うてゐた。徳公は耳たぶを「むし」られ、大の字になつて、シクシク原にふん伸びて居た。

初稚姫はガリヤに向ひ、

「貴方は三五教の信者ぢやありませんか」

「ヤ、もう面目次第もムいませぬ。狸の巣窟と知りながら、一つ調べてやらうと思ひ、ここまでやつて参り、反對にしてやられました。貴女は眞の初稚姫様でム

いますか。貴女の御神力に依りまして、吾々一同の目が醒めました。有難うムい
ます」

と感謝してゐる。そこへランチ、片彦兩將軍は徳公を助けて入り來り、初稚姫の
前に危難を救はれしことを涙と共に感謝し、これより心を取直し、祠の森を指し
て進む行くこととなつた。初稚姫は六人の者によくよく眞理を説き諭し、スマー
トを従へて、宣傳歌を歌ひながら西南を指して別れ行く。

(大正一二・二・一〇 舊一一・一二・二五 松村眞澄録)

第五篇 洗判無料

第二三章 盲動(一三五九)

一しきり雨が降るかと思へば、又一しきり晴れわたる秋の時雨の季節を現はした八衢の關所に、文助は口八臺に腰打ちかけて、此關門を通る數多の精靈の審判を、胸を轟かせながら聞いてゐた。そこへやつて來たのは、顔に白粉をベツタリとつけた、高慢さうな面付をした婆アである。文助は不思議な奴が出て來たものだ。ア、さぞ彼奴の審判は面白だらうと、稍興味を以て待つてゐた。これは肉體のある精靈とみえて、稍俯いてヒヨロリヒヨロリとやつて來る。關所の門にトンと突き當り、額を打ち、

「アイタタ、こんな所に、斷りもなく赤門を拵へ、通行人の頭を打たすとは以ての外だ。日の出神の義理天上さまがお通り遊ばすのに、何と云ふ不都合だ……ヤアお前はここの門番と見えるが、なぜ職務を大事に致さぬのかい。こんな怠惰な事をして居ると、日の出神が承知致しませぬぞや」

とエライ權幕である。文助は日の出神といふ聲を聞いて、よくよく透しみれば高姫であつた。高姫は妖幻坊にかつ攫はれ、空中を翔り行く途中に於て、デカタン高原の或地點で妖幻坊に取放され、空中より砂つ原に顛落して氣絶してゐた。其

あひだに精霊が此處へ迷うて來たのである。されど高姫は自分が正氣を失つた事も、靈界へ來てゐることも少しも氣がつかず、依然として現界を歩いてゐるやうな心持であつた。赤色の守衛は大喝一聲、
「高姫、暫く待て、取調べることがある」
と呶鳴りつけた。

「ヘン門番の分際として、義理天上日の出神様を取調べるとは片腹痛いわ。それよりも此方から取調べにやならぬ事がある。三五教の三羽鳥の一人、時置師の神様を何處へ隠したか。サ、キツパリと白状しなさい。グツグツ致すと、天の八衢はまだおるか、地獄の釜のドン底へ墮しますぞや」

「其方はデカタン高原に於て、妖幻坊といふ惡魔のために空中から取落され、氣絶を致して此處へやつて來た亡者であるぞ。最早此處へ來れば冥土の規則に従はねばならぬ。これから其方の罪状を調べるに依つて、包まず隠さず申開きを致した方がよからうぞ」

「オホホホ、あのマア鹿爪らしい顔わいの、一石の米が百兩するやうな、其し

やつ面は何だい、お前も餘程此頃は生活難に襲はれて、會計が辛いと見える。日の出神の義理天上さまに従うて來れば、此世の中に不景氣もなければ心配もいりませぬ。三千世界の救ひ主、日の出神の生宮高姫さまでゐるぞや。さてもさても、世の中に可哀相な人民が澤山あるものだなア。これだから一時も早く現界、幽界、神界の立直しを致さねば、五六七神政成就は致さぬと仰有るのだ。ああ、世界中の人民を助けねばならぬ日の出神様も、此高姫の肉宮も、竝大抵ぢやありませぬワイな、ああ惟神靈幸倍坐世[㊦]

赤の守衛は、餘りきつい高姫の脱線振に、取調べる譯にも行かず、又生死簿には死んでゐない、近き中に現界へ歸る奴だから、本眞劍に調べる譯にも行かず、いい加減にあしらつて追ひ歸さむものと思ひながら、

「オイ、高姫、お前はここを何と心得てるか」

「ヘン、釋迦に經を説くやうな事を云ふものぢやありません。馬鹿にするにも程がある。此處は大門神社の一里許り手前ぢやないか。お前達は素盞鳴尊の厄雜神の眷屬だらう。こんな所にしやちこ張つて居るよりも、此義理天上の肉宮の

教をしへを聞きいて、一度大門開いちどおほもんびらきの御用ごように立たつたら何どうだ。結構けつこうな事ことを聞きかしてやるぞやや」

文助ぶんすけは高姫たかひめの袖そでを引ひいて、

「モシモシ高姫たかひめさま、珍めづらしい所ところでお目めにかかりました。私わたしは三五教あななひけうの文助ぶんすけでこい
ますよ」

「ヤア、最前さいぜんから怪體けつたいな男をとこが居ゐると思おもうたら文助ぶんすけだな。ても扨さても淋さびしさうな面つらをして、こんな所ところに何なにをしてゐるのだい。サ、文助ぶんすけどん、高姫たかひめに跟ついてこい。ウ
ライ教けうの誠まこと生粹きつすみを聞きかして上げあげよう。こんな赤面あかづらや青瓢筆面あをべうたんづらが、何なにを知しつてゐ
るものか。世よの元もとの根本こつぽんの根本こつぽんの元もとを搦つかんだ、此高姫このたかひめぢやぞえ。途中とちうから湧わいた
神かみや、學がくで知恵ちゑの出来できた鼻高はなだかが、何どうして誠まことの事ことが分わかるものか。……聞ききたくば
訪たづねてこい。神かみが表おもてに現あらはれて、義理天上日ぎりてんじやうひの出神でのかみ、高宮姫命たかみやひめのみこととなつて、世界せかいの
事ことを何なにもかも説といて聞きかすぞや。……こんな門番もんばんを致いたして居をるやうな、途中とちうの鼻
高だかに、へん、神界しんがいの誠まことが分わかつてたまりますかい。サアサア文助ぶんすけどん、私わたしに跟ついて
ムれこい」

赤あか 高姫たかひめ、まだ其方そのほうがここへ來るのはチツと早いはや。これから現界げんかいへ歸りかへ、充分じゅうぶんに狂態きやうたいぶ振りを發揮はつきし、手ても足あしも出でなくなつてから始はじめて氣きがつくだらう。さうすれば三五教あななひけうの尊たふとい事ことや、素盞すさのをのみこと鳴尊のたま様の御心みこころが分わかるであらう。事務じむの妨さまたげとなるから、トツトと此處ここを立たち去され」

「ヘン、赤あかさまは、私わしが居をると都合つがふが悪わるいでせう。ハハア、ここは案あんに違たがはず、ヤツパリ三五教あななひけうの門もん口ぐちだな。時置師ときおかしの神様かみさまを、うまく引張ひっぱり込こみやがつたに違ちがひない。挺てこでも棒ぼうでも動うごきは致いたさぬぞや。ササ早はやく時置師ときおかしの神様かみさまを、此處ここへ出だして下くだされ」

「時置師ときおかしの神様かみさまは、齋苑いその館やかたの總務そうむをしてごゝるのだ。まだ現界げんかいにゐらつしやるから、此處ここへお越こしになる筈はずがない。さてもさても分わからぬ代物しろものだなア」
「ヘン、うまい事こと仰おつしや有ありますワイ、ホホホホ、流石さすがは變性へんじやう女子によしの惡あくの教をしへを腹はらへ締め込しこみて居をるとみえて、上手じやうずに嘘うそをつきますな。そんな事ことにチヨ口くちまかされるやうな義理ぎりてんじやう天上てんじやうぢやムりませぬワイな、赤あかさま」
と目めを細ほそうして頤あごをしゃくつて嘲弄てうりやうする。

文助「モシ高姫さま、此處は冥土の八衢の關所ですよ。決して現界ぢやありません。ぬから、そんな事を言ふものぢやありません。ササ、トツトと歸りなさい。そして三五教にお詫をして誠の魂に立歸り、改めて天國に昇れるやうに御願ひなさりませ」

「ようマア、文助どん、【しらばくれ】ますね。お前も餘程變性女子の靈が憑つたとみえますワイ。嘘は一つも言はれぬお道ですよ。嘘で固めた三五の道、オホホホ、高姫誠に感心致しました。お前は目が悪いから、夢でも見て居るのだから。チツと確りしなさらぬかいな」

と横面をピシヤピシヤと撲りつけた。文助は少しばかりムツとして、
「コリヤ高姫、これだけ事を分けて知らしてやるのに、まだお前は分らぬのか。なぜお役人さまの言葉を守つて歸りなさらぬのだ。皺だらけの面に白い物を塗つて、何だ。まるきり氣違ひの所作ぢやないか」

「ヘン、お構ひ御無用。これでも、トさまが可いと仰有るのだから、別にお前の様な盲共に見て貰はなくても宜しい。サ、之から奥へ踏み込んで、トさまにお目

にかかり、厭でも應でもウライ教へ連れて歸らなおきませぬぞや。かう見えても、此高姫は今迄とは違ひますぞや。曲輪城の城主高宮彦の妻、高宮姫とは日の出神の生宮の事だ。そんな事を言はずに、一遍浮木の森の曲輪城まで私に從いて來てみなさい。いかなお前でも、あの御殿を見たら吃驚致すぞえ。神變不思議の曲輪の法によつて、中天高く飛行の術を習ひ覺えた此高姫、最早天下に恐るる者はチツともありません。どうか其積りで交際つて下さいや」

と高姫は浮木の森の妖怪の「ばれ」た事はまだ氣がついて居らぬらしい。斯かる處へ大きな獅子に乗つて驀地に天の一方から降つて來たのは、まがふ方なき空助であつた。

高姫は此姿を見て大に喜び、

「ホホホホ、お手柄お手柄、空助さま、お前は何うしてマア、それ程偉いお方になつたのだ。これほど猛惡な唐獅子を自由自在に使ふとは、ヤツパリ私の夫だな。コレ文助どん、アレ御覽、曲輪の法力によつて、あんな離れ業が出来るのだもの、ウライ教は偉いものでせう。三五教の奴に一人だつて、こんな事が出来る

ますか。初稚姫や治國別、言依別や東助に、空助さまの、天晴武者振を見せてや

りたいものだなア。エへへへへ、南無空助大明神様

と手を合はして拜む可笑しさ。空助は獅子の背からヒラリと飛びおり、高姫には

目もくれず、赤の守衛に向ひ、

御役目御苦勞です。一寸伊吹戸主神様にお目にかかりたいと、三五教の空助が

申し入れたと傳へて下さい

赤の守衛は幾度も腰を屈め、敬禮を表しながら走早に門内に入る。高姫は空助

の言葉に少し合點の行かぬ節があるとは思へども、ワザとあんな事を言つて居る

のであらう、空助さまは洒落が上手だから……と心の中にきめて了ひ、

コレ空助さま、ええ加減に洒落ておきなさい。齋苑の館の東助に放り出され、

アタ汚らはしい、三五教の空助なんて、言ふものぢやムりませぬぞや。サア、一

緒に歸りませう

高姫殿、お前さまは妖幻坊にチヨ口まかされ、其惡魔を空助だと思ひ詰め、隨

分狂態を演じてるやうだが、此空助にはお前さまに會つて、ウラナイ教の話をし

た事もなし、又祠の森で面會した事もない。まして曲輪城などには足踏みも致して居らぬから、よく胸に手をおいて、眞偽の判別を願ひたいものだ」

「ホホホホ、白々しい、空さまの言ひ様、人の前だと思つて、そんな體裁を作るものぢやありませんぞや。コレ高宮彦さま、そんな六ヶしい顔せず、ササ早く曲輪城へ歸りませう。コレ文助どん、何うだえ、高姫の三國一の婿といふのは、此空助さまだぞえ。三羽鳥の一人と聞えたる時置師神様、今はウラナイ教の大教主、曲輪城の城主様だ。サ、私に従いてムれ。昔の厚誼で、キツと立派な役に上げてよう。小北山の受付位して居つてもはづみませぬぞや」

文助「ああ、困つた人だな、盲と氣違と馬鹿位始末に了へぬものはないワ。私も、モツと高姫さまは偉い人だと思つて居つたに……現在八衢へ來てゐながら、執着心が深い爲、ヤツパリ娑婆だと思つてゐるらしい。ああ氣の毒なものだなア」と呟く。高姫は耳敏く之を聞き取つて、

「ヘン、氣違だの、馬鹿だのとよう仰有いますワイ。オホホホ、日の出神の心の鏡にお前の迷妄暗愚な魂が寫つたのだよ。……人の事だと思つてゐると皆吾事

であるぞよ。今の人民は皆盲聾ばかりであるぞよ。日の出神が現はれて、夜の守護の世の中を日の出の守護に致し、五六七の世が参りたならば、盲も目があき、聾も耳が聞えるやうになるぞよ……と變性男子の筆先にも現はれてみませうがな。日の出神の眞似の筆先にもチヤンと出てますよ。……コレ空助さま、エエ加減に【とぼ】けておかんせいな」

かかる所へ赤の守衛は恭しく空助の前に現はれ、

「三五教の空助様、伊吹戸主神様が、早速お目にかからうと仰有います。サ、私に從いてお越し下さいませ」

「ハイ有難うムいます。此ライオンは暫く御預りを願ひます」

「ハイ宜しうムいます。叮嚀に保護致します。コレ白さま、お前さま此處に守つてみて下さい。……サア空助様、かうお出でなさいませ」

と先に立つて行かうとする。空助も後に從ひ門を潜りかけた。高姫は袖にすがり、金切聲を出して、涙交りに、

「コレ空助さま、餘りぢやムんせぬか。ここは三五教の奴等の集まる場所、なぜ

あれ程固い約束をしながら、今となつて變心をなさるのだえ。義理天上日の出神

は恐れませぬか

高姫さま、拙者は拙者の権利を以て、伊吹戸主様にお目にかかるのだ。貴女は

之からお歸りなさい

と行かうとする。高姫は袖に喰ひついて放さず、

「イエイエ何と仰有つても、此高姫の目の黒い中は、一足たりとも、三五教の門

は潜らせませぬぞや。アンアンアン、男の心と秋の空、變ると言うても

餘りだ。エーエ残念や残念や、クク口惜しい

「アハハハ、何と、面白い芝居を見せて貰うたものだ。ああ文助殿、拙者の後へ

ついてムれ

と言ひながら、ポンと蹴れば、高姫は思はず裾を放し、二つ三つコロコロコロと

街道に毬の如く轉げて、其終點でパツと大の字に擴がり倒れて了つた。

空助、文助は門をガタリと締めて、奥庭へ姿を隠した。高姫は大の字になつて、

手足を動かさせながら、

「このをんな
此女は、元を糺せば、變性男子の體をかつて、生れ出でたる常世姫命の再來、
高宮姫。若い時から、男女と綽名を取つたヤンチャ娘、一度は東助さまと夫婦に
なり、子までなしたる仲なれど、餘り東助の心が無情冷酷なるが故、齋苑の館で
キツパリ暇をくれて、祠の森に立歸り、空助さまと夫婦となり、今は浮木の森に
曲輪城を築き、高宮姫と名を改めてウラナイ教の神柱、先をみてゐて下されよ」
と大音聲に呼ばはつてゐる。八衢へ來る精靈は此聲を聞きつけ、各歩を急ぎバラ
バラと驅けつけた。

(大正一二・二・一〇 舊一一・一二・二五 松村眞澄録)

第二四章 應對盜(一三六〇)

十五六人の精靈は忽ち高姫の周圍に集まり來つて、ワイワイと喚いてゐる。高
姫は漸くにして立上り、道端の方形の石に腰打ち掛け、十數人の人を前におきな

がら、脱線だらけの宣傳を始めかけた。

「コレコレ皆さま、高姫が大道演説を致しますから、よつくお聞きなされ。此世の中は素盞鳴尊の惡神の爲に、天の岩戸はピツタリとしまつて、惡魔は天下に横行し、魑魅魍魎充滿する暗黒世界ではありませんか。此世を此儘にしておいたならば、結構な此お土の上は、忽ち餓鬼道、畜生道、修羅道、地獄道に陥りますぞや。お前さま等は、營々兀々として、私利私欲のために日夜奔走し、欲にからまれ、疲れ切つて顔色憔悴し、殆ど餓鬼のやうでムいますぞ。此世からなる地獄道の苦しみを致しながら、こんな結構な世はないと申して喜んでムる其憐れさ。至仁至愛の大神様は此慘状をみるに忍びず、時節参りて、永らく艮の隅に押し込められてムつた艮の金神大國常立尊様が稚姫君命の靈の憑りた變性男子の肉宮をかつて、三千世界の立替立直しを遊ばすやうになりましたぞや。それに就いては、世に落ちてムつた八百萬の神様を世にあげて、それぞれお名をつけ、祭つて上げねば神國にはなりません。今度のお役にお立ち遊ばすのは、永らく龍宮の海の底にお住ひなされた乙姫殿が第一番に改心を遊ばして、義理天上の日の出神と引添

うて、外國での御用を遊ばすなり、金勝要神は大地の金神様で、餘り我が強うて、汚い所へ押し込まれ、雪隠の神とまで成り下り、今度世に上げて貰うても、ヤツパリ我が強いので、御大望の邪魔になるばかりで、どうにもかうにも仕方がないので、系統の靈を世に落して義理天上の生宮となし、大將軍様の憑つた肉體を夫と遊ばして、三千世界の御用にお使ひなされたなれど、此大將軍様の肉宮はチツとも間に合はぬによつて、三五教の三羽鳥と聞えたる時置師神様を、此肉宮の夫と致し、立替立直しの御用を遊ばす仕組でムるぞや。それに就いては大廣木正宗殿の靈も御用に使うて、結構な五六七の世をお立て遊ばすのだから、此高姫は三千世界の救主、皆さま耳をさらへて、よつく聞きなされ。八岐大蛇も金毛九尾の悪神も、グツと肚へ締め込んで改心をさせるのが、日の出神の生宮だ。世界の人民は皆盲だから、此結構な肉宮の申すことが耳には入らうまいがな。改心するなら、今の中ぢやぞえ。後の改心は間に合はぬぞや。此中で誠の分りた人民があるなれば、手を擧げてごらんない。喜んで此方の眷屬と致して結構な御用に使ふぞや』

群集ぐんしふの中なかより又またツと顔かほを出だしたのは、お年としであつた。お年としは高姫たかひめの前まへに進すすみ寄より、其手そのてをグツと握にぎり、

「モシ高姫たかひめ様さま、父ちちが生前せいぜんに御世話おせわになりまして有難ありがたうムります」

「お前は誰たれだか知らぬが、これだけ澤山たくさん居ある中うちに、此生宮このいきみやの言いふことが分わからぬ盲めくらばかりだとみえて、手てを擧あげと申いうても、一人ひとりも手てを擧あげる餓鬼がきやありませぬワ
イ。それに又またお前は奇篤きとくなことだ。一體誰いつたいたれの娘こだい」

「ハイ、文助ぶんすけの娘むすめでムいます」

「ナニ、文助ぶんすけの娘むすめに……そんな大おほきな女をんながあるものか、此奴こいつア不思議ふしぎだなア……
ハハア、分わかつた、あの爺ぢい、素知そしらぬ顔かほをして居をつて、秘密ひそみよで女をんなを拵こしらへ、こんな子こを生うんどきよつたのだな。何なんとマア油断ゆだんのならぬ男をとこだわい、オホホホ」

「イエイエ、私わたしは三みつつの年としに現界げんかいを離はなれて、此處ここへ來きた者ものでムいます。お蔭かげで此この様やうに立派りつぱに成人せいじん致いたしました」

「ハハア、妙めうな事ことを云いふ女をんなだな。お前まへキ印じるしぢやないかい。どこともなしに文助ぶんすけによく似にてゐるやうだが、おとし子こなれば、こんな子こがあるだらうが、三みつつの時ときに

死んだものが、此世に生きてる筈がない……ハテナア

高姫様、此處は冥土の八衢でムいますよ。決して現界ぢやムいませぬ。かうして澤山の人が此處に集まつてゐるのも、皆現界と幽界の精靈ばかりですワ

一寸待つておくれ、一つ考へ直さねばなるまい。さう聞くと何だか、そこらの様子が違ふやうだ。お前が三つの年に靈界へ來て、こんなに成人したとは、テモ儲も不思議なことだ、ウーン

と舌をかみ、首を傾けて思案にくれてゐる。白色の守衛は、大勢の者を一々手招きした。先づ第一に招かれて近寄つたのは、八十ばかりの杖をついた老爺である。

其方は何と云ふ名だ

ハイ私は敬助と申します

どつか具合が悪いか、チツと顔色が悪いぢやないか

何だか、停車場のやうな所へ行つて居つたと思へば、私の胸に行當つたものがある。其際に、ハツと思つたと思へば、いつの間にか斯様な所へやつて來ました

□ 年齢は幾つだ」

□ ハイ六十歳でムいます」

□ 餘り頭が白いので、八十ばかりに見えた。お前は餘程ハラの悪い男だなア、エ
ルサレムの宮を部下の奴に命じて叩き潰したのは其方だらう」

□ イ工滅相な、決して私ぢやありません。片山君が命令を致しましたので、其命
令を聞かねば、到底、泥棒會社の社長が勤まりませぬので、止むを得ず部下に命
令を致しました。決して主犯ではムいませぬ」

□ さうするとお前は従犯だな。ヨシヨシ、此奴ア容易に俺の手には合はぬ。伊吹
戸主神様に、嚴格なる審判を御願ひするであらう、サ、此門を通れ」

と白の守衛は門内へつき入れて了つた。白髪の爺はヒヨロヒヨロしながら、屠
所の羊の様に歩み行く。後には細長い六十位な男が白に審判を受けてゐる。

□ 其方は何者だ、ネームを名乗れ」

□ ハイ私は片山狂介と申します」

□ 成程、随分軍閥でバリついたものだな。お前の爲に幾萬の精靈を幽界へ送つた

か分^{わか}らぬ、幽^い界^{かい}にては大^{たい}變^{へん}に名^な高^{たか}い男^{をとこ}だ。これも此^こ處^こで審^さ判^{ぱん}く譯^{わけ}には行^ゆかぬ。サア、奥^{おく}へ行^ゆけッ

と又^{また}もや門^{もん}内^{ない}へ押^お込^こんだ。次^{つぎ}にやつて來^きた爺^{おやじ}は鐵^{てつ}の杖^{つゑ}をついてゐる。

其^{その}方^{ほう}は高^{たか}田^だ惡^{あく}次^じ郎^{らう}ではないか

ハ、私^{わたし}は表^{へう}善^{ぜん}裏^り惡^{あく}の張^{ちやう}本^{ほん}人^{にん}、世^せ界^{かい}一^{いち}の富^{ふう}豪^{がう}にならうと思^{おも}うて、隨^{ずい}分^{ぶん}活^{くわつ}動^{どう}致^{いた}しました。併^{しか}しながら不^ふ慮^{りよ}の災^{さい}難^{なん}によつて、かやうな所^{ところ}へ迷^{まよ}ひ込^こみ、誠^{まこと}に面^{めん}目^{ぼく}次^し第^{だい}

もムいませぬ

其^{その}杖^{つゑ}は鐵^{てつ}ぢやないか、左^さ様^{やう}な物^{もの}を、なせこんな所^{ところ}まで持^もつて來^くるか

これは鬼^{おに}に鐵^{かな}棒^{ぼう}と申^{まを}しまして、現^{げん}界^{かい}に居^をる時^{とき}から、鬼^{おに}の役^{やく}を勤^{つと}めて居^をりました。此^{この}鐵^{かな}棒^{ぼう}を以^{もつ}て、凡^{すべ}ての銀^{ぎん}行^{かう}會^{わい}社^{しゃ}を叩^{たた}き壊^{こは}し、皆^{みな}一^{ひと}つに集^{あつ}めて巨^き萬^{まん}の富^{とみ}を積^つんだ唯^{ゆゑ}一の武^ぶ器^きでムいますから、こればかりはどこ迄^{まで}も放^{はな}すことは出^で來^きませぬ

此^{この}鐵^{かな}棒^{ぼう}はこちらに預^{あづ}かる。サア、キリキリ渡^{わた}して行^ゆけ

滅^{めつ}相^{さう}もない、命^{いのち}より大^{だい}切^じな鐵^{かな}棒^{ぼう}、どうしてこれ^{これ}が渡^{わた}されませうかい

お前^{まへ}が之^{これ}を持^もつてゐると、伊^い吹^{ぶき}戸^ど主^{ぬし}の審^{しん}判^{ぱん}に會^あうた時^{とき}は、キツと地^ぢ獄^{じよく}の底^{そこ}へ墮^お

ちるぞよ。それで此處で渡して行けと云ふのだ。さうすると八衢の世界へおいて貰ふやうになるかも知れぬから」

「滅相もないこと仰有いませ。そんな甘いことを云つて、泥棒しようと思つても其手には乗りませぬぞ。此鐵棒は斯うみえても二億圓の價値があるのです。此鐵の棒から生み出した二億圓、言はば此棒は二億圓の手形のやうなものだ。何時地獄へやられても、これさへあれば大丈夫だ。地獄の沙汰も金次第、如何なる鬼も閻魔も之にて忽ちやつつけて了ひ、地獄界の王者となる重寶な寶だ。何と云つても之ばかりは渡しませぬから諦めて下さい」

かかる所へ、赤面の守衛がやつて來た。

「ヤア、お前は高田悪次郎ぢやな。よい所へ出てうせた。サア、奥へ來い、其鐵棒は門内へ一歩も持込むことは罷りならぬぞ」

「八八八八八、冥土の八衢か何か知らぬが、體のよい泥棒が徘徊するとこだワイ。之は高田が唯一の武器だ。誰が何と申しても放しは致さぬ、放せるなら放してみい。如何なる権力も神力も金の前には屈服致さねばなるまいぞ」

「馬鹿者だなア。靈界に於て、物質上の寶がいるものか。金が霸を利かすのは、暗黒なる現界に於てのみだ」

「それでも、地獄の沙汰も金次第といふぢやありませんか」

「金を以て左右致すのは、所謂地獄の行方だ」

「それ御覽、何れ私のやうな者は天國へ行ける氣遣ひはない。生前より地獄行と覺悟はしてゐたのだ。それだから、地獄へ行けば金の必要がある、何と云つても之は放しませぬワイ」

「さうすると、貴様は天國よりも地獄が可いのだな」

「さうですとも、地獄の方が人間も澤山居るだらうし、金さへあれば霸が利くのだから、どうか地獄へやつて貰ひたいものです。何程地獄だつて、二億圓の金さへあれば何でも出來ますからな」

「さう云ふ不心得な奴に、金を持たして地獄へやる事は罷り成らぬ。ここにおいて行け」

「何と云つても、此奴ばかりは放しませぬよ」

「然らば、此方の力で放してみせう」

「ウン」と一聲靈縛をかけるや否や、高田の手は痺れて、鐵の棒はガラリと地上に落ちた。忽ち高田の手を後へ廻し、

「此應對盜人奴」

と言ひながら、サル括りにし、ポンと尻をけつて門内へ投げ込んだ。高姫は群衆の中から伸び上つて、ニコニコしながら此光景を眺めてゐた。

(大正一二・二・一〇 舊一・一二・二五 松村眞澄録)

第二十五章 戀愛觀(一三六一)

高姫は敬介、狂介、惡次郎の三人が手厳しくコミ割られたのを見て痛快措く能はず、益々調子にのつて口八臺の上に登り、又もや大道演説を始め出した。皆さま、あれをお聞きになりましたか。泡沫に等しき權勢や、地位や、財産を

振りまはし、社會に於て亂暴狼藉を働いた偽善者の末路は、此通りでムりませうがな。皆さまはここを現界と申うてゐますか。ここは靈界の八衢、善惡を調べる所ですよ。お前さま等も常平生から結構な日の出神が現はれてウラナイの道を開き、萬民を救ふべく朝な夕なに口を酸うしてお導き遊ばしたのに……ヘン、あの氣違ひが何を吐す、冥土があつて堪らうか、地獄極樂は此世にムる……等と高を括つてムつたが、今三人行つた奴の様に、ここで十分に膏を搾られ、吠面をかわかねばなりませぬぞや。それだから現界に於て神様のお話をよく聞きなされと云つたのだ。如何です、之でもお前さま等は此高姫の演説を聞く氣はありませぬか。義理天上日の出神様は現界、幽界、神界の救主でムるぞや。何程深い罪があらうとも、此方の云ふ事さへ聞けば、神直日、大直日に見直し聞直して助けて上げるぞや」

赤の守衛は高姫の手をグツと握り、
「こりや高姫、歸れといつたら歸らぬか。大變邪魔になる。どうしても聞かねば、其方を此儘地獄に墮とすが宜いか」

「ヘン、よう仰有いますワイ。何と云つても神界、現界、幽界の救主なる義理天上日の出神の生宮でムりますぞや。餘り見違ひをして貰ひますまいカイ。これこれ皆さま、何程怖い顔して此守衛が睨んだ處で、チツとも驚くに及びませぬよ。然し此高姫の申す事が分らねば駄目ですよ。おい赤さま、チツとお前も高姫の云ふ事を眞面目に聞いたら如何だい」

赤の守衛は煩さくなつたと見え、高姫の手をグツと後へまはし、傍の梧桐の木に縛りつけて了つた。高姫は尚も屈せず、稍怒氣を含んだ聲で、

「こりや、罰當り奴、三界の救主日の出神の生宮を何と致すか。物が分らぬにも程があるぞよ。もう斯うなつて貴様の様な蠅蟲に話をした處が仕方がない。伊吹戸主を呼んで来い。此高姫が噛んで啣める様に誠の道理を聞かしてやらう。さうすればお前も初めて此生宮の御神力が分り目が覺めるだらう」

「エー、仕方がない。白さま、どうか暫く門内へ突つこんでおいして下さい。事務の邪魔になつて仕方がありませんから」

「オホホホホ、出来した出来した、到頭往生致したと見え、空助さまのムる門

内へ入れと云ひよつたな。ヤツパリ高姫さまには敵ふまいがな、オホホホホ

白「さア高姫、縛をほどいてやるから門内へ這入れ」

「ハイ、有難う。順風に帆をかけた様なものだ。之を思へば熱心と云ふものは偉

いものだな」

赤「エー、グツグツ申さずとトツトと這入れ」

「ホホホホ、這入りますわいな。其代り赤のお前さま等の都合の悪い事が出て來

るかも知れませぬぞや。勿體なくも日の出神の生宮を梧桐に縛りつけた大悪は、

伊吹戸主に會うたら屹度告げてやるから、地獄行は覺悟の前だらう。まア喜んで

待つて居なさい。あの、まア心配さうな顔ワイノー」

白は優しい顔に少しく怒りを帯び聲を尖らして、

「こりや高姫、云ふ事があれば後で云へ。さア早く這入らないか」

「ホホホホ、青瓢箪に屁を嗅がしたやうな榮養不良な顔をして、此生宮様を

「高姫云ひたい事があるなら後から云へ……何吐すのだ。チツと身分を考へた

ら如何だい、オツホン」

と女をんなに似合にあはず大手おほてを振り、大股おほまたに歩あるいて門内もんないに姿すがたを隠かくした。

赤あかは男女だんぢよぶ連れの精靈せいれいを手招てまねきし住所ぢゆうしょ姓名せいめいを尋たづねかけた。

「其方そのほうは何なんと申まをす姓名せいめいか」

「ハイ、私わたしはおつやと申まをします」

「其方そのほうは何なんと申まをすか」

「ハイ、私わたしは呆助はうすけと申まをします」

「おつや、其方そのほうは夫をととのある身みを以もつて、此この呆助はうすけと私ひそかに情じやうを通つうじ、斯様かやうな處ところへやつ

て來きたのだな」

「ハイ、理想りさうの夫をととがないものですから、已やむを得えずこんな破目はめになつたのですよ。

今日こんにちの結婚けつこん問題は愛あいの結婚けつこんでなくて財産ざいさん結婚けつこん、門閥もんぱつ結婚けつこん、強迫きやうはく結婚けつこん、強姦がうかん結婚けつこん、

往生わうじやうづくめの無理無體むりむたいの結婚けつこんを強しひる世よの中なかですから、離婚りこん沙汰さたが頻々ひんびんとして起おこ

つてゐます。戀愛れんあいを無視むしした因襲いんしゆ的結婚けつこん法はふは、斯様かやうな問題もんだいを惹起じゃくきする最もつとも重大ぢゆうだいな

原因げんいんの一つひととなるのです。自分じぶんが好すいて自分じぶんが選えらんだ結婚けつこん關係くわんけいならば、それが

假令たとへうまく行ゆかなくても自分じぶん自身じしんに其全責任そのぜんせきにんがあります。出來得できうるだけの努力どりよくを

して現在の結婚生活をもつともつと良きものにしなければなりません。最初から自分以外の者が取計らつた結婚と云ふものは、少しも戀愛味が存在しませぬ。何れ合せものは離れものだと云ふ流儀ですから、離婚の不祥事や、他に情夫を拵へて三角生活を送る様になるのは已むを得ませぬ。皆社會の制度が悪いのだから、自分の意思の合うたもの同志が結婚を自由にしたと云つて、お前さま等にゴテゴテ言はれて堪りますか。女は決して男の玩弄物ぢやありません。ヤツパリ一人前の人格者である以上は男子の壓迫や強壓は許しませぬ。それだから無理結婚の夫を捨てて最愛の呆助さまと隠れ忍んで、耽美生活を味はつてゐたのです。之程分り切つた道理を社會の奴は皆盲目だから、嫉妬半分に、あのおつやは不貞腐れだの、ホームの破壊者だの、阿婆摺女の張本等と下らぬ事を吐きやがるので煩さくて堪らず、呆助さまと相談の上、手に手を取つてライオン川に投身し、靈界に於て完全なるホームを作り戀愛味を味ははうと思つてやつて來た賢明な新しい女です。コンモンセンスを缺いた社會の馬鹿人間は、トランセンデンタルな戀愛の權利を解せない馬鹿者ばかりですから、サツパリ社會が嫌になつて了つたのです。

想思の男女をして自由に結婚せしむるのがワイズ・ペアレントフッドでせう。今日
の親と云ふものは吾子の戀愛までも抹殺しようとするのだから堪らないですよ。
吾々はチャステイテイなラブを以て人生の最大要件と認めてゐるのです。イケ好
かない男子と結婚する位なら、寧ろセリバシイ生活を送る方が何程ましだか知れ
ませぬわ。お前さまも、未だ年がお若い屹度妻君があるでせう。氣に入つた妻
君と添うてゐらつしやいますかな

「こりやこりや女、こんな處で變愛論をふりかざす處ぢやないぞ。之から其方の
罪惡を調べるのだ」

「高竹寺女學校の卒業生で、天才の譽をとつたおつやでゝります。天才と秀才を
兼ねた新しい女だから、到底お前さまの頭へは入りますまい。ホーム・ウエーゼ
リ・ゼヤリーベの分らない、世に遅れた人間にはテンで話にはなりません。ラ
ブ・イズ・ベストを以て吾々目覺めた婦人は大理想としてゐるのですよ。何とま
ア氣の利かない顔して居りますね、ホホホホ」

「此頃の女性には冥官も實に往生だ。何は免もあれ、其方のメモアルを調べてや

るから此方へ来い。高等女學校を高竹寺女學校とは何を云ふか」

「妾の行状を調べるとは、そいつは面白い。純潔な婦人ですよ。サンナム・ボナムの行ひを盡して来た才媛ですから、舊道德の古い頭で御覽になれば罪惡かは知りませぬが、戀に目覺めたニュー・スピリットを有する妾の主義は、世に遅れた、失敬ながらお前さまでは分りますまい。何と云つても人間の世界ではラ・ヴィ・セクシユエルと云つて性的生活を以て第一とするのですから、此位最善の法はありますまい。無理解な親に虐げられて、良心を枉げ結婚した夫婦は、云はば罪惡の最なるものと思ひます。愛なき結婚を強ひられて、朝から晩まで、夫婦がアンタゴニズムの悲劇を演じて居るよりも、想思の男女が互にホーリ・グレイルを傾けて天國の法悦に酔ふのが最も賢明な覺めた婦人のやり方です。お前さまは到底吾々を審判するだけの權能はありませんよ。何卒もう此問題には此上クエーストして下さいな」

赤はあまりの事に呆れ果て、呆助の方に言葉を向けた。

「おい呆助、お前は此おつやを眞から愛してゐるのか」

「ハイ、私はおつやの意見に共鳴して居ります。よく考へて御覽なさい。戀愛と云ふものは至高至上のものでせう。戀愛至上の思想があつて茲に初めて一夫一婦の制度的に確なる精神的、道徳的、合理的基礎を與ふる事が出来るのです。それ以外の一夫一婦論は、所謂偽善説に非ざれば、單なる便宜的、因襲的、實理的の御都合主義か、又は形式主義たるものに過ぎませぬ。斯の如きは少くとも人間として第二義的の考察として取扱はるべき問題となると思ひます。至上至高の性的道徳としての戀愛は二つの人格の全的結合なるが故に、そこに一夫一婦の原則が確認されたとすれば、必然的に之と相即不離の關係をなして生ずるものは所謂貞操觀念でせう。男女が互に貞操を嚴守し格守する事によつてのみ、此一夫一婦が完全に實現せられ得るものです。故に貞操は戀愛の神聖なる擁護者たると共に、又眞の戀愛は必ず貞操が伴ふものです」

「随分猛烈な戀愛關係だのう。嫉妬や悋氣が随分花を咲かしただらうのう」

「世間的物質的の欲望に煩はされてゐない純眞の戀愛の場合に於ては、嫉妬なるものは必ずしも惡徳として非難せらるべきものでなく、寧ろ雙方の純潔を保たむ

とする貞操観念の副作用とも見られるのです。悋氣をせない女は明かに不貞の女
である場合が最も多いものです。それ故吾々は悋氣もしたり、イチヤついてみ
たり、低氣壓が兩人の間に起つたりする事は、幾度か出現しますが、之が所謂貞
操観念の濃厚なる證據であらうと思ひます、エへへへへへ」

「アア、サツパリ煙に捲かれて了つた。御兩人、お目出度う。此先はどうなる
か知りませぬが、先づ伊吹戸主神様の前で諄々と戀愛神聖論でもまくし立てなさ
るが宜しからう。併しおつやの夫は昨日ここを通過したから、嘸今頃は伊吹戸主
神の前でお前等兩人の現界に於ける一切の行動を陳述したであらう。さア早く通
りなさい」

「ハイ、下らぬ事を申しまして誠に濟ませぬ。併しながら吾々兩人の結合力は
極めて硬固なものでムりますから、假令地獄の底へ落されても滅多に分離などは
致しませぬワ」

「エー、八釜しい。そんな問題は審判廷で喋々とまくし立てたが宜からう。早く
通れ」

と一喝した。二人は睦じさうに手を曳きながら、いそいそとして門を潜り入る。

「何とまア脱線した女が来たものだなア。赤さま、之からチツと方針を變へなくちやなりませんまいぞや」

「如何にも白さま、非常に現界には魔風戀風が吹き荒んでみると見えますな。之では到底社會の秩序は保たれますまい。ああ困った事だなア」

（大正一二・二・一〇 舊一一・一二・二五 北村隆光録）

第二十六章 姑根性（一三六二）

次に呼び出されたのはお年であつた。

赤「お前は文助の娘お年であつたなア」

「ハイ、左様でムいます」

「いつ靈界へ来たのか」

「ハイ、三つの年に現界を去り、八衢の世界に於て今日まで成長して参りました」
「其處に居るのはお前の弟か」

「左様でムいます。兩人とも萱野ヶ原で淋しい生活を續けて居りました」

「お前等姉弟は親の罪によつて、天國に往くべき所を長らく修業を致したのだから、これから直に天國にやつてやらう。最早審判廷に往く必要もない。暫く待つて居るがよい」

と云ひ放ち白に目配せした。白は直に門内に駆け込んだ。暫くして得も云はれぬ麗しい天男天女が、琵琶や胡弓や縦笛等をもつて、どこからともなく現はれ來り、兩人に麗しき衣類を與へ、不思議なる靈光に二人をパツと包み、微妙の音樂を奏しながら東をさして雲に乗り、光となつて立ち去つて仕舞つた。二人の守衛は其姿を見送つて合掌し、喜びの色を顔に浮べて居る。

赤「いつもかふいふ精靈ばかりがやつて來ると氣分がよいのだがなア。高姫のやうな死損ひの阿婆摺れ女がやつて來ては、サツパリ關所守も手古摺らざるを得ないワ。それに又お艶に呆助、極端のデレ助だから戀の奴となり果て、正邪理非の

辨別も殆どつかない迄に戀愛に心酔して居るのだから、伊吹戸主神様もさぞお困りなさる事だらうなア

「本當に困つたものですか。サアこれから又、ボツボツ調べねばなりませんまい」と云ひながら、白は一番近くに居つた婆の手を引いて赤の前に立たせた。

「お前は柵村のお照ぢやないか、どうして此處へ來たのだ」

「ハイよう聞いて下さいませ。私には天にも地にも只一人の息子がいます。その息子は孝助と云うて、ほんとうに孝行して呉れました。若い時夫に離れ、長い間後家を立て通し、這へば立て、立てば歩めと親心、寝ても起きても忘れた暇はなく、一つ咳をしても肺病になつたのぢやないかと思ひ、寢息が荒くても心臓病ぢやないかと、それはそれはえらい心配して漸く成人させ、優しい女房をもたせて老後を楽しまうと思つて居ました。處が、私の姪にあたるものにお清と云ふ娘がありましたので、それと娶はせました所、二三日の間は夫婦共大切にしてい呉れましたが、それから後と云ふものは孝助の心がすっかり變り、一にもお清、二にもお清と申して、お母さま其處に居るかとも云うて呉れませぬ。そして夜になる

とこの老人を別に寝かせ、自分等二人が抱き合つてグツスリ寝て居るぢやありませんか。自分の大事の息子をお清に取られる位なら、女房に貰ふぢやなかつたにせぬか。自分で最早追付きませぬ。そこで息子の孝助に、親の氣に入らぬ女房はトツトと追ひ出せと申した所、孝助の云ひますのには「今迄は親の云ふ事は何でも聞きましましたが、お清は私の女房でお前さまの女房ぢやないから構はいでもよろしい。老いては子に従へと云ふ事がある。お前はおとなしうして遊んで居れば、私等夫婦が働いてお前さまを養ひます」と云うて憎い憎い嫁を追ひ出さうとも申しませぬ。私が懐に抱いて育てた孝助をお清に自由にされて、どうして私の顔が立ちますか。御推量なさつて下さいませ、アンアンアン」

「ハテ、困つたものだなア」

「本當に困つたものでムいませう。併しながら私の息子に限つて、あんな不孝な者ぢやムいませなんだが、何分嫁が悪い奴でムいますから、何彼と悪い知恵をつけますので、一人しかないこの親に不孝を致します。それが残念さに裏の柿の木で首を吊つてやりました。さうした所、死にまんが悪いと見えて、矢張りこんな

所へ迷うて参りました。死にたうても死なれもせず、本當に因果な婆でムいます、オンオンオン」

「お前の息子夫婦が不孝したと云ふのは、一體何ういふ事をしたのだ」

「ハイ、親の氣に入らぬ事ばかり致します。お清が來てからと云ふものは、些も私と寢て呉れませぬ。それが腹が立つて耐りませぬ。親の氣に入らぬ事をするのは不孝ぢやムいませぬか」

「そりや夫婦同衾するのは當然ぢやないか。何でそれが不孝に當るのぢや。お前は姑根性を起して法界悋氣をして居るのだらう」

「滅相な、なんでそんな事を致しませう。私は孝助の身の上を案じ、夜分も寢ずに孝助夫婦の身の上を考へて居りますれば、お清の奴、大事の大事の息子をハアハア云ふ目に遇はせ、虐待めて泣かしますので腹が立つて耐りませぬ。どうしてあんな事を親が見て居られませうか、御推量下さいませ。私のやうな不仕合せなものはありません。夫には早く別れ、一人の子に粗末にされ、嫁には情なく當られ、どうして生きて居られませうかいなア、アンアンアン」

赤の守衛は口をへの字に結んだきり、横に長い帳面を開いて見てニタリと笑ひ、

「これこれお照、お前は随分嫁をイチつたなア」

「ハイ、イチりました。向ふの出やうが出やうでムいますもの、姑婆の針いぢりと申して、あまり腹が立つと、木綿針で嫁の尻をチヨイチヨイと突いてやりました。併し、これは姑の針いぢりと昔から諺にも残つて居る所でムいます。些と痛い目に遇はして躑をせねば家のためになりませぬから」

「その方は随分悪黨な婆だ。息子が女房と親密に暮して居るのが腹が立つと見えるな」

「些とは腹も立ちませうかい。お前さまだつて姑の身分になつて御覽なさい。お前さまは役人とみえるが、チツとは老人の鼻肩もして、嫁を叱つて下さつたら好かりさうなものだがなア」

「嫁には些も悪い事はない、お前と息子が悪い、これから一つ成敗をしてやらう」
「滅相な、私の息子に限つて悪いことは塵程も致した覚えはムりませぬ。又このお照も、若い時から貞節を守り、夫の目を盗んで男を拵へたやうな事もなし、よ

く調べて下さいませ」

「お前はお清が朝寝をしたと申して、お清を庭の土間に坐らせ、戸棚からありたけの瀬戸物を出し、一口小言を云つては庭に打ちつけ、又一言云つては打ちつけ、終には土瓶、爛徳利、火鉢迄なげつけてメチャメチャに毀したぢやないか。お清が土間に頭を下げて謝つて居るのに、なぜ左様な亂暴を致したか」

「ハイ、何と云つても自分の家の寶ですから割りたくはありません。初めの間は缺けた茶碗や、「ニウ」の入つた手鹽皿を投げつけたのです。その時氣の利いた嫁なら私の手に取りついて「お母さま待つて下さい」と泣いて留める所ですのに、あのお清は家を思はぬ馬鹿な女ですから一つも留めはせず、謝つてばかり居るので、惜しいて叶はぬあの瀬戸物を、つひ行きがかり上、壊して仕舞つたのです。本當に惜しい事でムいました。決してこの婆が壊したのぢやありません。お清の奴がむかつかしたのが原動力となつて、つひあんな事が出来たのでムいます。本當に心得の悪い女でムいます。私を諫める事はしないで、おしまひには、錦手の立派な鉢まで持つて来て、お母さま、序にこれも割つて呉れと申しますので、エ、

割つてやろうかと思ひましたが、餘り惜しいので上等品だけは残して置きました。そして首を吊る時に考へたのは、こんな瀬戸物やお金まで残して死んでも、皆んな憎らしい嫁のものになるのが惜しいから、紙幣は皆燃やして仕舞ひ、瀬戸物は皆割つて了つてやろうと思ひましたが、何としても可愛い孝助が、困るだらうと思つて、割らずと置きました。お金も臍繰が五百兩ばかりありましたが、この金には書き残して置きました。「このお金は孝助が使ふべきもの、お清は手を觸れる事も出来ない、これをお清が使ふと化けて出る」と書いておきましたから、何ば悪黨な嫁でも、こればかりはよう使ひきりますまい、オンオンオン」

「何とまア、業の深い婆だなア。貴様のやうな悪垂れ婆はキツと地獄行きだらう。さア、キリキリとこの門を潜れ」

「お前さまの様な没分曉漢に云つた所で、老人の精神は分りますまい。さア、これから出る所へ出て、嫁の悪事を訴へ仇を討たねば置きませぬわいなア、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、ああ腰の痛い事だ。ここは何と云ふお役所だか知らないが、こんな若いお役人が何を知らぬものか、一日でも先に生れたら世の中のお師匠さま

だ。どれどれ ちと分る人に會うて、この譯を聞いて貰はう。これ赤白の若い衆、偉いお邪魔を致しました。皆さま、お先イ、左様なら」

と藜の杖をついて海老のやうに腰を曲げ、禿げた頭にお定目ばかりの髪を後に束ね、エチエチと門内さして進み入る。

次に引き出されたのは、腕に入墨をした荒くれ男であつた。

「其方のネームは何と申すか」

「ハイ俺ア、鳶の辨造と云つて世の中に些は男を賣つたものでござんす。如何なる揉め事が起つても、此辨造さまが眞裸となり、捻鉢巻をグツと締め「まつたまつた」とやつたが最後、鶴の一聲、何でも彼でも水をうつた如く、一度に納まると云ふ男達でござんす。一體此處は何と云ふ所でムんすか。ヘン、お前さま等にメモアルを調べらると云ふのは根つから葉つから腑に落ちませぬワイ」

「此處は八衢の關所だ。随分お前も現世に於て亂暴な事をやつて來た奴だから、この衝にかかれ。さうして地獄行きの方が下れば地獄行き、天國行きの方が下れば天國にやつてやらう」

「ヤア、有難テ工、地獄の釜のどん底でもビクとも致さぬ某、根が侠客渡世兼鳶の親分だから、地獄行きが俺の性に合つて居るでせう。どうか衡なんか面倒くせえ事をせずに、すぐ地獄にやつて下せえな、天國なんか性に合はない、地獄には定めし喧嘩もあるであらう、又火事もあるであらう。其時は鳶の辨造が眞裸となつて飛び込み仲裁をし、甘い酒でも飲むに便利がいい。喧嘩鳶の、グツ鳶の、グレン鳶と云はれて来た、チャキ　チャキの兄イだ」

と胡坐をかき、侠客氣分を極端に發揮して居る。

「兔も角靈界の規則だから、この衡に乗つて呉れ、サア早く」とせき立てる。

「よし、幡隨院長兵衛は柳の俎の上に坐つて、白鞘組から生きながら料理をされた例もある。俺達は其幡隨院を理想とするものだ。何でも構はぬ乗つてやらう。些と位好い事があつても、決して天國へやつてはいけなないぞ」

と業託を云ひながら衡にかかつた。衡は兩方、水平になつて、地獄の方も指さず、天國の方も指さず、じつとして居る。

「ハハこいつは比較的善人だ。口で悪垂れを吐くが、善が半分、悪が半分、マアこれなら今日の娑婆では上等の部だ。オイ辨造、氣の毒ながら其方の望む地獄にやる事は出来ぬ。さりとして天國にもやられず八衢人足だ。まづ暫し中有界で修業を致したがよからう。決して地獄行きなどを望むぢやないぞ。其方は審判の必要がない。これから西北の方をさして勝手に行け。又其方相當の相棒が待つて居るであらう」

辨造は梟鳥が夜食に外れたやうな詰らぬ顔をして、

「工中有界なんて氣がきかない、なぜ俺を地獄にやらないのかなア」と呟きながらソリソリと兩腕を振り荒野をさして進み行く。

それから澤山の精靈は一々ネームを訊ねられ、メモアルを繰られ、或は中有界へ、又は地獄へと各其所主の愛に依つて審かれて行く。

（大正一二・二・一〇 舊一一・一二・二五 加藤明子録）

第二十七章 胎藏（一三六三）

時置師神空助は、ライオンを守衛に預けおき、八衢の審判神伊吹戸主の館へ進み入り、奥の一間に於て伊吹戸主と二人對談をやつてゐる。

「ああ時置師神様、随分宣傳はお骨の折れる事でせうなア、御苦心お察し申します」

「ドーモ曇り切つた世の中で、吾々の如き人間は神様の御思召の萬分一も働く事が出来ませぬので、實に慙愧の至りでムいます。つきましては今度お訪ね致しましたのは、神素盞鳴大神様の御命令に依つてでムいます。三五教に居りました高姫と云ふ女、彼の行状に就ては實に困つたものでムいます。兇黨界の精靈、妖幻坊なる妖怪に誑惑され、それをば私と思ひ込み、彼方此方で時置師や空助をふり廻すので世の中の人間が非常に迷ひます。それ故今度靈界へ參つたのを幸ひ、暫くの間現界へ歸さないやうに取計らつて貰ひたいものです」

「成程、大神様の御言葉、何とか致さねばなりませんまい。併しながら彼高姫は、

未だ生死簿を見れば二十八年が間壽命が残つて居ります。靈界に止め置くのは御易い事でありますが、どうしても彼は現界へ還さねばならぬもの、餘り長く止め置けば、其肉體が役に立たないやうになつて了ひます。其肉體を換へても差支なくば、何とか取計らひませう」

「どうか二三年の間此處に御止めを願ひ、三年先になつて靈界へ來るべき女の肉體に高姫の精靈を宿し下さいませう、大變都合が好いでせう」

伊吹戸主神は暫く目を閉ぢ、思案をしてゐたが、やがて打肯いて、

「イヤ宜しうムいます。適當な肉體が三年後に靈界へ來るのがムいますから、その肉體に高姫の精靈を宿し、二十八年間現界へ生かす事に取計らひませう」

「イヤ、それは實に有難うムいます。左様なれば御免を蒙りませう」

「時置師神様、エー今此處へ大原敬助と片山狂助、高田悪次郎などの大惡黨が出て参りましたが、今審判が開けますから、一寸傍聴なさつては如何ですか。高姫

も是から審判が始まります」

「イヤもう、高姫が居るとすれば折角ながら止めませう、ハハハハハ」

「たつて御勸めはいたしませぬ。左様ならば大神様へ宜敷く仰有つて下さいませ。私はこれより審判に参ります。」
とツイと立つて廊下を傳ひ審判廷に行く。空助は守衛を呼んでライオンを曳き來らしめ、ヒラリと背に跨り、ウーツとライオンの一聲邊りを轟かせながら、一目散にウブスナ山の方面指して中空を驅り歸つて行く。

中有界の八衢に 伊吹戸主が永久に

鎮まりまして迷ひ來る 數多の精靈一々に

衡にかけて取調べ 清淨無垢の靈魂は

各所主の愛に依り 高天原の靈國や

三階段の天國へ 靈相應に送りやり

極惡無道の精靈は 直ちに地獄に追ひ下し

善ともつかず又惡に 強からざりし精靈は

一定の期間中有の 世界に廣く放ちやり

いよいよ靈清まりて

高天原に上るべく

愛と善との徳を積み

信と眞との智を研ぎ

覺り得たりし精靈を

皆天國に上しやり

悔い改めず何時迄も

惡心強き精靈は

涙を拂ひ暗黒の

地獄へ落し給ふなり

今現はれし敬助や

片山狂介、惡次郎

右三人の兇惡は

いと嚴格な審判を

下され直ちに暗黒の

地獄の底へ落されて

無限の永苦を嘗むるべく

兩手を前にぶら下げて

意氣消沈の爲體

顔青ざめてブルブルと

慄ひ戦く相好は

忽ち變る妖怪の

見るも淺まし姿なり

後に來りし呆助や

おつやの二人は姦通の

大罪惡を審かれて

色欲界の地獄道

右と左に立別れ

さも悲しげに進み行く

續いて高姫神司

伊吹戸主にさばかれて

此處三年の其間

中有界に放り出され

荒野を彷徨ひいろいろと

艱難辛苦を味はひつ

我情我慢の雲も晴れ

漸く誠の人となり

又現界に現はれて

三五教の御爲に

誠を盡し居たりしが

再び情念勃發し

妖幻坊に欺されて

印度の國のカルマタの

とある丘陵に身を潛め

妖幻坊と諸共に

悪事の限りを盡すこそ

實にもうたてき次第なり

斯く述べ來る靈界の

誠を寫す物語

五十二年の時津風

【みろく】胎藏の鍵を持ち

苦集滅道明かに

説き諭し行く【みろく】神

小松林の精靈に

清き【みたま】を満たせつつ

此世を導く豫言者に

來りて道を傳達し 世人を普く天國に

導き給ふ御厚恩 無下には捨てな諸人よ

三五教の大本に 參來集へる信徒や

百の司は村肝の 心を鎮め胸に手を

當ててよくよく悟るべし ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ 旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

海はあせなむ世ありとも 神のよさしの言靈は

幾萬劫の末迄も 盡きせぬものと覺悟して

これの教をよく信じ 愛と善との徳に居り

信と眞との光をば 世に輝かし惟神

智慧證覺を攝受して 此身此儘天人の

列に加はり人生の 清き本務を盡すべし

神は吾等と俱にあり 神は汝と俱にます

人は神の子神の宮
神より外に杖となり

柱となりて身を救ふ
尊きものはあらざらめ

仰ぎ敬へ諸人よ
神の御水火に生れ來て

神の造りし國に住み
神の與へし粟を食み

神の誠の教をば
心に深く植込みて

束の間も忘るなよ
人の人たる其故は

皇大神の神格を
其身にうけて神界の

御用に仕ふる爲ぞかし
ああ惟神々々

神の御前に赤心を
捧げて感謝し奉る。

惟神神の御言を畏みて

五十二卷を述べ終りける。

教へ子に筆とらせつつ床の上の

寝物語ねものがたりに物ものせし此書このふみ。

いろいと醜しこの妨さまたげありけれど

神かみの守まもりに編あみ終をはりけり。

(大正一二・二・一〇 舊一一・一二・二五 外山豊二録)

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

靈界物語 第五二卷 眞善美愛 卯の卷

終り